

# 山形県文化財発掘調査報告書

昭和48・49年度山形県営農林事業関係遺跡

財団法人  
山形県埋蔵文化財センター



6-2002-1160-01

2002
1160
6

山形県教育委員会

# 山形県文化財発掘調査報告書

——昭和48・49年度山形県営農林事業関係遺跡——

昭和51年3月

# 序

本報告書は、昭和48年度および昭和49年度において、文化課が主体となって発掘調査を実施したものの中、県営の農林関係事業施行に伴う事前調査の結果をとりまとめたものであります。

いずれも現状保存が困難であるため、記録保存を目的としたものであったが、調査完了後地域住民の理解と協力により破壊を免れ、保存できた遺跡等もあります。

このように、遺跡保存のうえで好ましい形となって、現状のまま保存されるきざしがみられることは、文化財保護行政上の大きな前進であると心から喜んでいる次第であります。

今後とも、各種開発事業等による遺跡の破壊は、漸増するものと予想されますが、工事計画との調整にあたって、一人でも多くの人々に埋蔵文化財の持つ価値が理解されるよう、この報告書がその一助となれば幸いと存じます。

なお、この調査にご指導ご協力くださった調査員の方々ならびに地元教育委員会に厚くお礼を申しあげます。

昭和51年3月

山形県教育委員会

教育長 赤星武次郎

## 例　　言

- 1 本報告書は山形県営農林事業に係る埋蔵文化財包藏地について、昭和48年・49年度に山形県教育委員会が実施した発掘調査記録である。
- 2 昭和48年度に発掘調査を実施した遺跡は、第I部・第II部・第III部平形遺跡までで、その他は昭和49年度の遺跡である。
- 3 実測図・拓本図は3分の1を原則とし、スケールを示した。挿図中に使用した記号は下記の例の通りである。

○J—縄文時代の住居跡　　○H—古墳・歴史時代の住居跡

○P—土壙　　PO—柱穴

なお、土層図中の土器・石器を明示するために、それぞれをP（土器）、S（石器または剝片）とした。

- 4 本報告書の執筆は佐藤鎮雄・佐藤庄一・野尻 侃・尾形與典・佐藤正俊・名和達朗・保角里志が行い、編集は野尻 侃・佐藤鎮雄が行った。また、東南村山福祉事務所主事中島 寛氏・長沢礼子・伊藤悦子・安食英司・中村恭子・舟山義彦・石田 肇・佐藤洋一の山形大学学生の皆さんより実測図作成について応援を賜った。

# 目 次

<b>第Ⅰ部 須川西部山辺南部圃場整備事業関係遺跡調査</b>	
第1章 調査に至る経過	1
第2章 二位田遺跡	3
第3章 本沢川II遺跡	23
第4章 寺裏遺跡	29
第5章 大曾根条里遺構	35
第6章 総括	60
<b>第Ⅱ部 最上川地区圃場整備事業関係遺跡調査</b>	
第1章 調査に至る経過	63
第2章 古幡遺跡	65
第3章 返吉遺跡	78
第4章 総括	84
<b>第Ⅲ部 赤川地区圃場整備事業関係遺跡調査</b>	
第1章 調査に至る経過	87
第2章 平形遺跡	89
第3章 横川B・D遺跡	99
第4章 須走遺跡	104
第5章 土清遺跡	109
第6章 助川遺跡	112
第7章 総括	114
<b>第Ⅳ部 庄内東部広域營農団地農道整備事業関係</b>	
第1章 調査に至る経過	117
第2章 三礎林E遺跡	119
第3章 丸山遺跡	136
第4章 総括	141
(付録) 山形県における埋蔵文化財と農林事業	142

# 挿 図 目 次

第1図 須川西部・山辺南部圃場整備事業関係遺跡位置図	2
第2図 二位田遺跡全体図	4
第3図 二位田遺跡遺構配置図	7
第4図 二位田遺跡遺構断面図	8
第5図 1号住居跡	9
第6図 2・3号住居跡	10
第7図 4・5・6号住居跡	12
第8図 二位田遺跡出土土器拓影図(1)	14
第9図 二位田遺跡出土土器拓影図(2)	16
第10図 二位田遺跡出土土器拓影図(3)	16
第11図 二位田遺跡出土土器実測図	17
第12図 二位田遺跡出土石器実測図(1)	19
第13図 二位田遺跡出土石器実測図(2)	20
第14図 本沢川II遺跡地形図	24
第15図 1号住居跡・1号土壤平面図	26
第16図 本沢川II遺跡出土土器	28
第17図 寺裏遺跡地形図	30
第18図 1号住居跡	31
第19図 寺裏遺跡出土遺物	34
第20図 大曾根条里遺構地形図	36
第21図 下反田東地区トレンド配置図	38
第22図 下反田西地区地形図	40
第23図 下反田西地区1号住居跡	41
第24図 下反田西地区1号土壤	42
第25図 下反田西地区2号落込み	43
第26図 下反田西地区出土土器実測図	46
第27図 高橋地区地形図	50
第28図 土層断面図	51
第29図 遺構配置図	52

第30図	1・2号建物跡・1・2・3号土壙・溝状遺構・ピット群平面図	54	第62図	庄内東部広域営農団地農道整備事業関係遺跡位置図	118
第31図	1号溝状遺構・ピット群平面図	55	第63図	三鰐林E 遺跡全体図	120
第32図	高橋地区出土土器	56	第64図	三鰐林E 遺跡遺構配置図	121
第33図	高橋地区出土石器	58	第65図	三鰐林E 遺跡層序図	121
第34図	最上川地区圃場整備関係遺跡位置図	64	第66図	三鰐林E 遺跡1号住居跡	122
第35図	古塚遺跡全体図	66	第67図	三鰐林E 遺跡4号住居跡	124
第36図	古塚遺跡層序図	67	第68図	三鰐林E 遺跡3号土壙	125
第37図	土壤群平面図	68	第69図	三鰐林E 遺跡4号土壙	126
第38図	17区J～L～10～12平面図	70	第70図	三鰐林E 遺跡E～J～10～11平面図	127
第39図	3号溝状遺構	71	第71図	三鰐林E 遺跡土器実測図	129
第40図	出土土器拓影図(1)	72	第72図	三鰐林E 遺跡土器拓影図(1)	130
第41図	出土土器拓影図(2)	74	第73図	三鰐林E 遺跡土器拓影図(2)	132
第42図	出土石器実測図	76	第74図	三鰐林E 遺跡石器実測図	134
第43図	返吉遺跡全体図	79	第75図	丸山遺跡全体図	137
第44図	返吉遺跡層序図	80	第76図	丸山遺跡土層図	138
第45図	返吉遺跡遺構配置図	81	第77図	丸山遺跡1号土壙	138
第46図	返吉遺跡出土土器拓影図	82	第78図	丸山遺跡出土遺物	139
第47図	赤川地区圃場整備関係遺跡位置図	88	第79図	最近5カ年の土木工事等による埋蔵文化財発掘届にみる農林事業の割合	144
第48図	平形遺跡地形図	90	第80図	最近5カ年の埋蔵文化財発掘調査届にみる農林事業の割合	144
第49図	平形遺跡層序図	91			
第50図	平形遺跡遺構配置図	92	付表 1	二位田遺跡出土須恵器計測表	17
第51図	平形遺跡出土土器実測図	94	付表 2	二位田遺跡出土石器計測表	21
第52図	平形遺跡出土土器拓影図	95	付表 3	本沢川II遺跡出土須恵器計測表	27
第53図	平形遺跡出土鉄器実測図	96	付表 4	古塚遺跡土壙一覧表	69
第54図	横川遺跡グリッド配置	100	付表 5	最近5カ年の土木工事等による埋蔵文化財発掘届一覧	145
第55図	横川遺跡遺構図	102	付表 6	最近5カ年の埋蔵文化財調査届一覧	147
第56図	横川遺跡出土遺物	103			
第57図	須走遺跡全体図	105			
第58図	須走遺跡調査区全図	106			
第59図	須走遺跡出土遺物	107			
第60図	須走遺跡遺構図(部分)	108			
第61図	土済・助川遺跡全体図	110			

# 図版目次

図版 1	△二位田遺跡近景	▽住居跡群	図版31	△古橋遺跡 3号溝状構	▽竹櫛出土状況
図版 2	△二位田遺跡 1号住居跡	▽2号住居跡	図版32	△古橋遺跡出土土器	▽石器
図版 3	△二位田遺跡 3号住居跡	▽1~3号住居跡	図版33	△古橋遺跡出土土器	▽木柵
図版 4	△二位田遺跡土器出土状況	▽4号住居跡	図版34	△古橋遺跡出土陶磁器	▽陶磁器
図版 5	△二位田遺跡土器出土状況	▽土器出土状況	図版35	△返吉遺跡発掘風景	▽1号柱穴群
図版 6	△二位田遺跡 5・6号住居跡	▽出土土器 (a・b類)	図版36	△返吉遺跡 2号柱穴群	▽出土土器
図版 7	△二位田遺跡出土土器 (b類)	▽出土土器 (c~e類)	図版37	△平形遺跡近景	▽発掘区中央部
図版 8	△二位田遺跡出土土器 (底部)	▽土製品・石製品	図版38	△平形遺跡発掘中央部	▽発掘区中央部近景
図版 9	△二位田遺跡出土石器 (石錐・石砲)	▽出土石器 (凹面)	図版39	△平形遺跡 4号溝状構土層断面	□ピット10土層断面 ▽遺物出土状況
図版10	△二位田遺跡出土石器 (石錐・両石・砲石)	▽土器 (須恵器)	図版40	△平形遺跡出土須恵系土器 (内面)	▽須恵系土器 (外側)
図版11	△本沢川II遺跡近景	▽発掘風景	図版41	△平形遺跡出土須恵器・陶質土器	▽陶磁器
図版12	△本沢川II遺跡 1・2号住居跡	▽1号土壇	図版42	△平形遺跡出土銚器	
図版13	△本沢川II遺跡土器出土状況	▽出土土器 (須恵器)	図版43	△横川B・D遺跡遠景	▽発掘風景
図版14	△寺裏遺跡近景	▽1号住居跡	図版44	△横川B 遺跡溝跡 (部分)	▽土壤
図版15	△寺裏遺跡出土状況	▽土器・石斧	図版45	△須走遺跡全景	▽発掘状況
図版16	△寺裏遺跡出土土師器	▽須恵器	図版46	△須走遺跡発掘風景	△G H -17区 △K L -15区
図版17	△大曾根条里遺構下反田東地区近景	▽第1トレンチ	図版47	△須走遺跡出土遺物	▽横川B 遺跡出土遺物
図版18	△下反田東地区第2トレンチ	▽第3トレンチ	図版48	△土浜遺跡近景	▽調査区
図版19	△下反田西北地区遺跡近景	▽1号土壇	図版49	△土浜遺跡層序	▽船塚調査区
図版20	△下反田西地区 1号住居跡	▽1号住居跡	図版50	△助川遺跡調査区	▽調査区
図版21	△下反田西地区出土須恵器		図版51	△助川遺跡層序	▽層序
図版22	△高橋地区遺景	▽発掘風景	図版52	△三穂林E 遺跡遠景	▽発掘風景
図版23	△高橋地区 1・2号建物跡	▽遺物出土状況	図版53	△三穂林E 遺跡近景	▽遺跡近景
図版24	△高橋地区出土土器	▽出土土器	図版54	△三穂林E 遺跡 1号住居跡	▽1号住居跡出土土器
図版25	△高橋地区出土土器 (表面)	▽土器 (裏面)	図版55	△三穂林E 遺跡 2号小型穴	▽3号住居跡
図版26	△高橋地区出土土器・石器		図版56	△三穂林E 遺跡 4号住居跡	▽5号住居跡
図版27	△高橋地区出土土器	▽下反田西地区出土土器	図版57	△三穂林E 遺跡 3号土壇	▽ピット17
図版28	△古橋遺跡近景	▽ピット群	図版58	△三穂林E 遺跡 4号土壇	▽4号土壇
図版29	△古橋遺跡土壤群全景	▽7号土壇	図版59	△三穂林E 遺跡出土土器	▽出土土器
図版30	△古橋遺跡 1号土壇	▽5号土壇	図版60	△丸山遺跡調査区遠景	▽調査区遠景
			図版61	△丸山遺跡 1号土壇	▽2号土壤
			図版62	△丸山遺跡出土土器・石器	▽三穂林E 遺跡出土石器

# —第 I 部—

## 第Ⅰ部

須川西部山辺南部圃場整備事業関係遺跡調査

## 第一章 調査に至る経過

山形平野西部、出羽丘陵白鷹系より流れ出る多くの小河川は、奥羽山脈藏王連峰に源を発し北流する須川に注ぎ込む。須川は蛇行しながら山形平野の西部と中央部を画している。平野西縁のなだらかな丘陵をぬって東流し須川に注ぐ各小河川は各々扇状地地形を形成している。(第1図)。

この地域は遺跡が多い。本沢川流域・富神川流域には縄文～弥生時代の遺跡、松原～菅沢間の丘陵には古墳、山辺～山形市二位田間の平地には条里制遺構が分布する。百々山遺跡・谷柏遺跡・菅沢古墳群・大塚遺跡・山辺条里遺構などは広く知られている(註一)。研究者に限らず地元の人々の関心も強く郷土史研究会の活動も活発で、また二位田地区には明円寺尚館なる資料館がつくられ豊富な遺物が陳列されている。

ところが、この地域は農村地帯で、近年土地改良の気運が高まり、最上川中流土地改良区を基盤にして国営最上川中流農業水利事業や、須川西部・山辺南部地区県営圃場整備事業が着手された。農工一体化策により山形西部工業団地・山辺南部農業団地も計画された。

県教育委員会では、このような事態を憂慮し、関係者に協力を要請するとともに分布調査を進め、協議を重ねてきた。一番早く実施される須川西部・山辺南部地区山形県営圃場整備事業は、計画総事業面積7340ha、8年計画にわたる大規模事業である。計画区域内には20カ所程度の遺跡がある。第二年目の昭和48年度施行区域 70ha に次の各遺跡が含まれることになった。

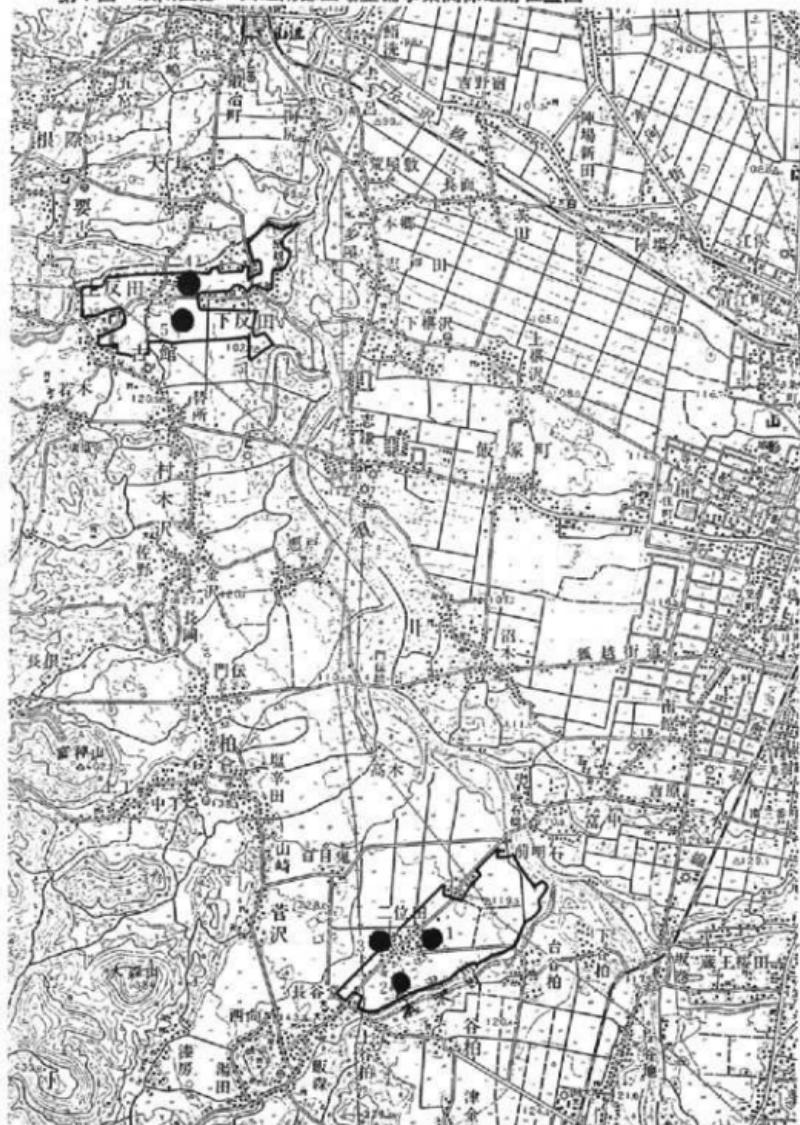
- 1 山形市二位田遺跡(縄文時代集落跡)
- 2 山形市本沢川II遺跡(平安時代集落跡)
- 3 山形市寺裏遺跡(平安時代集落跡)
- 4 山形市大曾根条里制遺構(古代条里遺構)

昭和47年度より関係機関の協議が進められてきたが、遺跡保存ができないためやむなく発掘調査を実施し記録措置を行うことになった。

註一 柏倉亮吉他 『山形県史 資料篇II』 山形県史編纂委員会 昭和44年

柏倉・加藤・川崎・赤塚・山口 「原始古代」『山形市史 上巻』 山形市史編纂委員会 昭和48年

第1図 須川西部・山辺南部圃場整備事業関係遺跡位置図



1 二位田遺跡 2 本沢川遺跡 3 寺裏遺跡 4 大曾根条里遺構下反田地区 5 大曾根条里遺構高横地区

## 第二章 二位田遺跡

所在地	山形市大字二位田字割目330番地の1
調査期間	昭和48年9月17日～昭和48年10月10日（延22日間）
発掘面積	723m <sup>2</sup>
調査者	佐藤鎮雄・佐藤庄一・尾形與典・名和達朗・野尻侃 大友儀助・佐々木洋治（山形県立博物館学芸員）

### 1 遺跡の立地

本遺跡は、山形市の西南4kmの小瀧街道（山形～長谷堂～南陽市小瀧）沿いの二位田地区東側二位田神社周辺に位置する（第1図）。白鷹山系東南の丘陵より流れ出る本沢川の扇状地扇中央部の微高地に立地する。本沢川左岸、標高127mの地点で、西南より東北に下降する傾斜地形である（第2図）。

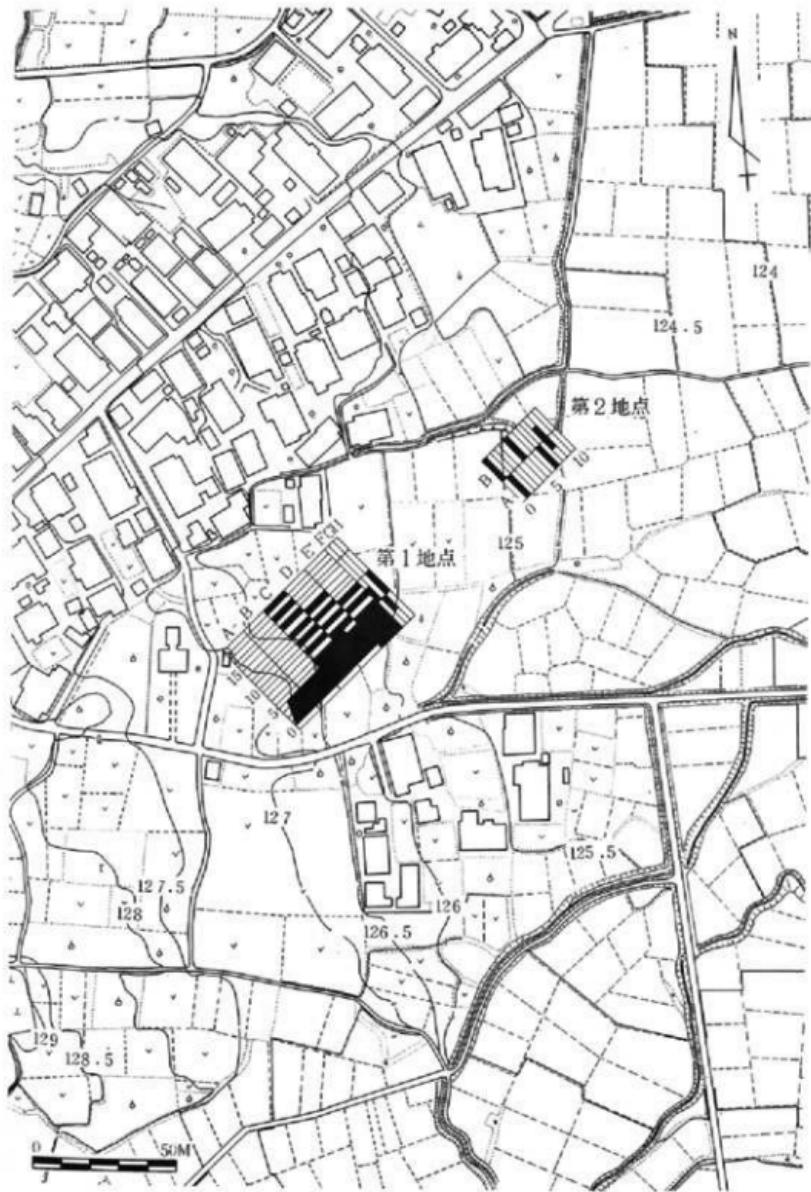
昭和38年の「山形県遺跡地名表」に縄文時代集落跡として登載されているが、昭和48年5月の県文化課による現地確認調査によって300m四方程度の遺物散布範囲をもつことが推定された。大部分が水田であり、開田の際にはかなり削られている様子である。また南西部部分は部落内の宅地まで広がるらしいが明らかでない。西南部分は宅地と畠地である。

### 2 調査の経過

昭和48年9月17日現場到着。遺跡の大半にあたる水田部分は、圃場整備工事のブルドーザーにより既に掘削されてしまっていた。工事関係者の不注意による。そこで遺存状態の良い部落寄りの畠に調査区を設定する。掘削されて夥しく遺物の散乱する神社近くの畠（第I地点）に2m×10mのトレンチを基本とする56m×38mの調査区を設定。トレンチを一つおきに粗掘する。但し調査区の西側28本のトレンチは耕作中により除く。また耕作中の果樹畠をはさんで北東のやや高い水田（第II地区）にやはり2m×10mトレンチを基本とする20m×26mの調査区を設定し、任意に選んだ4本のトレンチを粗掘した。

粗掘の結果、第I地点では深さ20cm前後のところで遺物包含層に達し、遺物も多いことから遺構が分布するとみられた。第II地点では遺物包含層が薄く遺構もみられない。そこで圃場整備関係機関に対して第I地点の保存を要請したところ、施行区域より除外することになった。したがって調査の焦点は、第I地点A～E-1～5の各トレンチ（既に掘削された）の遺存部分に焦られた。作業員が予定の半分以下しか確保できない事情もあった。

9月25日より精査に移る。縄文土器・石器に混じって土師器・須恵器が出土する。縄文期の



第2図 二位田遺跡 全体図

上より平安期の遺構がつくられ、縄文期の遺構の大半が壊されているのである。縄文期の石組炉3基を検出したが、掘削面でかろうじて遺存していたもので予想される住居跡等は不明。これより深く掘り込まれていた平安期の竪穴式住居跡7棟等を検出することができた。10月10日ようやく実測が終わり、調査は終了した。

### 3 発 挖

層序は表土より5層まで確認した。基本的に次の通り認められた。

- 第Ⅰ層 暗褐色耕作土層 20cm前後の厚さで搅乱遺物を少し含む。
- 第Ⅱ層 黒褐色粘質層 腐植土で厚さ25cm前後。遺物包含層である。
- 第Ⅲ層 黄褐色砂質土層 厚さ40cm前後。
- 第Ⅳ層 灰褐色粘質微砂層 厚さ25cm前後。
- 第Ⅴ層 灰褐色砂礫層 この付近の基盤層である。

第Ⅰ地点の掘削された部分では第Ⅱ層まではぎとられていた水田部分で掘削されて調査できなかったところでは第Ⅲ～Ⅳ層まではぎとられていたしたがって比高の高い宅地・畑地部分が良好な遺存状態を示した。縄文期・平安期ともに第Ⅱ層面で遺物包含層となっており、平安期の遺構は深く第Ⅲ層を掘り込んでつくられていたので、平安期の遺構を検出することができた。

遺構は縄文期と平安期の二時期に分けられる。縄文期の遺構は第Ⅱ層下部面で構築されたらしく掘削された面と一致するため若干の石組炉等を確認できただけである。B-2～4トレチで崩れかかった石炉組（1号炉跡）と9ヶのピットを検出したが、住居跡を確認するまではらなかつた。A-2トレチ・A-4トレチでも同じく石組炉を検出したが、同様に住居跡は不明である。しかし、遺物の散布状況もあわせて考えるならばそこに住居跡が存在したものとみられる。さらに遺物が北東方向を中心にして分布することから遺構も同様に広がっていたとみられるが、不明である。平安期の遺構は、7棟の住居跡等である。B-Eの各トレチで検出したが、そのうち5棟は北に方向を合わせた方形プランの規則性のあるものである。B-5・D-5の各トレチで隅丸方形プランの小竪穴を検出したが、ピットやカマドはわからないが、大きさから住居跡らしい感じである。またB-2・D-2の各トレチでやはり同じ向きの方形プランの竪穴式住居跡らしい落ち込みを見発見したが削平されて確認するまで至らなかつた。遺物の散布状況をみると、掘削された部分より第Ⅰ地点の北へ広がるようである。したがって遺構の分布も北側へ広がるものとみられた。また、E-2トレチ内土壤より弥生式土器片数片を得ているが、今のところ遺構は不明、おそらく近くに遺構があったのではないかとみられる。

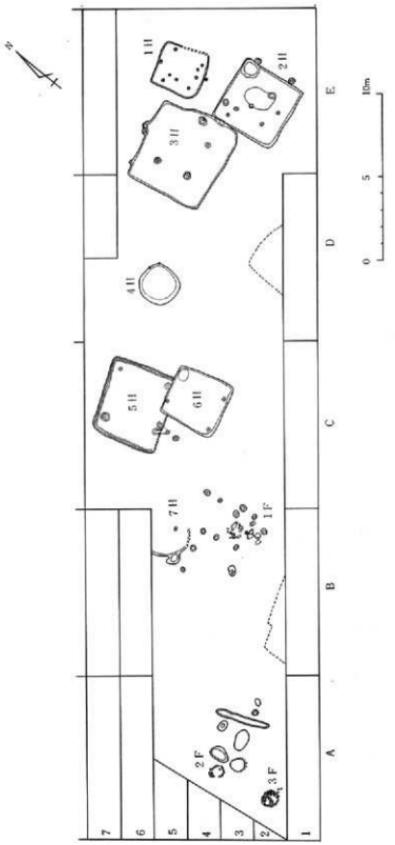
**遺構の層序** 住居跡内覆土は、3～6層に大別される。全般に暗い色調で、微砂質の層で構成されている。

**3号住居跡（第4図1）**

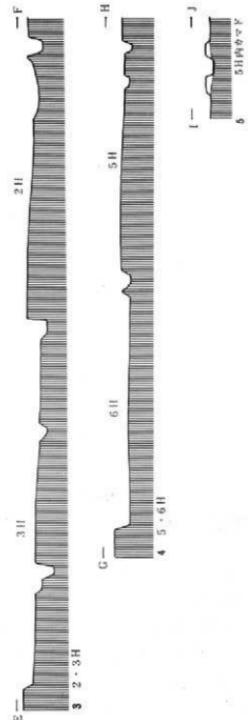
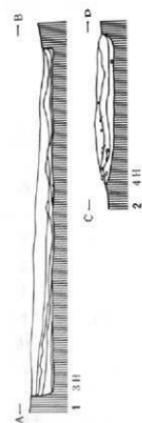
- 1層：黒褐色粘質微砂層 繩文土器・土師器・須恵器を包含する。2cm大の礫及び橙黄色の粘土の小ブロックを含む。
- 2層：黒褐色粘質微砂層 上層より黒っぽく、レンズ状に入っている。
- 3層：暗褐色粘質微砂層 繩文土器・土師器・須恵器・炭化物を含む。2cm大の黒褐色シルトのブロックを含む。
- 4層：黒褐色粘質微砂層 上層より黒みが強い色調である。繩文土器・土師器・須恵器・炭化物を含む。凝灰質の小礫を含む。
- 5層：暗褐色粘質微砂層 上層より若干灰色をおびている。4cm大の比較的大きい円礫を含む。繩文土器・土師器・須恵器・炭化物を含む。
- 6層：黒褐色粘質微砂層 2層と3層と中間の色調である。繩文土器・土師器・須恵器を含む。

**4号住居跡（第3図）** 本遺構は、形態・大きさなどから住居跡というより、性格不明の落ち込みという方が、妥当かもしれない。3層に大別される。

- 1層：灰黒色混灰微砂層 灰が霜降り状に含まれている。土師器・須恵器・炭化物のはかに、わずかであるが繩文土器を含む。
- 2層：暗褐色粘質微砂層 3号住居跡の3層とほぼ同じである。土師器・須恵器の割合大きな破片を含む。
- 3層：黒褐色粘質微砂層 3号住居跡の4層とほぼ同じ性質である。



第3図 二位田道跡遺構配置図



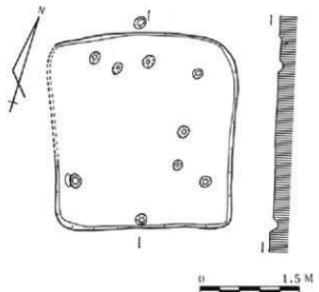
第4図 二位田道跡遺構断面図

#### 4 造構

本遺跡では1~6棟の住居跡を検出した。確認面は、第IV層上面で、ほぼ同層面までブルトーザによって削土された段階で把握した。そのため、当該住居群の生活面からのプラン確認はできなかった。

#### 1号住居跡(第5図)

調査区域東端に位置する。東西隅が丸味を帯び、また東壁が一部未確認の状態であるが、平面プランは、長軸3m、短軸2.7mではば方形である。周溝は、存在しない。壁高は、5cmではば直線的に掘り込まれている。柱穴は、全部で9本検出した。それらは、直径約

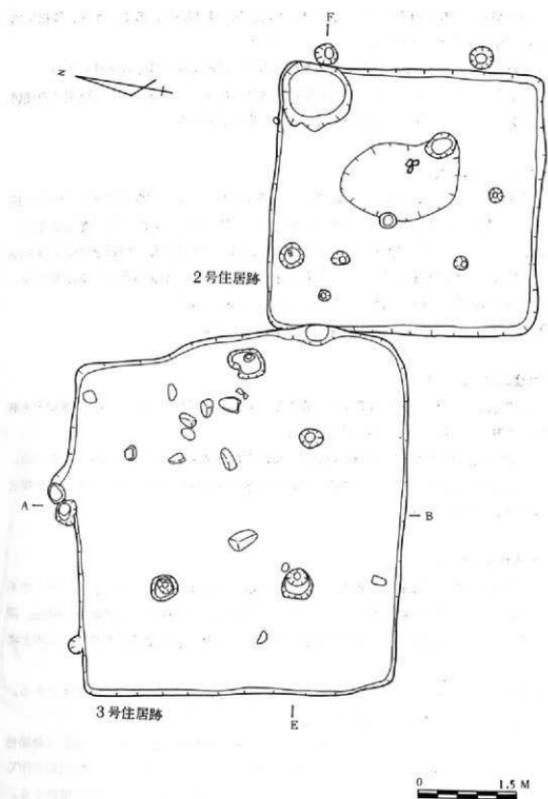


第5図 1号住居跡

#### 2号住居跡(第6図)

1号住居の南側に位置する。北西隅がわずかにふくらむが、408×408 cm のほぼ正方形プランを持つ。軸方向は、N-8°-Wである。周溝はない。壁高15cmで、斜めに掘り込まれている。柱穴は7本で、大きさは、北壁際の直径35cmを除いて、他は直径約15cm 深さ10~20cm 前後である。住居を構成する柱穴は、西壁よりの2本と、それに対応する未確認の柱穴2本を入れて4本と考える。

中央部と北東限に、楕円形の浅い2つの土壤が存在する。前者は、長軸1.8m 短軸1.2m、深さ約5cmで、西側に縄文土器の埋甕を有し、また本住居跡内の柱穴によって切られていることから、住居形成以前の縄文時代の土壤と考える。後者は、長軸1.2m・短軸1



第6図 2・3号住居跡

m・深さ20cmで不整椭円形を示す。これは、6号住居にも認められることから、性格不明であるが住居に伴うものである。

西壁の北側で、3号住居跡と切り合い関係にあり、新旧関係ではそれよりも古い。

出土遺物は、柱穴内及び床面より土器師の壺破片が出土している。なお、直接この住居とは、関連しないが縄文時代の土器破片と埋甕が出土している。

#### 3号住居跡(第6図)

2号住居跡の西隣りに位置し、一部切り合い関係にある。東壁が少しゆがんでいる。長軸5.5m、短軸5mの方形プランをもつ。軸方向は、N-13°-Wである。周溝はない。壁高は20cmで、ほぼ垂直に掘り込まれている。柱穴は、6本検出し、住居を構成するものは、北東部の1本が未確認であるが、それと床面中央よりの3本を加えて4本と考える。大きさは、直径30~40cm、深さ10~14cmである。甕は持たない。

出土遺物は、東壁際の柱穴内より須恵器壺が出土している。

#### 4号住居跡(第7図)

3号住居跡の西側3.6mに位置する。直径2.3mの円形プランである。壁高18cmで丸味を持って掘り込まれている。柱穴は存在しない。

出土遺物は、覆土中より土器師・須恵器の破片多数と縄文土器片が少し出土している。

なお、形態・大きさ・柱穴の有無などにより、本掘り込みは、住居跡というより土壤とよぶ方が妥当かもしれない。

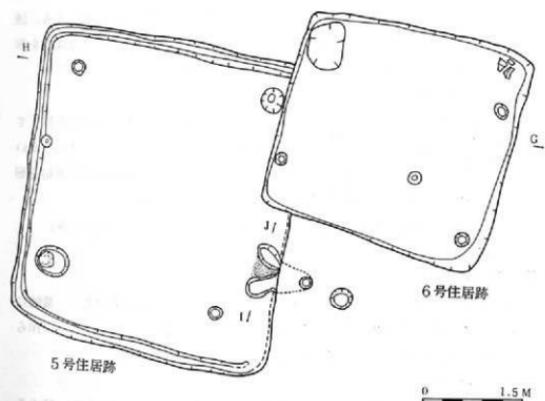
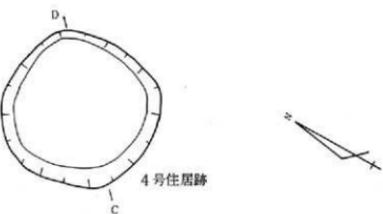
#### 5号住居跡(第7図)

4号住居跡の西側約4mに位置する。長軸4.8m、短軸4mで長方形に近いプランである。壁高7cmで、ほぼ垂直に掘り込まれている。柱穴は、3本検出し、直径20~40cm、深さ約15cmである。南西部での1本が未確認であるが、総数4本で住居を構成するものと考える。

壁面に沿って周溝があげらされている。ただし南壁までのびるかどうかは不明である。幅20cm前後、深さ約10cmで、断面はU字型を呈する。

竈が南壁のやや西よりに存在する。検出したのは袖と煙出部のみである。袖部は黄褐色粘土で構築され、床面よりの現存高は約10cmを計る。竈際より約40cmの所に煙出部が作られている。大きさは直径15cmである。竈全体の大きさは、軸長90cm、幅80cmと推定する。

出土遺物は、南西隅の床面より須恵器蓋が出土している。



第7図 4・5・6号住居跡

### 6号住居跡(第7図)

5号住居跡と北壁で切り合い関係にあり、本住居跡は5号住居跡より新しい。長軸3.5m、短軸3.3mの正方形に近いプランである。軸方向は、N-12°-Wである。壁高24cmで、直線的に掘り込まれている。周溝・窓はない。柱穴は3本確認したが、未確認の1本も含めると4本で住居を構成すると考える。直径15~20cm、深さ約10cmを計る。さらに、北東隅には浅い不整橢円形の土壇が認められる。長径70cm・短径50cm・深さ9cmである。出土遺物は、床面中央部より須恵器蓋、南東隅より土師器表が出土している。

### 5 遺物

#### A 繩文式土器 (第8・9図 図版6~8)

二位田遺跡で今回出土した土器は、総数で2000片余りである。全体に磨滅が激しく、一部埋甃を除いてほとんどが破片である。そのため全体の形態及び文様の構成は不明確な部分も多い。時期別では繩文時代中期末に集約できる。器形は深鉢が圧倒的に多く出土している。

本項ではその文様を中心に分類を行なう。

##### a類(第8図1)

量的にはあまり多くない。大きな波状口縁部をもち、体部下半が屈曲して細くなる。波状口縁に沿って幅1.5cmの間隔で隆起線を入れ、体部においては縱方向に走る隆起線を形成している。器面は、平滑で丁寧に仕上げられている。焼成はあまり良くなくもろい。

##### b類1(第8図2~8)

粘土紐・沈線・隆起線などによりモチーフを描き、その内部に割突文や斜絞文を施して回りを磨消している土器である。沈線は2~3mmの細いもの(2・3)や5~6mmと太いもの(4・5・7)がある。粘土紐を貼り付けているものは、口縁部にひれ状の突起を形成する(6)。文様は、主として橢円形のモチーフが描かれ、横に展開する。

器形は一般に大形の深鉢が主体であるが、中には小形のもの(8)も認められる。

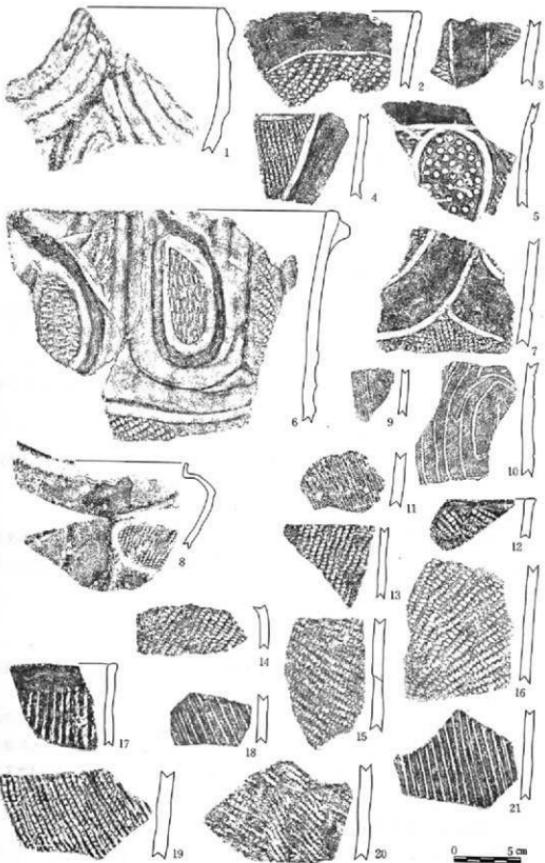
焼成は、良好で堅くしまっている。

##### b類2(第8図22~26)

文様形態は、前類に似ているが、本類は撚糸を地文としているのが特徴である。量的には多くない。また沈線や隆起線によって描かれるモチーフは、橢円形よりも窓幹状に作られるもの(25)が多い傾向にある。焼成は良好である。

##### c類(第8図9~11)

少量しか出土していない。無文の器面に沈線や柳条状沈線を施しているものを一括する。幅2mm程度の単一な沈線により渦巻文を描くもの(10)や棒状工具によって細い無数の沈



第8図 二位田遺跡出土土器拓影図(1)

線を縱方向に走らせるもの（9・11）がある。焼成は良好である。

d類（第8図12～16・20）

斜縞文で構成するもの。量的には一番多い。無節・複節の原体によるものも見られるが単節LRのものが多い。また施文方向も縱方向が主体をしめる。

口縁部は平口縁で、器形は大形の深鉢である。埋甕に用いられているものもある。

胎土は、粗砂・石英粒子を含み、焼成は良好であるが、器面は荒れている。

e類（第9図17～19・21）

前頸の約半分であるが、出土土器全体の中では二番目に多い。条線のように間をおいて細く施文するもの（171818・21）と太く密に施文するもの（19）がある。一般に斜位ないし垂直方向に施文する撚糸文土器である。

器形は平口縁の深鉢で、器面は少し凹凸が走る。胎土は、粗砂・石英粒子を含む。焼成は良好である。

f類（第9図27）

底部片を一括する。総数で300余りである。直径は、16cmの大形から6cm前後の小形のものがある。器底部の厚さは0.8～1.5cmを計る。

底面はほとんど無文であるが、中には木葉痕を有するもの（27）もある。

底部から体部への立ち上がりは、すそが張り出ず丸味をもって立ち上がるのが多いようである。

円盤状土製品・石製品（図版8）

19点の円盤状土製品と1点の同石製品が出土している。前者は、大部分斜縞文や撚糸文をもつ粗製土器の破片を用いている。後者は、扁平な砂岩礫の回りを打ち欠いて作っている。全体に直径3～5cm大である。

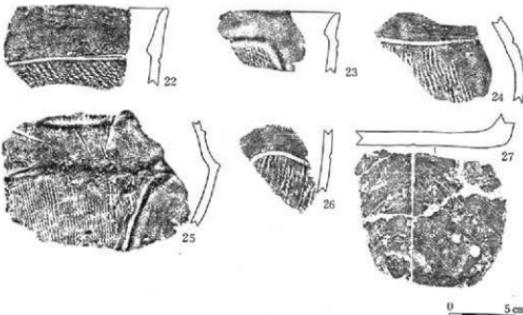
B 弥生式土器（第10図）

発掘区東側付近から弥生式土器も少量発見されている。縞文式土器と混在して出土し、層位的な識別はできなかった。

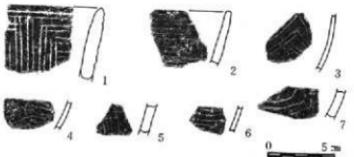
明らかに弥生式土器と認定できるものはワ片だけで、いずれも壺形土器の一部である。

1・2は壺形土器の口縁部で半截竹管による四角文を有する。色調は濃赤褐色を呈し、焼成は良くない。3～7は壺形土器の体部上半の破片で、半截竹管による同じ円状文を有する。焼成は良くないが、3に一部磨きがあり、4の沈線には丹塗の痕が認められる。壺形土器等は検出できなかった。

時期的には、弥生時代後期「桜井式」に平行するものである。



第9図 二位田遺跡出土土器拓影図(2)



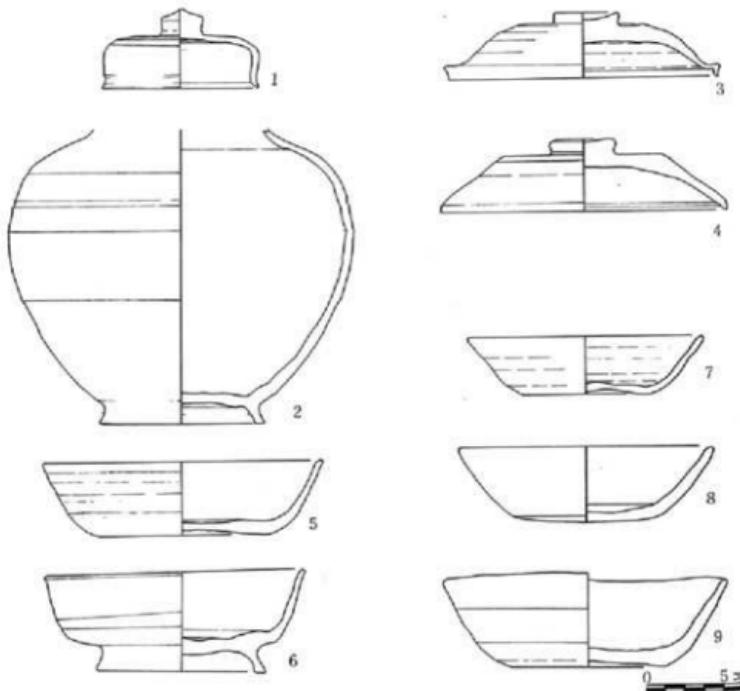
第10図 二位田遺跡出土土器拓影図(3)

## C 土師器・須恵器 (第11図・図版)

二位田遺跡出土須恵器計測表

表1

器形 番号	器形	計測値 (%)			色調	胎土	焼成 技法	切り離し 方法	再調整	備考
		口径	底径	器高						
1	蓋	80	70	4.1	灰黒色	粗砂混	良好		肩部にケズリ	片身に灰を被る
2	蓋		87	(152)	灰黒色	粗砂混	良好		台部で左方向にナデ	片身に灰を被る
3	蓋	140	50	34	灰 色	粗砂混	良好		肩部にケズリ	
4	蓋	148	81	37	暗灰色	砂礫混	良好		肩部にケズリ	口唇部内側に浅い抉り有り
5	环	145	87	38	暗灰色	粗砂混	良好	糸切り		
6	高台环	133	87	51	灰黒色	粗砂混	良好			
7	环	120	65	30	灰黒色	粗砂混	良好	糸切り		
8	环	121	70	39	灰黒色	粗砂混	良好	糸切り		
9	环	197	80	48	暗灰色	粗砂混	良好	糸切り		



第11図 出土土器

## D 石 器 (第12図・13図 表2 図版9・10)

石器は、完形品が50点程出土し、石鎌・石錐・石範・打製石斧・凹石・砥石・石棒等に大別できる。その他に剝片が70点余り出土している。概して遺物の中では、石器の出土総数は少ない方である。材質は一般に硬質頁岩が多く、他に砂岩・安山岩などがあげられる。

### 石鎌(第12図1 図版9)

1点だけの検出である。無茎で抉りは浅く、脚部は不ぞろいであるが鋭く作られている。両側縁はわん曲しながら先端にのびている。先端部はあまり鋭角ではなく、使用して折れたのを再利用したものと考える。

### 石錐(第12図2 図版9)

これも1点だけの検出である。小な絶長剝片を用いている。針部は短くやや太目であり、基部との境介も明瞭ではない。断面は凸レンズ状を呈する。基部形成は左側縁の両面から剝離によっている。

### 石範(第12図3～6・8 図版9)

総数で8点出土している。長さが3～6cmの大形の小形の石器である。その形態により4つに分けられる。なお半製品が1点あるが、分類からははずしている。

a類(3) 長さが3cmと小形で、全体に丸味をおびた形である。薄手で周囲に丁寧に剝離が加えられ、両面加工である。断面は薄い蒲鉾形である。1点出土。

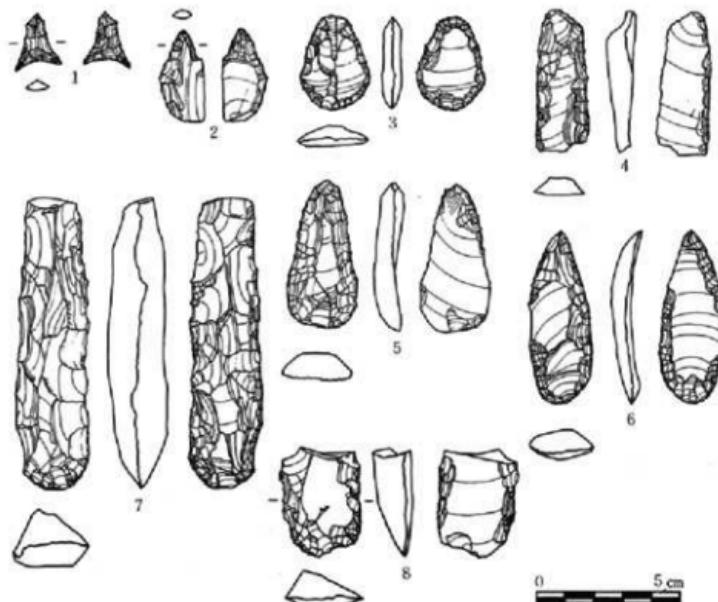
b類(4・8) 平行する側縁部をもち、その左側だけが両面加工である。ただし使用による剝離の可能性も考えられる。断面は台形である。2点出土。

c類(5) a類を少し台形にしたような形態をもつ。打瘤をとるため、基部では裏側も加工しているが、全体は片面加工である。側縁部と刃部との境界は丸く明瞭でない。断面は蒲鉾形である。1点出土。

d類(6) 基部細く尖り、薄手で刃部はほとんど丸く形成される。両面加工で裏は石側縁の上 $\frac{1}{3}$ を残して丁寧に剝離を施している。断面は凸レンズ状である。3点出土。

### 打製石斧(第12図7 図版9)

1点だけの出土である。長さ10cmと大形で厚手である。短冊状の外形をもち両面加工である。特に刃部は入念に作られ、使用による磨滅がうかがえる。断面は凸レンズ状である。



第12図 出土石器(1)

#### 凹石 (第13図9～12 図版9)

凹石は、全部で50点出土している。主に自然の河原石を使用し、表面に1～3個の凹を持つ石器である。中には磨石として使用されたものも認められる。

本石器は、外形により3つに大別できる。

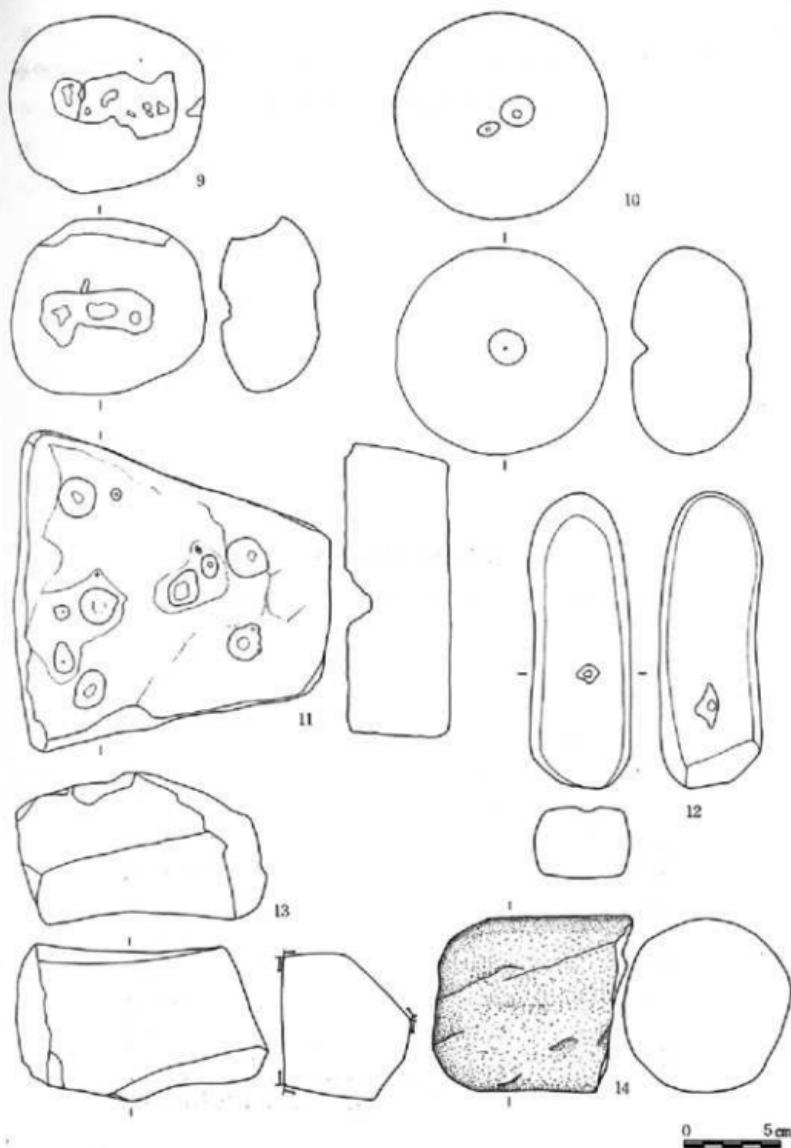
a類 (9・10) 円形ないし橢円形を呈するもの。

b類 (11) 棒状の石を用いているもの。

c類 (12) 板状の石を用いているもの。前類よりも比較的軟らかな砂岩質の石材を用いている。それらは焼けて風化しているものが多い。さらに特徴的なのは、この平らな表面に多数の凹を有することである。本類は、前類とは機能的にも異なるのかもしれない。

#### 砥石 (第13図13 図版10)

角柱形の凝灰岩を用いている。各面は、使用による磨滅のためわん曲している。



第13図 出土石器(2)

石棒（第 図版14 図版10）

1点の出土である。胴部下半しか残っていないが、両先端の方が細く、胸部中央でやや膨む形態と推定する。棒状の自然石の表面を磨いて外形を作っている。

二位田遺跡石器計測表

表2

No.	名 称	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石 質
1	石 棒	19	16	4	2	硬質頁岩
2	石 棒	32	16	3	3	硬質頁岩
3	石 空	32	24	7	10	硬質頁岩
4	石 空	(49)	18	6	(15)	硬質頁岩
5	石 空	51	24	9	20	硬質頁岩
6	石 空	59	22	10	12	硬質頁岩
7	打製石斧	100	26	20	75	硬質頁岩
8	石 空	(37)	20	13	(20)	硬質頁岩
9	圓 石	103	90	95	618	安山岩
10	圓 石	107	107	60	943	安山岩
11	圓 石	153	52	36	1560	安山岩
12	圓 石	165	150	54	380	安山岩
13	球 石	130	76	65	905	凝灰岩
14	石 棒	(202)	90		1110	凝灰岩

[( ) 内は、破損品の計測値を示す。]

## 6まとめ

今回の調査の結果は以上の通りである。遺跡の大半が調査直前の段階でブルにより掘削されたり、調査員・作業員が大幅に不足したりワーストコンディションの調査であったが、地元の研究者や地区民に支えられようやく終了できたのである。そうして得た結果を簡単にまとめるところ次の通りである。

- (1) 本遺跡は、縄文時代中期末・弥生時代後期・平安時代中期の三時期にわたって営まれた。少くとも縄文時代と平安時代にはいくつかの住居跡をもつ集落があったと推定される。弥生時代の性格内容は残念ながら不明である。
- (2) 遺構としては平安時代の住居跡等を得たが、とくに7棟の竪穴住居跡は、北向きの規則性・カマドの有無・平面プランなどパターンをもったものである。カマドの有無や平面プランのちがいは未だ不明である。しかし全般に調査資料の少い本地方の集落研究の良き資料となるであろう。
- (3) 縄文土器は中期末大木10式期のものとみられる。磨消縄文に対して撫糸文が多いのが注目される。土師器・須恵器は平安中期とみられるが、編年研究にも活用できる。最後に付記しておく。精査区域500m<sup>2</sup>の畝は、地元有志の力で砂と土で埋戻され保存された。施行除外になった6000m<sup>2</sup>の畝と共に現状保存が図られたことになる。

### ※二位田遺跡・本沢川II遺跡・寺裏遺跡調査補助員

二位田遺跡…………横戸昭二（南山形考古学研究会々員）・茨木光裕（日本大学生）  
・渋谷孝雄・剣持みどり・東海林次男・中島 寛・門間英子・  
鈴木和夫・中山芳昭・高橋千鶴・矢萩美奈子（以上山形大学生）

寺裏遺跡…………茨木光裕・横戸昭二・奏 昭繁（置賜考古学会々員）・渋谷孝  
雄・中島 寛・鈴木和夫・中山芳昭

以上の諸君には大変お世話になった。深謝の意を表する。

### 第三章 本沢川II遺跡

所在地	山形市大字長谷堂字荻原1431番地の1他
調査期間	昭和48年9月17日～10月5日
調査面積	500m <sup>2</sup>
調査者	佐藤鎮雄・佐藤庄一・尾形典典・名和達朗・野尻 侃 加藤 稔（山形大学講師）

#### 1 遺跡の立地

本沢川II遺跡は、山形市の南西、県道山形一宮内線の小瀧街道沿いの二位田部落の南西に位置する。須川の一支流である本沢川左岸の微高に立地し、標高130mを測る。この地形は、二位田の集落からのが、その南端にあたる。比較的ゆるやかな地形で、東方を流れる須川に向かってなだらかに傾斜している。川に近いため遺物包含層の上面は、礫が多く掘るのに難行した。

付近一帯は、果樹畠で東の低い方は水田である。遺物は、比高のある果樹畠の方に集中し、その高まりに沿って広がるものと思われる。水田は、砂礫と青灰色砂層がすぐ現われ遺物包含層はみとめられない。

遺跡に立てば東方に馬見ヶ崎川原状地がせまり、北方には月山・葉山、南方に藏王を眺めることができる。それらに囲まれたこの須川平野の一角に、本沢川II遺跡での生活が営まれていたのである。

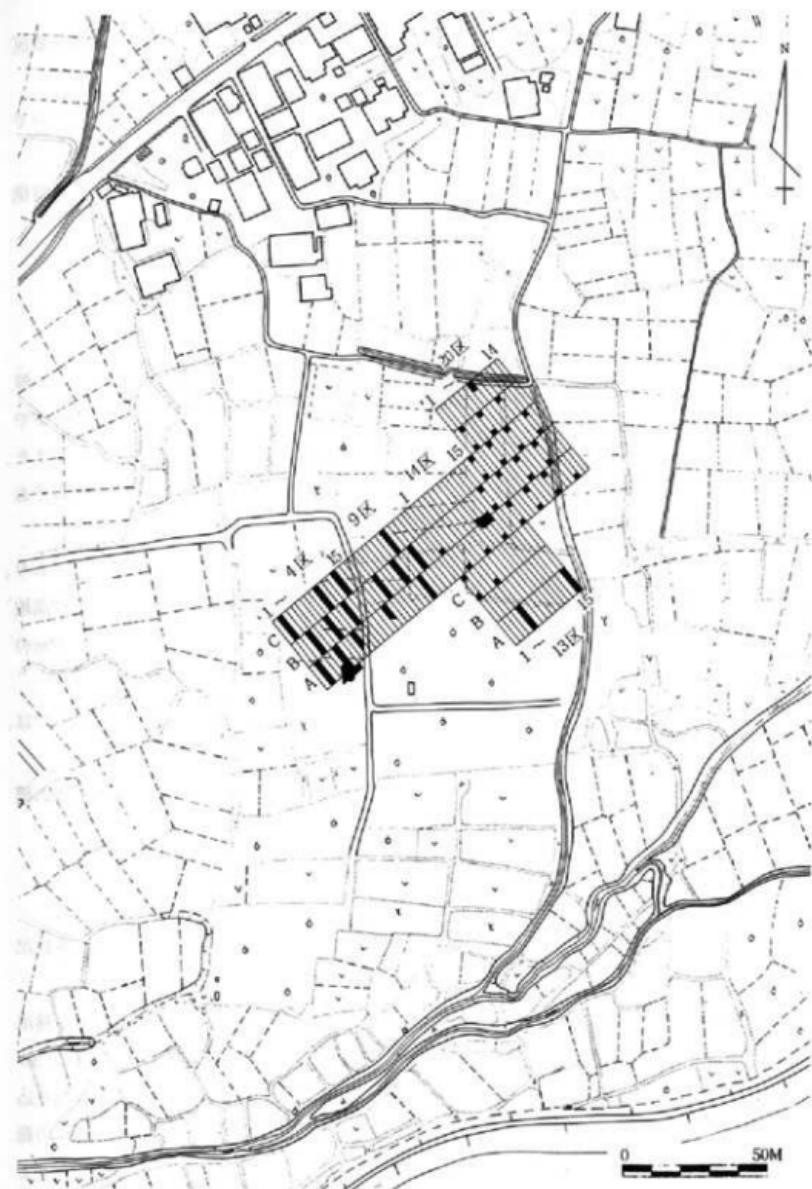
またこの周囲には、同じく調査された二位田・寺裏の両遺跡がある、それらとの関連も注目しなければならない点であろう。そこには、当時の人々がこの地を選んで生活した意義が、隠されているのではないだろうか。

#### 2 調査の経過

昭和48年9月17日より調査を開始する。まず150×150mの範囲に30m間隔の大グリッドを設定し、南から1～6区、6～10区と20区まで呼称する。さらに各大グリッドのx軸を2m毎に1～15区、y軸を10m毎にA～C区とそれぞれ呼称する。

調査は、2×10mのトレンチを基準にして掘り進め、遺跡の範囲、遺物の出土状態、遺物包含層を調べる。

9月24日頃から比較的遺物出土の多い4-A-6区、19-A-11区付近より、一括土器及び遺構の掘り込み面が確認される。主にその2地点を重点的に拡張を行ない遺構を追求する。その結果、4-A-6区より住居跡が検出され、発見順に番号を付ける。



第14図 本沢川II遺跡地形図

9月27日から住居跡内の覆土を掘り進めながら内部精査を行なう。また一方で各調査区の柱状図を作成する。

10月2日頃住居跡の全体プランをほぼ出し終え、柱穴及び竈の状態を追求する。ついで住居跡の実測図を作成する。

10月4日に調査計画区域内の調査をほぼ完了し、各区のレベルを記録するとともに遺構の全体写真を撮影する。

10月6日から二位田・寺裏の両遺跡の調査に合流する。

### 3 発掘

本遺跡の層序は、全部で4つに大別できる。まず第I層は、いわゆる耕作土である。厚さは約15cm前後である。第II層は、茶褐色土層で礫を少し含んでいる。10cm前後の厚さである。第III層は、黒褐色土層で上面に約10cm大の礫を多く含み、堅くしまっている。また、遺物・炭化物などを包含している。20cmの厚さである。第IV層は、黄褐色砂質粘土層である。遺構はこの面で確認されている。

遺物の範囲は、各調査区をみてみると、4区・9区・14区にかけて遺物が出土しており、他の区域では減少する傾向にある。さらに、4区・9区・14区は、遺跡の立地する微高地の比較的高い地点になっている。以上から遺物は、当該地区を中心におよそ120×90mの範囲にわたって分布するものと推定される。

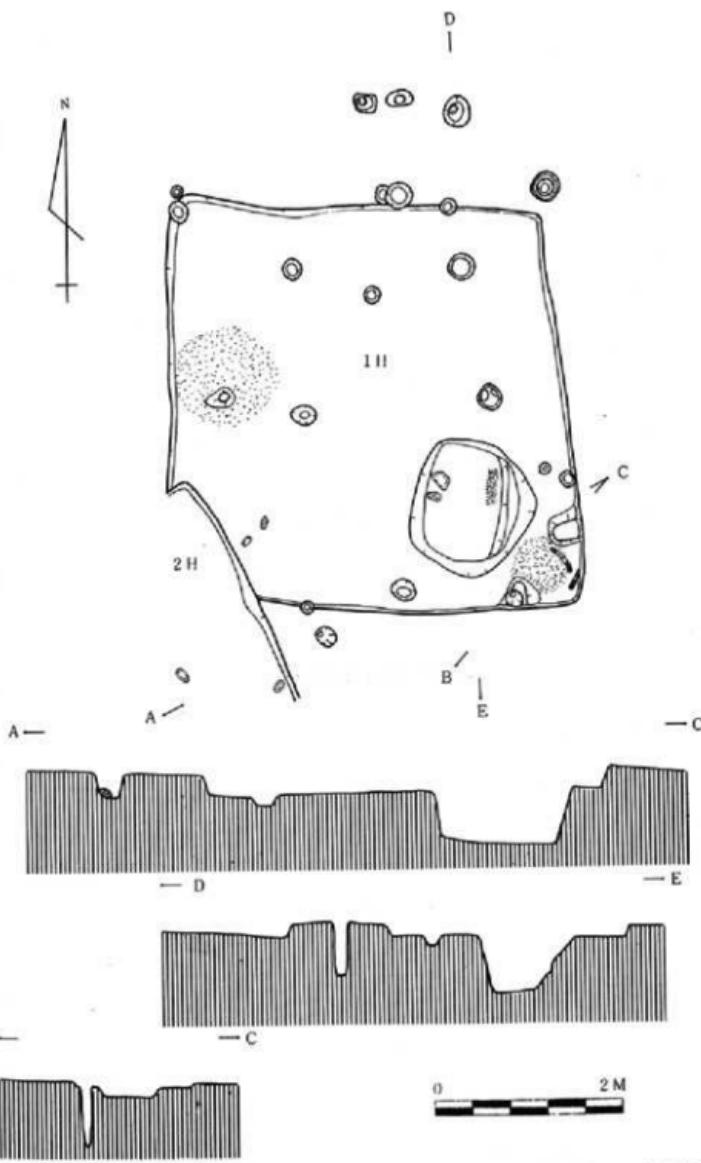
遺構は、今回の調査では、4-A-6区で住居跡を検出している。それ以外の地区では、それらしきものを確認することはできなかつた。

以上であるが、今回の調査は遺跡の限られた範囲のため、遺跡全体における遺構群の構成及び遺物との関係などは明らかではない。

### 4 遺構 (第15図 図版12)

今回の調査では、4-A-6区に切り合い関係をもつ1・2号住居跡と1号土壙を検出することが出きた。

**1号住居跡** 4-A-6区に北東隅の掘り込みを確認し、西側に拡張の結果全体を検出できた住居跡である。確認面は、第IV層上面である。南東隅でややふくらが $4.3 \times 4.3$ mの方形プランである。軸方向は、磁北と大体一致する。壁高は、約20cmで直線的に掘り込まれている。周溝は作られていない。床面は比較的しまっており、西壁よりに約1mの範囲に木炭と焼土塊がある。柱穴は全部で14本検出したが、本住居跡を構成するのは北壁よりに2本、中央部に2本確認できた。これに南壁よりの未確認の2本を加えると合計6本



第15図 1号住居跡・1号土壤

の柱で構成されているものと推定される。柱穴は直径約25cmの大きさで深さは約20cmを計る。

さらに、本住居は南東隅に竈を有する。検出したのは袖のみで、煙道部・煙出部は未確認である。袖は、黄褐色粘土で構築され、床面からの高さは約8cmである。内部には木炭及び焼土が堆積し、廻りにはまだ形をとどめた木炭も認められる。しかし、それが住居の火災に原因するものかどうかは不明である。

出土遺物は、須恵器の壺・蓋それに土師器の甕が出土している。

**2号住居跡** 1号住居跡と切り合い関係を呈する住居跡である。確認したのは、北東隅だけでそれ以上は不明である。確認面は第IV層上面である。大きさは明らかでないが、ほぼ方形プランをもつと考える。軸方向はN-26°-Wと推定する。周溝は形成されない。壁高は、約15cmで直線的に掘り込まれている。柱穴は未確認である。1号住居跡との新旧関係は本住居跡の方が新しい。

**1号土壤** 1号住居跡の竈の脇に位置する。1号住居跡の覆土精査中検出された。平面形は不整円形で直径1.4m、深さ63cmを計る。東側は段をなして掘り込まれ、底には焼土を堆積する。また覆土中より明鏡（聖宋元宝）が1点出土している。このことから1号住居跡とは間違しない中世の土壤と考える。しかし、その性格は不明である。

## 5 遺 物

本沢川II遺跡出土須恵器

表3

持団 番号	器形	計測値 (%)			色 調	胎 土	焼 成	切り離 し技法	再 調 整	備 考
		口径	底径	器高						
1	蓋	150	70	37.5	暗灰色	石英・凝灰岩微量	普通		つまみ・かえり先端にナデ	かえり上端に自然釉
2	蓋	156	80	33	暗灰黑色	石英・雲母粒等を含む	普通		肩部に圓板瓦割り、かえり先端にナデ	
3	蓋	151	60	38	暗灰色	砂礫を含む	良好			
4	蓋	155	72	37.5	暗灰色	粗砂混入	良好		肩部にケズリ	
5	蓋	159	80	31	暗黑灰色	凝灰質細纖	普通		つまみ・かえり先端にナデ	ゆがみあり
6	壺	138	132	32	暗灰色	細纖を含む	不良	施切り		
7	壺	141	83	35.5	明灰黑色	石英・黒雲母微粒子を含む	普通	糸切り	底部外周にナデ	重ね焼きの痕あり
8	壺	134	80	36	灰黑色	粗砂混入	良好	糸切り		

## 6まとめ

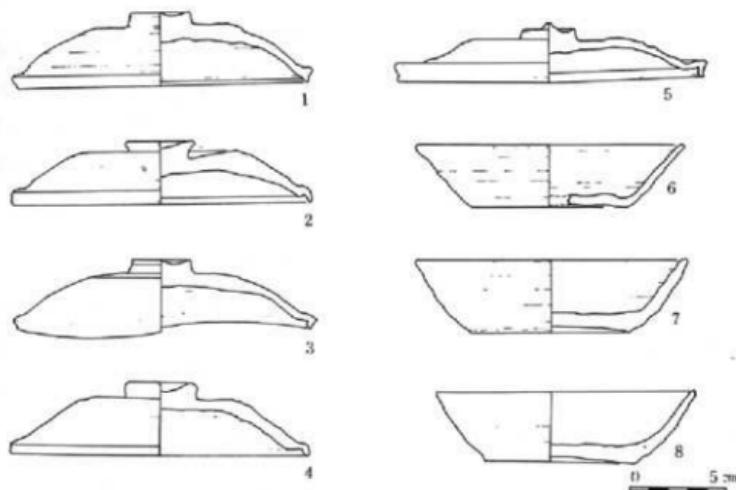
以上の結果から今回の調査をまとめる。

本遺跡は、本沢川左岸に位置する微高地上に立地する集落跡である。時期は住居跡内出土遺物をみると、奈良時代を中心とする時期と考える。

遺跡の範囲は、地形及び遺構・遺物より推察すると、1号・2号住居跡付近から4区・9区・14区にわたる範囲を中心に、およそ  $120 \times 40\text{m}$  の範囲に広がるものと推定する。

住居跡は、方形プランで周溝を形成しない。また南東隅に竈が存在する。しかし、煙道部・煙出部等は未確認である。

今回の調査は限定された調査区域のため、遺跡全体に関する遺構群・遺物については不明である。



第16図 本沢川II 遺跡出土土器

## 第四章 寺裏遺跡

所在地	山形市大字二位田字割目 330 番地の 1 他
調査期間	昭和48年 9月17日～10月10日（延4日間）
発掘面積	268m <sup>2</sup>
調査者	佐藤鎮雄・佐藤庄一・尾形與典・野尻 健・名和達朗 保角里志

### 1 遺跡の立地

寺裏遺跡は、山形盆地の南端、山形市の南西 6 km にある。二位田部落の明園寺裏に広がっているのでこの名称がつけられている。白鷹山系に源を発し、須川に注ぐ本沢川が形成する扇状地下部に位置し、標高約128mを測る。地盤は現在ホップ畑と野菜畑になっており、周囲の水田と約50cmの比高を持つ微高地である。遺跡付近は南西から北東にかけて緩やかな傾斜をもち、遺物や遺構はその先端部に多く分布する（第17図）。

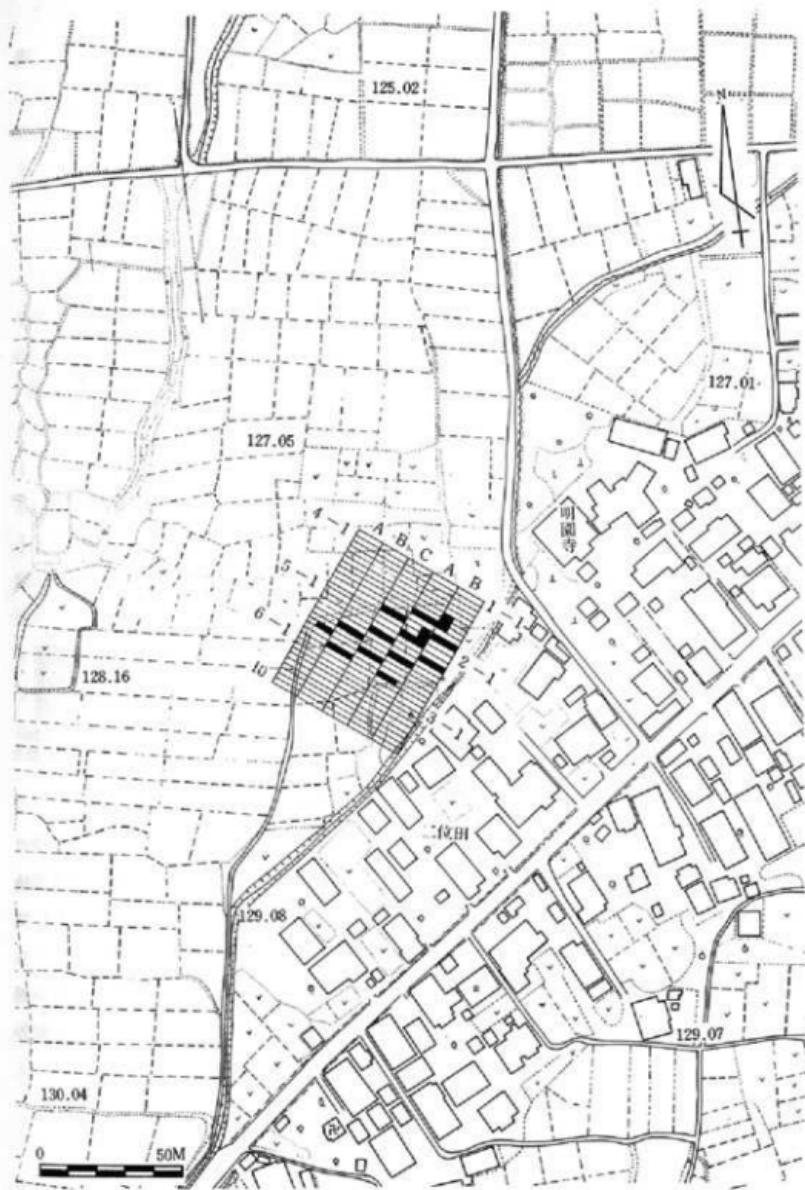
### 2 調査の経過

遺跡の範囲のうち圃場整備事業に含まれる部分に、南北60×東西50mの発掘区を設定し、20×30m毎に6つの発掘区を設けた。発掘区はさらに2m毎のグリッドに細分され、各グリッドはたとえば「5-C4-3区」のように呼称する。調査は前半の2日間に多勢の作業員を導入し、粗掘りを行ない、後半の2日間で一部遺構の拡張および精査を実施した。予算と日程の関係から結果的には遺跡の試掘調査程度に終った（第17図）。

### 3 発掘

遺跡の地層はほぼ4つに大別される。上から第Ⅰ層—暗褐色耕土、第Ⅱ層—暗褐色微砂層、第Ⅲ層—明褐色砂質微砂層、第Ⅳ層—黄褐色砂層である。遺物は第Ⅱ層に多く第Ⅲ層にも若干含む。第Ⅳ層は無遺物層である。第Ⅳ層は遺跡東部では礫を含む黄褐色砂礫層となる。包含層の厚さは浅いところで15cm、深いところで40cm程であり、北側が厚く南側にゆくほど薄くなる。

遺物の大部分は平安時代に属するものであるが、発掘区北東隅の1-B6区付近からは、古墳時代の土器が集中して発見された。遺構は発掘区北側の微高地先端部に、竪穴住居跡1棟のほか焼土等が検出された。



第17図 寺裏遺跡 地形図

#### 4 造構

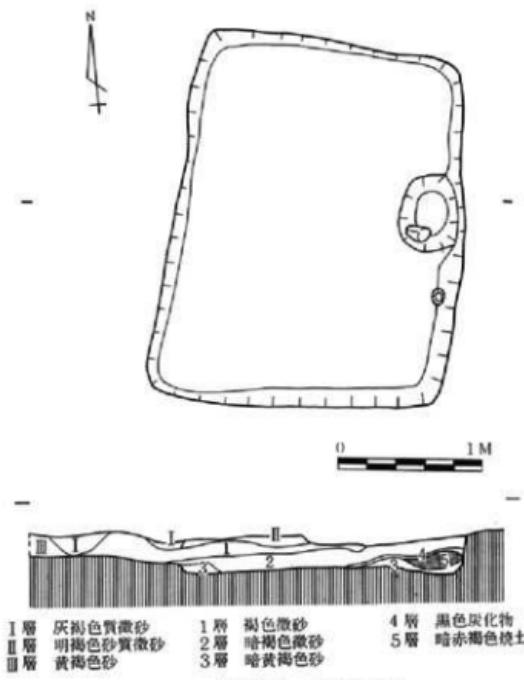
本遺跡で検出された造構は、竪穴住居跡1棟・焼土1ヶ所・溝状造構4本等である。溝状造構は、掘り込み面および覆土からみて、いずれも後世の耕作によるものと思われる。

##### 1号住居跡（第18図）

発掘区の北東部2-A2-

5区を中心として検出された竪穴住居跡である。平面プランは長方形を呈し、南北25m・東西2.0mを測る。長軸の方向はほぼ真北を指す。東壁中央部にカマドをもつ。造構は第IV層—黄褐色砂層を掘り込んでおり、床面から造構検出面までの高さは10~20cmで、ゆるやかな立ち上りを示す。床面は粘土を貼り固く叩きしめている。住居内のピットはカマド南側に1個検出されただけである。掘り方と柱痕の区別は認められなかった。カマドは東壁を一部掘り込んで作られ、現存する落ち込みの大きさは、南北53cm・東西40cm、壁上面からの深さ25cmを測る。落ち込み部の底面は焼けており、上面に焼土と炭化物が互層になって堆積していた。カマドの袖部および煙道は検出できなかった。ただし落ち込み内に長径16cmの河原石が1個発見されており、袖部に関連する可能性をもつ。

住居跡内の覆土は、カマド部を除けば3層に分かれ、上から1層—褐色微砂、2層—暗褐色、3層—暗黃褐色砂となる。遺物は2層に多く、1・3層にも若干含む。カマド部からは3・5層より土師器壺の上半部が2個体分出土した（図版14）。



第18図 1号住居跡

### その他の遺構

1号住居跡の北西8m、1-A8区は遺物の出土量がもっとも多かった場所であるが、この地域から焼土およびピット1個が検出された。焼土は約30cm四方に分布する。とくに落ち込み等は認められない。この地区はホップ耕作等による搅乱が著しく床面も検出できなかった。

## 5 遺 物

寺裏遺跡から出土した遺物は、土師器、須恵器、石器合わせて整理箱約6箱分である。本遺跡出土の土器は二群に大別される。第一群土器は、粘土巻上げ成形による古式土師器の仲間で、第2群土器はロクロ成形ないし調整による土師器、須恵器である。

### 第1群土器（第図1～3、図版15・16）

ロクロ成形ないし調整をもたない、粘土巻上げ成形による土器群である。発掘区北東隅1-B6区から5個体分集中して出土した。器形は、口縁部が軽く外反し、体部が丸味をもつ壺形土器のみである。口縁部の形態から2類に分けられる。

I a類 単純口縁で、口縁部が軽く外反し、体部が球形を呈するものである（　）。頸部および口縁部の内外面と、体部外面に刷毛目調整が行なわれているのが特徴である。比較的大形のもので、底部は体部に比して著しく小さい。3点出土している。

I b類 複合口縁で、体部が球形を呈するものである（　）。口縁部の幅はcmで比較的せまい。頸部および口縁部の内外面に刷毛目調整が行なわれ、体部外面に粗いヘラ調整がみられる。2点出土している。

これら2類の壺形土器の時期は、個体数が少なく、また他のセットになる器形も不明なので、早急には決しがたい。ただし口縁部や体部の形態から、南小泉II式以前の所謂古式土師器の範疇に入ることはほぼ確実である。

### 第2群土器（第図～、図版16）

ロクロ成形ないし調整をもつ土師器、須恵器の一群である。包含層から出土したもののが過半を占め、遺構と関連を持つものは1号住居跡1例だけである。ここでは1号住居跡の床面および覆土内出土土器に限定して記述を行なう。出土量は土師器と須恵器合わせて整理箱約1箱分である。小片も含めた破片数では、土師器が全体の約8割を占めるが、壺形土器の小破片が相当数含まれており、個体数では両土器間にそれほど差はない。

#### 土師器

壺形土器、壺形土器、壺形土器の器形がある。土師器は器形および製作技法等から、つぎの5類に分類できる。

I a類 壕形土器で、内面が丁寧なヘラミガキのち黒色化処理されているものである。口縁部2片のみで、器形や底部の切り離しは不明である。ロクロの整形痕が一部に認められる。

I b類 壕形土器で、内面の黒色化処理が認められないものである。小片5個のみで、器形や底部の切り離しは不明である。ロクロの整形痕が一部に認められる。本類には、再加熱や磨耗を受けて内面の黒色化処理が消滅したものが含まれる可能性をもつ。

II a類 口縁部が強く外反し、長胴の体部をもつ壺形土器である。口縁部外面にヘラ調整、体部外面に縦方向の刷毛目があり、内面は口縁部から体部にかけて横方向ないし斜方向の刷毛目調整が施されている。口辺部片で4個体分の土器が認められる。底部はほとんどが木葉痕を有する。はカマド底面から出土したものである。

II b類 口縁部が軽く外反し、口唇部に平担な棱をもつ壺形土器である。体部は上半がやや丸味をおびる。内外面にロクロの整形痕が明瞭に認められる。II a類に比して、器厚が比較的厚手である。II b類は、覆土上層から1点だけ出土している。

III類 口縁部が強く外反し、丸味のある体部をもつ小型の壺形土器である。口辺部4片のみで、器形を復元できるものはない。口縁部内外にロクロ調整が、肩部に刷毛目調整が認められる。高台をもつ底部片が1点出土しているが、あるいは本類に伴なうかも知れない。

#### 須恵器

壺形土器と壺形土器の器形がある。壺形土器と壺形土器は、他地区の包含層からは若干発見されているが、1号住居跡からは検出されていない。須恵器は、器形および製作技法等から、つぎの5類に分類できる。

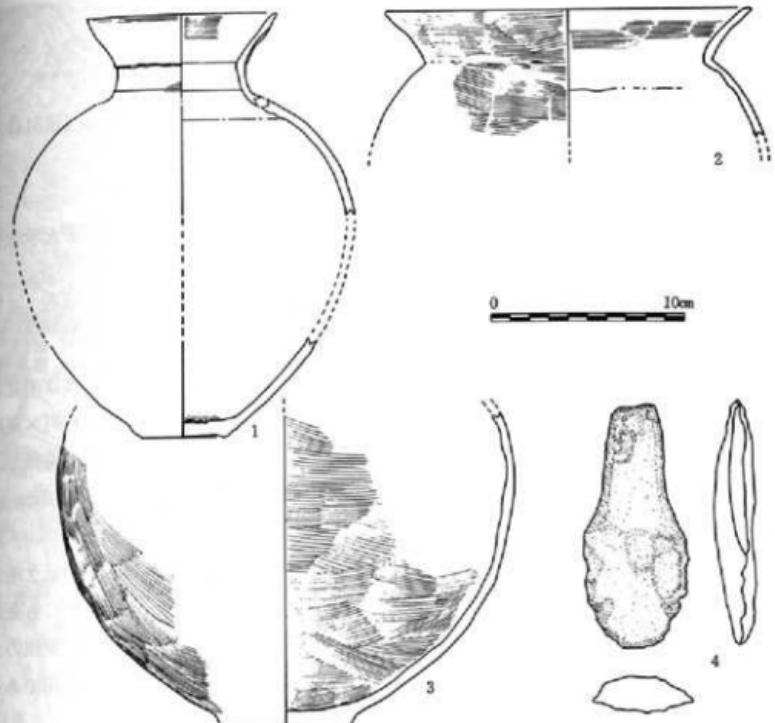
I a類 ヘラ切りでロクロから離し、調整を行なわない壺形土器である。底部と体部の境界がはっきりせず、丸味をもって体部から底部へと移行するものと、体部と底部の境界がはっきりしているものの二者がある。底部を含む個体数では前者が3点、後者が4点ある。

I b類 糸切りでロクロから離し、調整を行なわない壺形土器である。出土例は2点のみで、口径に比して底径の大きいものである。

I c類 高台を伴なう高台付壺である。出土例は1点のみで、底部の切り離しは糸切り技法による。

II a類 体部内外面に、横方向および縦方向の刷毛目をもつ土器群である。体部片のみ2片出土している。口辺部の形態は不明であるが、傾きからみて壺形土器の一部と思われる。

II b類 体部内外面に、叩きによる成形をもつ土器群である。外面には平行の叩き目が、内面には青海波文ないし指による押圧痕が認められる。かなり大型のもので、外面に自然釉の認められるものもある。小片も含めて14片出土している。口辺部の形態は不明である。



第19図 寺裏遺跡 出土遺物

## 6 まとめ

- (1) 寺裏遺跡の調査は、4日間という試掘程度のものであるが、竪穴式住居跡1棟と焼土1ヶ所が発見された。
- (2) 1号住居跡の時期は、出土土器の様相が後述する大曾根条里遺構下反田地区の1号住居跡等に類似しており、ほぼ9世紀（平安時代）頃に属するものと考えられる。ただしカマド底面から出土した土師器Ⅱa類の壺形土器は、形態からみて9世紀より若干新しくなることも考えられ、厳密には9～10世紀頃と捉えておきたい。
- (3) 本遺跡からは、このほかに5世紀（古墳時代）前後の土器も少量出土する。明園寺の北側からは、この時期に属すると思われる壺形土器も幾つか出土しており、今後さらに検討を要する。

## 第五章 大曾根条里遺構

所在地	山形市大字古楯字高橋274の1
調査期間	昭和48年8月16日～9月3日・10月29日～11月16日（延31日）
発掘面積	532m <sup>2</sup>
調査者	佐藤鎮雄・佐藤庄一・名和達朗・保角里志
調査補助員	渋谷孝雄・中寫 寛・鈴木和夫・中山利昭（以上山形大学学生） 茨木光裕（日本大学学生）横戸昭二・秦 昭繁

### 1 遺跡の立地

大曾根条里遺構は、山形盆地の南西隅山形市の西6.5kmにある。山形市の西をほぼ南北に流れる須川の西岸に位置し、上反田・下反田部落から古館・替所にいたる南北15町×東西17町の範囲が柏倉亮吉等（註一）によって推定されている。南北の軸がほぼ磁北を指し、長地式を基本にするという。遺跡付近は白鷹山系に源を発し、須川に注ぐ後明沢川と、はずかし川が形成した沖積地の強度のグライ層上に立地する（第20図）。

今回発掘調査を実施したのは、下反田東地区と下反田西地区および高橋地区の三ヶ所であるが、下反田西地区は水田面とは約1mの比高差をもつ台地部にあり、地割的にも条里遺構とは言い難い。また高橋地区も地割的には条里遺構の範囲内に含まれるが、東側の水田面とは80cm以上の比高差をもつ微高地に立地する。発掘区域は地目はすべて水田である。

### 2 調査の経過

大曾根部落周辺は、古代の条里遺構やそれに関連する集落が広く分布する場所である。この地域が昭和48年度に山辺南部地区として県営大規模整備事業にかかることになり、8月に緊急調査を実施した。当初は下反田東地区の条里遺構の調査を主とする予定であったが、分布調査の際下反田西地区に土器を多量に散布する地点を発見したので、この地区も同時に調査を行なった。一方小幡部落の南、高橋地区にも以前から土器が出土し注目されていたが、この年の秋になって本地區も圃場整備予定地になったため、急ぎ発掘調査を行なった。

下反田東地区は条里遺構の確認を目的としたものであるが、他の二地区に期間をさかれ、幅1～2m、長さ10mのトレンチを三本発掘するに留まった（第21図）。下反田西地区はまず15m四方の発掘区を9個設定し、試掘程度にトレンチを入れた上で、遺構の検出地域2ヶ所を拡張精査した（第22図）。高橋地区は初め幅2m、南北100m、東西60mの直交するトレンチを入れ、つぎに中央部の遺構密集地を拡張精査した（第27図）。



第20図 大曾根条里遺構地形図

## 下反田東地区

### 1 発掘

山辺町から山形市谷柏までの須川西岸地域には、条里制遺構が断続しながらも広く散布して残されている。これらは航空写真や地籍図でも明瞭であり、同一企画によったものと考えられている。大曾根条里遺構もその1つである。

今回の調査は、現在不自然に蛇行している畦畔・水路地点を選んで発掘し、その下面に企画性を持つと推定される古代条里遺構の旧畦畔・水路等を検出しようとするものである。調査はA・B・C3本のトレンチを設定した。

**Aトレンチ** (図版17) 南北9m、東西2mの南北に長いトレンチである。トレンチ内の地層は4つに分かれ、上から1層—茶褐色耕土、2層—暗茶褐色微砂、3層—黒色粘質微砂、4層—黄灰色疊合み砂層となる。

トレンチ北側に幅30cm、高さ25cmの東西に延びる高まりが発見され、その肩部に打ち込みの杭が1本検出された。杭の長径8cm、現存する長さ約30cmを測る。杭は上部が2層に達し4層に打ち込まれている。この高まりは現在の畦畔より40cm北側にあり、少くとも1時期古い畦畔と考えられる。遺物は発見されなかった。

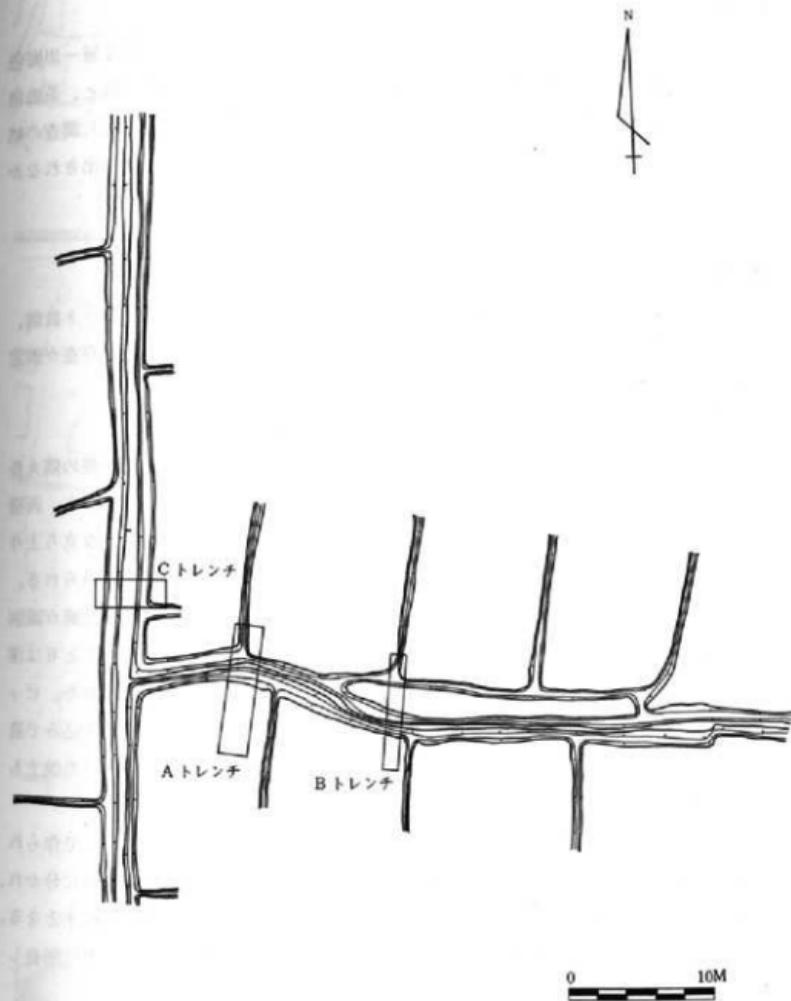
**Bトレンチ** (図版18) 南北8m、東西1mの南に長いトレンチである。トレンチ内の地層はAトレンチと同様である。

トレンチ北側に幅90cm、深さ30cmの東西に延びる落ち込みが発見され、その北の高まりに矢板が4枚列をなして検出された。矢板の厚さは1cm、幅は15cm前後である。落ち込みおよび矢板は3層を掘り込んで作られ、覆土は2層である。この落ち込みは現在の水路より15m北側にあり、少くとも現在の畦畔より1時期古いものと考えられる。遺物は発見されなかった。

**Cトレンチ** (図版18) 南北2m、東西5mの南北に長いトレンチで、現在の大畦畔および水路を切断している。トレンチ内の地層はAトレンチと同様である。

トレンチ中央部に幅300cm、深さ48cmの南北に延びる落ち込みが発見され、落ち込み内北壁寄りに打ち込みの杭が5本検出された。杭の直径は9cmである。落ち込みおよび杭は2層を掘り込んで作られ、覆土は1層である。この落ち込みは現在の水路とほぼ一致する。遺物は発見されなかった。

今回の調査ではA・Bトレンチから現在よりも古いと考えられる畦畔が2本発見された。ただし伴出遺物がないため遺構の時期および条里遺構との関連は不明である。



第21図 下反田東地区トレンチ配置図

## 下反田西区

### 1 発掘

本地区の地層はほぼ3つに大別される。上から第Ⅰ層—茶褐色微砂層、第Ⅱ層—黒褐色粘質微砂、第Ⅲ層—灰褐色砂質粘土で、第Ⅰ層は地点により明茶褐色砂質微砂と、茶褐色砂質微砂にわかれ。遺物は第Ⅱ層に多く、第Ⅲ層は無遺物層である（第25図）。調査の結果、発掘区東側に住居跡等の遺構および遺物が発見され、西側にはほとんど検出されなかつた。

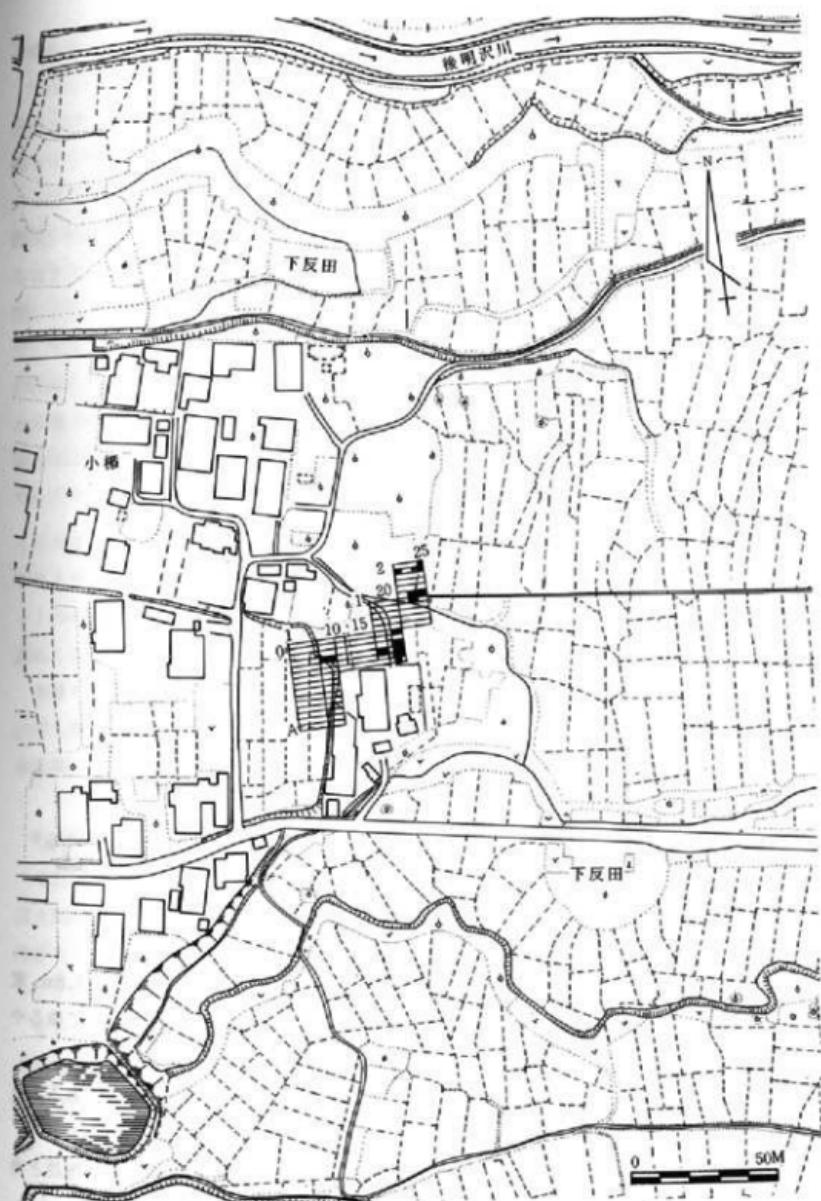
### 2 遺構

本地区で検出された遺構は、竪穴住居跡1棟、土壙1基、溝状遺構3本、ピット数個、落ち込み遺構1ヶ所等である。このほかにも発掘区に隣接して幾つかの遺構の存在が推定されるが、日程の都合から割愛せざるを得なかつた。

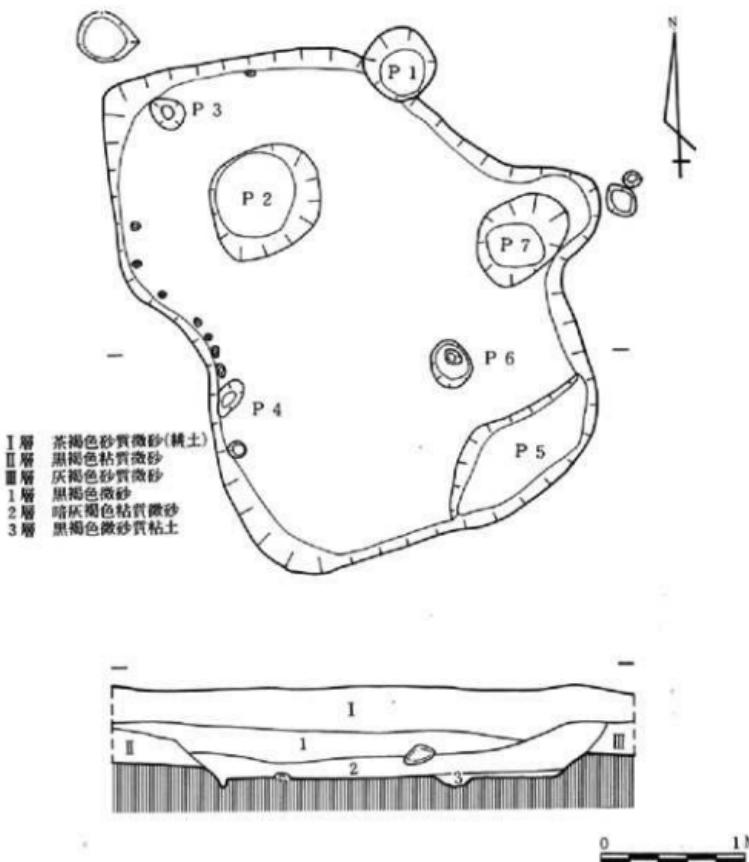
#### 1号住居跡（第23図）

発掘区の東南隅J・K19区で検出された竪穴住居跡である。平面プランは不整の隅丸長方形を呈し、南北3.5m、東西2.6mを測る。東壁中央部に張り出した落ち込みをもち、西壁中央が内側にくびれている。床面から壁上面までの高さは10~20cmであるやかな立ち上りを示す。床面はⅢ層の砂質粘土で比較的やわらかいが数ヶ所に土の入れかえがみられる。住居跡内から18個のピットと落ち込みが検出された。ピット3と6は掘り方と柱痕が識別できる。西壁に添ったピット列は、土止めないし板壁の杭列であろう。ピット2と6は深さ約25cmの落ち込みで、ピット2の内部および周辺からは須恵器が多く検出された。ピット5内からはまとまった土器は出土していない。ピット7は深さ13cmの浅い落ち込みで遺物は出土していない。カマド跡とも考えられるが、基部や煙道の痕跡がなく、また焼土もほとんど認められなかつた。

1号住居跡は、Ⅱ層—黒褐色粘質微砂およびⅢ層—灰褐色砂質粘土を掘り込んで作られているが、Ⅱ層の掘り込み状況はよく識別できなかつた。住居跡内の覆土は3層に分かれ、上から順に1層—黒褐色微砂、2層—暗灰褐色砂質微砂、3層—黒褐色微砂質粘土となる。遺物はとくに1層から多く出土する。なお住居跡北側のピット2周辺からは、床に密着した状態で須恵器壺・蓋・甕等が11点散在して検出された（第26図1~7）。



第22図 下反田西地区地形図



第23図 下反田西地区1号住居跡

**1号土壤（第24図）**

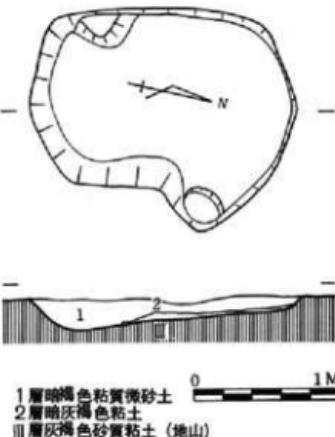
1号住居跡の北東K・L19区にある。平面プランは不整の楕円形を呈し、南北1.8m、東西1.25mを測る。遺構検出面から壇底までの深さは20cm前後で、北から南にかけてゆるやかな落ち込みを示す。北東隅に土壤よりやや新しい時期にピットがある。

土壤内の覆土は2層に分かれ、上層が暗褐色粘質微砂、下層が暗灰褐色粘土である。遺物は上層から発見された。須恵器环・同高台付环(第26図9・10)等が出土している。

土壤の性格は明らかでないが、覆土や遺物の状態から1号住居跡と関連をもつ施設と考えられる。

### 落ち込み造構（第25図）

発掘区の北端T～V22・23区で検出された性格不明の落ち込み造構である。調査期間の都合から全体を発掘できなかったが、平面プランはほぼ円形で東側が開いた形を呈する。西側の状態は不明である。発掘区域内における大きさは、南北4.4m・東西5.0mを測る。北壁に平行して幅30cm、深さ5cm前後の溝が走り、中央やや西寄りに直径100cm、深さ35cmの円形のピット（ピット1）を有する。底面から壁上面までの高さは20～40cmを測る。底面はほぼ平坦で壁近くからゆるやかな立ち上がりを示す。やわらかい緑灰色砂質粘土でグラ



第24図 下反田西地区1号土壤

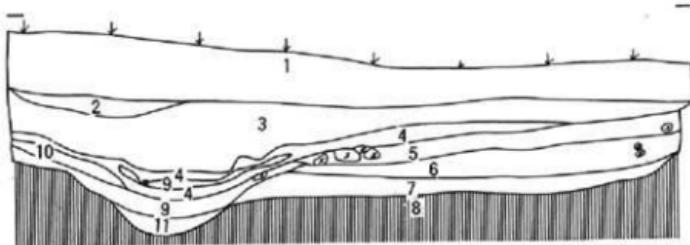
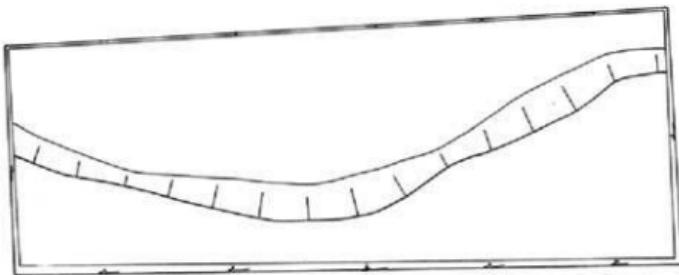
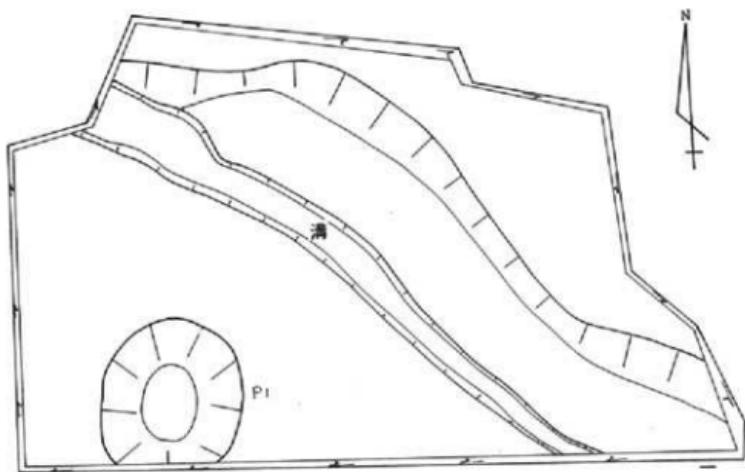
イ化が進んでいる。溝は西から東にかけて僅かの勾配をもつ。ピット1は、壁および底面がゆるやかな丸みを呈し、南壁に添って7本の杭および板状の板材が検出されている。ピット内は灰褐色粘土と、黒色のビートを含む粘質微砂が互層になって堆積するが、遺物は認められなかった。

本落ち込み造構の覆土は、耕土を除き8層に分けられ、自然堆積的な状況を示す（第25図）。遺物は5～7層に含まれるが、とくに7層下部底面近くに多く出土した（第26図）。本造構の性格は明らかでないが、ピットの様相等から人為的な造構であることはいえる。

### その他の造構

Y21区とZ25区およびL17区から溝状の造構が3本検出されている。いずれも幅60cm、深さ30cm前後のもので前2区が東西方向、後1区が南北方向を指す。覆土は暗灰褐色粘質微砂で、遺物は土師器甕・須恵器壺・壺等が出土しているが小片である。いずれの溝もトレンチ内の発掘に留まったため、性格は不明である。

また1号住居跡の北L・M-19・20区からは、直径40cm、深さ20～30cm前後のピットが6個発見されている。掘り方と柱痕の区別は検出できなかった。ピット内の覆土は1号土壤とほぼ同様である。遺物は須恵器壺、内面に黒色化処理を施した土師器甕等がある。



1層 耕作土  
 2層 暗褐色粘土  
 3層 褐色粘質微砂土  
 4層 灰褐色粘土  
 5層 暗褐色粘土  
 6層 茶褐色粘質微砂土  
 7層 暗褐色砂質粘土  
 8層 緑灰色砂質粘土 (地山)  
 9層 黑色粘質微砂土 (ビート含み)  
 10層 灰色褐砂層  
 11層 黑色粘土 (ビート含み)

0 1 M

第25図 下反田西地区2号落ち込み

### 3 遺物

本地区から出土した遺物は、土師器、須恵器合わせて小型整理箱8箱分である。1号竪穴住居跡と落ち込み造構付近の出土土器が全体の約2割を占める。他のグリッドの土器は細片が多いため、ここでは両造構の覆土内出土土器を中心に記述する。

#### 1号竪穴住居跡

本造構の覆土および床面からは、土師器、須恵器合わせて小型整理箱3箱分の土器が出土している。須恵器が全体の8割を占め、土師器は比較的少ない。

##### 土師器

环形土器、甕形土器の二つの器形がある。確実に壺形土器と認定できるものはみられなかった。土師器は、器形および製作技法等から、つぎの3類に分類できる。

I a類 环形土器で、内面が丁寧なヘラミガキのち黒色化処理されているものである。口径に比して器高が比較的高く、体部は内側気味に立ち上がる。磨耗が著しく。底部の切り離しは不明である。体部にロクロ成形の痕がみられる。8片出土している。

I b類 环形土器で、内面が黒色化処理されていないものである。口径に比して器高が比較的高く、体部は内側気味に立ち上がる。底部の切り離しは不明である。内外面の再調整は認められない。覆土1層から2片出土している。

II類 口縁が強く外反し、長脚の体部を持つ甕形土器である。器形を復元できるものはない。体部外面に縱方向の刷毛目があり、内面は頸部近くにヘラナデや横方向の刷毛目が施されている。内面に黒色化処理をしているものもある。底部には木葉痕が多く認められる。細片も含め80片程出土している。

##### 須恵器（第26図1～5・12）

环形土器、蓋形土器、甕形土器、壺形土器等の器形がある。須恵器は、器形および製作技法等からつぎの8類に分類できる。

I a類 ヘラ切りでロクロから離し、調整を行なわない环形土器である。底部と体部の境界がはっきりせず、丸味をもって体部から底部へと移行するものと、体部と底部の境界がはっきりしているもの（6）の二者がある。底部を含む個体数では、前者が7点、後者が6点ある。口径13cm、器高3.5cm前後を測る。

I b類 糸切りでロクロから離し、調整を行なわない环形土器である。口径に比して底形が比較的大きいものと、口径に比して底径の小さいもの（3.5）二者がある。前者には、体部と底部の境を一部ヘラ調整しているものがあるが、明瞭なヘラ削り調整とは認めがたく、一括して本類に入れる。後者は底形が小さい割に、器高がそれほど高くない。前者が2点、後者が6点ある。

I c類 高台を伴なう高台付壺である。底部の切り離しは、すべて糸切りによる(4)。高台は体部成形のち接着している。5点出土している。

II a類 糸切りでロクロから離し、回転ヘラ削り調整を行なう蓋形土器である。天井肩部が、回転ヘラ削りによって明瞭に稜を形成するもの(2)と、比較的なだらかに傾斜するもの(1)の二者がある。前者が1点、後者が5点出土している。両者ともつまみ部は凹状で、蓋の口縁部は端部を下方へ折り上げただけである。器高は4cm前後と比較的薄い。

III a類 口辺部が「く」字状に屈折し、外面にロクロ調整、内面に横方向の刷毛目調整を持つ蓋形土器である。土師器II類に類似し比較的小型である。1点出土している。

III b類 口辺部がやや外反し、内外面に叩きによる成形を持つ蓋形土器である。外面には格子目状ないし平行の叩き目が、内面には青海波文ないし指による押圧痕が認められる。かなり大型のもので、内外面に自然軸の認められるものもある。1点口辺部に波状の沈線を持つものがある。本類は全部で9点出土している。

IV a類 ロクロ成形の長頸壺である。頸部片1点のみで、頸部の長さ約10cmを測る。やや小型の蓋形土器である。

IV b類 輪積み成形、ロクロ調整の大型の壺形土器である。底辺部のみ1点発見されており(12)、高台を伴なう。

### 落ち込み遺構

本遺構の覆土および床面からは、土師器、須恵器合わせて小型整理箱約2箱分の土器が出土している。須恵器が全体の6割を占め土師器も比較的多い。

#### 土師器須恵器

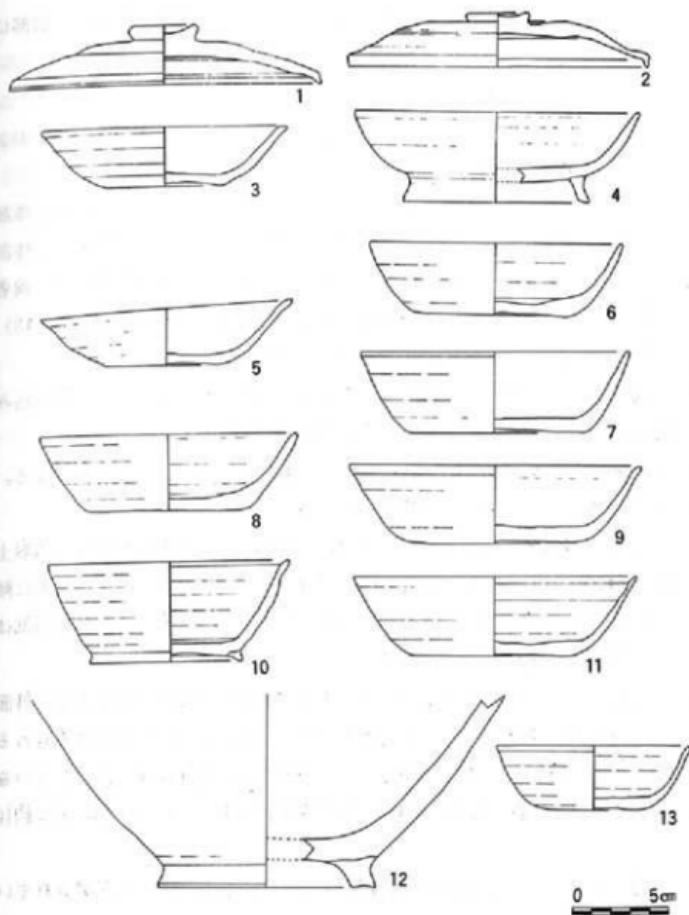
壺形土器、蓋形土器、壺形土器の三つの器形がある。土師器は、器形および製作技法等から、つぎの4点に分類できる。

I a類 壺形土器で、内面が丁寧なヘラミガキの後黒色化処理されているものである。器形は1号住居跡I a類と同様である。8片出土している。

I b類 壺形土器で内面が黒色化処理されていないものである。器形は、1号住居跡のI b類と同様である。9片出土している。

II類 口縁が強く外反し、長胴の体部を持つ蓋形土器である。器形を復元できるものはない。体部外面に縦方向の刷毛目があり、内面はヘラナデや横方向の刷毛目文が施されている。底部片が3点あり、1点に木葉痕が認められる。細片も含め90片程出土している。

III類 口縁部が軽く外反し、丸味のある体部をもつ小型の壺形土器である。器形を復元できるものが1点出土している。口径12cm、器高約13cmを測る。体部外面と縁部内側に、椎



第26図 下反田西地区出土土器実測図

および横方向の刷毛目文が施され、内面に縦方向のヘラ削り調整を有する。底部には木葉痕がみられる。

須恵器 (第26図7~9・13)

环形土器、蓋形土器、斐形土器、壺形土器等の器形がある。須恵器は、器形および製作技法等からつぎの7類に分類できる。

I a類 ヘラ切りでロクロから離し、調整を行なわない环形土器である。底部と体部の境界がはっきりせず、丸味をもって体部から底部へと移行するもの(9・13)と、体部と底部の境界がはっきりしているもの(8)の二者がある。底部を含む個体数では、前者が6点、後者が2点ある。また前者には、口径10cm、器高4cm前後の小形の环形土器(13)が3点あり、今後の検討によってさらに類を分けられる可能性をもつ。

I b類 糸切りでロクロから離し、調整を行なわない环形土器である(7)。落ち込み遺構からの出土例は1点のみで、口径に比して底径の比較的大きいものである。

I c類 高台を伴なう高台付环である。底部の切り離しは、すべてヘラ切りによる。高台は体部成形の後、接着している。3点出土している。

II類 切り離し技法は不明であるが、天井肩部に回転ヘラ削り調整を行なう蓋形土器である。肩部が回転ヘラ削りによって明瞭に稜を形成するものと、比較的ながらかに傾斜するものの二者がある。前者が2点、後者が2点出土している。両者とも、つまみ部は凹状で口縁部は端部を下方に折り上げただけである。

III b類 口辺部がやや外反し、内外面に叩きによる成形を持つ斐形土器である。外面には格子目ないし平行の叩き目が、内面には青海波文ないし指による押圧痕が認められる。かなり大形のもので、外面に自然軸の認められるものもある。約4個体分出土している。

IV a類 ロクロ調整の大形の長頸壺である。頸部片1点のみで、残存頸部の長さ約10cmを測る。

IV b類 輪積み成形、ロクロ調整の大形の短頸壺である。肩部片が3点発見されている。

ところで、これらの土器群の時期はいつ頃に比定できるものであろうか。土師器の环形土器I a、I b類は糸切りでロクロから切り離すもので、広義の「表杉ノ入式」の範疇に入るものである。ただし1号住居跡、落ち込み遺構とも須恵器環に比して量が少ないこと、斐形土器III類の底部に木葉痕が多く認められること等から、時期的にはある程度古くみることが可能である。

須恵器の环形土器は、I a類としたヘラ切りでロクロから離し、調整を行なわないものが、量的に過半を占める。I a類は安養寺下団窯跡(註)で、多賀城III期の瓦と共に

木業  
製作  
境界  
座部  
5点  
3点  
肩か  
台は  
であ  
する  
大で  
は格  
かな  
を測  
不形  
事に  
こと、  
ある  
もの  
半し

ており、8世紀末から9世紀頃の年代が考えられる。I b類は、糸切りでロクロから切り離し、調整を行なわないものであるが、本類の内でも口径に比して底径が比較的大きいものや、底径が小さくとも器高の低いものがほとんどである。

土器群総体としての年代は多賀城周辺の研究成果（註）等も考慮に入れ、概略的に9世紀代と把えておきたい。時期的には平安時代にあたる。

1号土壇および溝状遺構の年代も、伴出遺物は1号住居跡および落ち込み遺構とほぼ同様であり、同時期に属するものと考えられる。

## 高橋地区

### 1 発掘

構造の層序 西方からの緩斜面に沿って、比較的単純に堆積している。全体では、六層に分けられる。(第28図1)

第Ⅰ層 表土 いわゆる耕作土で、遺跡全体に認められる。色調は茶褐色である。15~20cmの厚さである。

第Ⅱ層 青灰色粘土層 遺跡の東側の方に主に堆積している。厚さは5cm前後である。

第Ⅲ層 黄褐色微砂層 鉄分を多く含み硬くしまっている。遺跡全体に認められる。厚さは3~4cmである。

第Ⅳ層 暗茶褐色砂質土層 遺跡の西方で厚く堆積し、東方にかけて徐々に薄くなり、トレンチの東端では消えている。木炭を少量含み、遺物を含む。4~25cmの厚さである。

第Ⅴ層 暗茶褐色砂質土層 色調は上層よりも黒味が強く、遺跡全体に認められる。遺物を含む。15~20cmの厚さである。

第Ⅵ層 黄褐色砂層 やや粘性がある。柱穴・溝状構造などを構築する。

遺跡の層序 柱穴の覆土は、1号建物跡と2号建物跡ではそれぞれ2つに分けられ、ピット17に分けられる。1号土壤では8つに分けられる(第28図1~6)。

1号建物跡 1層：黒褐色砂質土・木炭・風化礫・遺物を含む。

2層：淡青灰色砂質土 VI層の土を班状に含む(第28図5・6)。

2号建物跡 1層：黒褐色砂質土 やや茶色味があり、木炭を少量含む。

2層：黒褐色砂質土 上層より黒く、木炭を多量に含む(第28図4)。

ピット18 1層：暗褐色砂質土 VI層の土を多量に混入する。木炭を少し含む。

2層：暗褐色砂質土 上層よりも黒味が強い。

3層：黒褐色粘土層 木炭、VI層の土を多く含む。

4層：黒褐色砂質土 木炭を多量に含む。

5層：黒褐色粘土層 黒味が強い色調で、3~4cm大のやや粘性のある砂のブロックを含む(第28図1)。

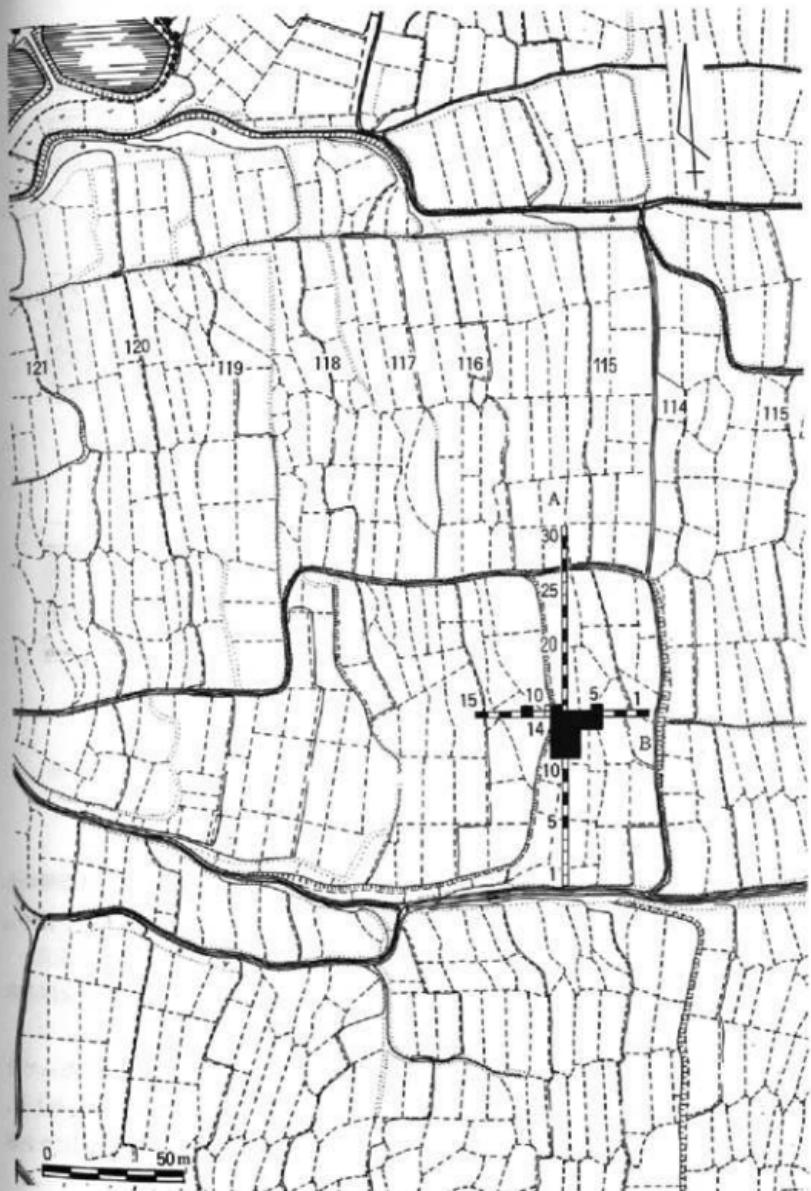
1号土壤 1a層：黑色腐食土層 風化礫を含む。

1b層：黑色腐食土層 やや灰色をおびた砂を含む。

2層：茶褐色礫層 1層と漸移的に分けられる。

3層：灰褐色砂層 ほぼ單一で、異物を含まない。

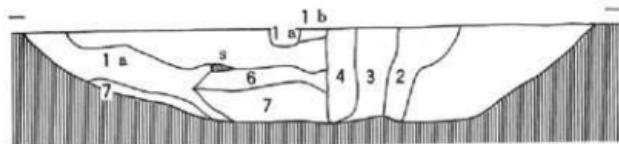
4層：青灰色砂層 黒色土を混入する。



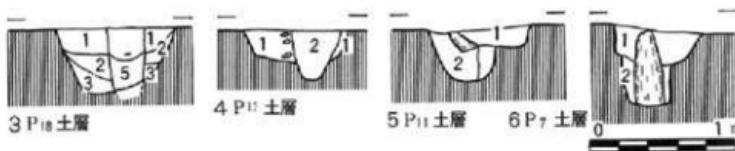
第27図 高橋地区 地形図



1 遺跡の地層



2 1号土壤土層



第28図 土層断面図

5層：灰褐色砂層 風化礫を含む。

6層：茶褐色砂層 風化礫を少し含む。

7層：青灰色砂質粘土層。

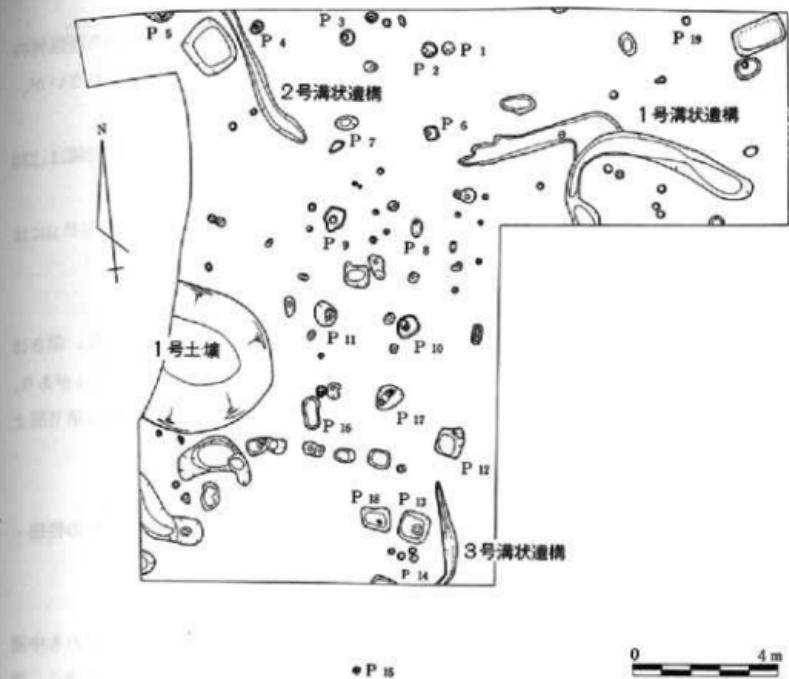
8層：砂礫層（第28図2）。

**遺構の分布** 今回の調査では、60本以上を数える柱穴群と溝状遺構、それに性格不明の土壙を検出した。とりわけ柱穴群の中には柱根を残しているもの（P<sub>2</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>11</sub>・P<sub>15</sub>・P<sub>18</sub>・P<sub>17</sub>・P<sub>18</sub>）がある。遺構の確認面は第VI層上面である。

遺構は、主にA・B両トレンチが交差する付近に集中している。但し、遺構群全体の分布及び構造は、調査区域が限られているため不明である（第29図）。

**遺物の分布** 遺物は、第IV層と第V層及び遺構内より出土し、比較的広範囲にわたって分布しているが、遺構の場合と同じようにA・B両トレンチの交差する付近に多い傾向がある。

出土遺物は、土師器・須恵器・柱根・繩文時代石器である。土器は、全て小破片で全形を量れるものがほとんど認められない。



第29図 遺構配置図

#### 4 遺 構

##### 1号建物跡（第30図）

A・B両トレチの交差点の南側に位置する。確認面は第VI層上面である。検出範囲から南北3間、東西3～4間の掘立柱P<sub>1</sub>～P<sub>11</sub>による建物跡と推定される。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は、南北軸より少しずれているが、東西軸にのっているので本建物を構成すると思われる。

南北軸は、約13.5度東に偏する。柱間の間隔は、P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>の間で40cm程延びるほかはそれぞれ240cm程（約8尺）である。

掘り方は、円形ないし不整円形を呈し、底面はほぼ平らである。直径40～50cm、深さ40～50cmを計る。P<sub>2</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>11</sub>には、丸柱の柱根が残っている。特にP<sub>2</sub>の場合は柱の下に須恵器の甕の破片（第56図）を敷いている。

本遺構は、検出範囲が東側のみに限定されたため、その性格及びプランは不明である。

## 2号建物跡（第30図）

拡張区の南東隅に位置する。確認面は第Ⅶ層上面である。検出したのは建物の西側列の掘立柱列（p12～p15）である。検出範囲が狭く、建物全体の平面プランはつかめないが、確認したのは掘立柱による建物跡の北西隅に、相当すると推定される。

南北軸は29度東に偏する。1号建物跡とは軸の方向が平行ではない。柱間の間隔は、210cm程（約7尺）である。

掘り方は丸味のある四角形を呈する。長さは70cm前後、深さは40～50cmを計る。P14には柱根が認められたが、全体を確認することができなかった。

## 1号溝状遺構（第31図）

拡張区の北東に位置する。西側より延びる溝を切って、U字形に曲がっている。深さは20～30cmで、内部より土器が少数出土している。溝の東端の両脇に対象的なピットがあり、またその内側には小ピット群を配しているが、その性格は不明である。確認面は第Ⅶ層上面。

## 2号溝状遺構（第30図）

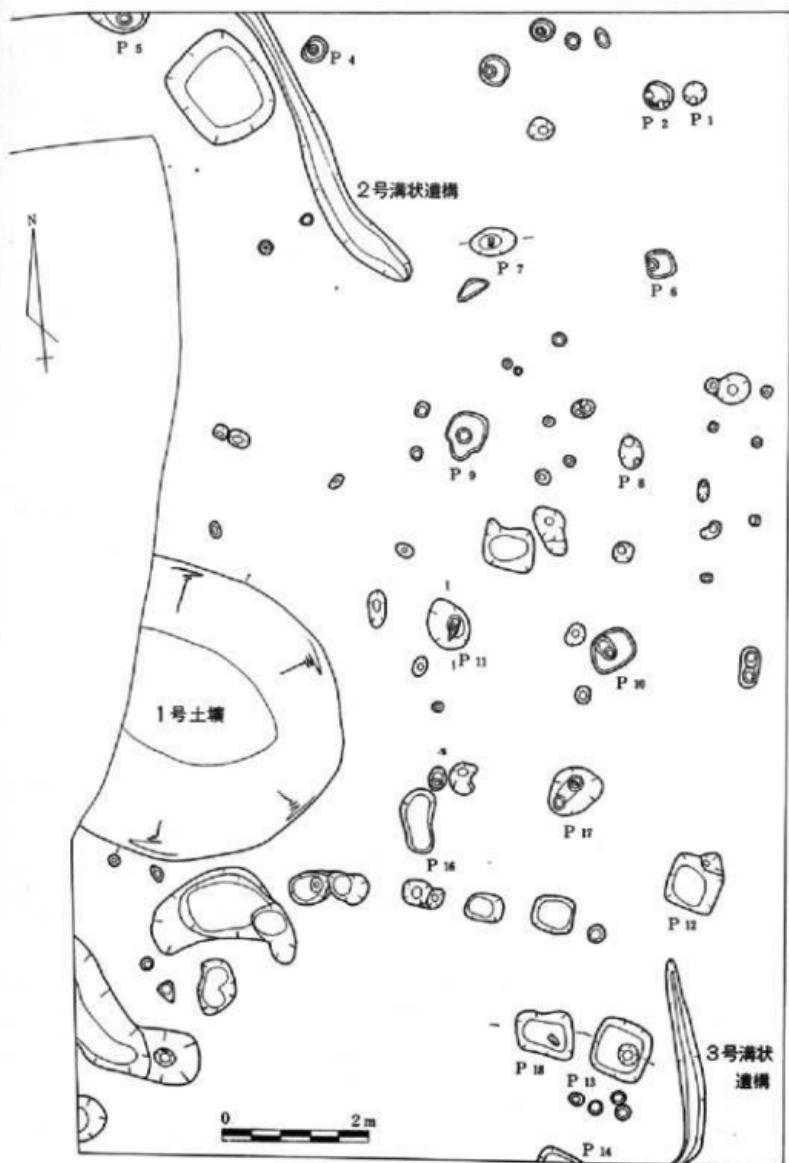
1号建物跡のピット5の西側より北西方向に走る溝である。検出範囲が短くその性格・全形は不明である。深さは10cm前後である。確認面は第Ⅶ層上面である。

## 3号溝状遺構（第30図）

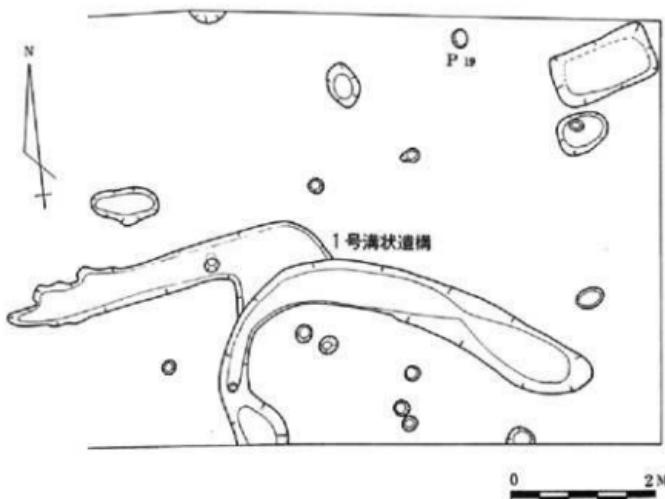
2号建物跡ピット11とピット12との間から南東に延び、南に屈折している。これも中途までしかとらえていないため、その全体は不明である。深さは5cm前後とかなり浅く、溝としての体裁をとり得ないかもしれない。確認面は第Ⅶ層上面である。

## 1号落ち込み（第30図）

1号建物の西側に位置する。約3mを検出した。横幅は約400cmで深さは65cmである。断面は、なだらかに落ち込んでいる。確認面は第Ⅶ層上面で覆土もかなり擾乱している。しかも、遺物が全然含まれていないことから後世のものかもしれない。



第30図 1・2号建物跡・1号土壤



第31図 1号溝状遺構

## 5 遺 物

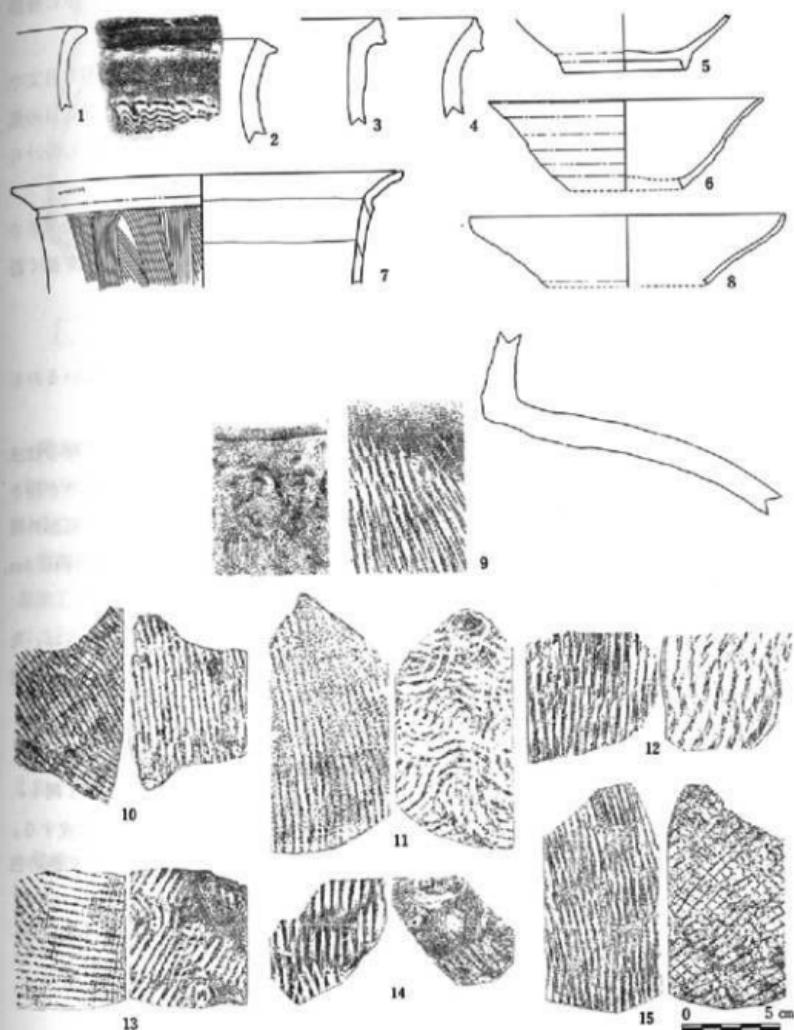
出土遺物は、須恵器・土師器・縄文時代の石器・柱根に分けられる。土器は全て細片で、一括土器及び完成品は出土していない。

**須恵器** 量的には一番多く、壺・高台壺・蓋・甕・壺の器形がみられる。

**壺** (図版6・図版24) 大半が細片で、全形は不明である。切り離し技法は、回転糸切りと範切りがある。ロクロ回転は右回転が多いようである。焼成は一般に良好であるが、中に酸化炎焼成により赤く焼けたものも含まれる。6は口縁部が少し外反して立ち上がり、6条のロクロ成形痕を残す。ロクロは右回転である。焼成は少しあまく全体に黄褐色がかかった色調を呈する。胎土は砂を含み堅緻である。口径14.2cm・器高4.2cm・推定底径6cmを計る。なお、量的には少いが高台壺も認められる。

**蓋** (図版24) つまみは扁平で中央部がわずかに突き出ている。肩部及びつまみ外周を範削り調整している。細片のため全形は不明であるが、肩部形成が明瞭なものとゆるやかなものとがある。ロクロは右回転である。焼成はあまりよくなく茶色っぽい色調である。胎土に粗砂を少し含んでいる。

**甕** (図版1～4・9～15・図版24) 全形を推し量れるものが少ないので、口縁部形状と体部の叩き目文の特徴を説明する。



第32図 高橋地区 出土土器

口縁部は、ほぼ真直ぐに立ち上がるもの（3）と外反するもの（1・2・4）がある。口唇部は、水平に張り出すもの（1）、外側に傾斜するもの（2）、1～3条の稜をめぐらして大きく反り返るもの（3・4）がある。頸部は内外面とも丁寧に横ナデされ、下に櫛描波状文が施されているもの（2）も認められる。

体部の叩き目は、その工具の特徴により5つに大別される。全て外面は平行叩き目文であるが、内面は青海波文→調整（9）、青海波文で無調整（11）、平行叩き目文（10）、目の荒い青海波文（12）、青海波文→平行叩き目文→調整（13・14）、格子叩き目文（15）に分けられる。作りは全体に厚手で、焼成は良好である。胎土に粗砂を含む。

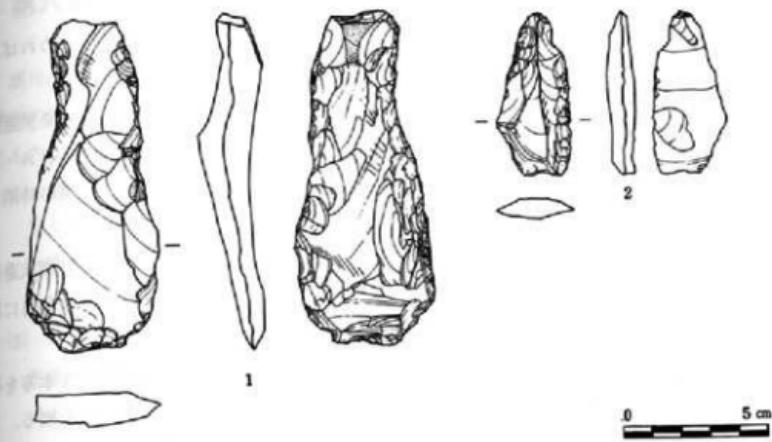
**壺**（図版24） 出土数は少ない。ほとんど体部及び口頸部の破片である。全体に薄手で口頸部はきれいに横ナデされている。肩部から口頸部にかけてゆるやかなカーブを描く器形である。焼成は良好で青灰色の色調である。胎土は少し砂を含み堅緻である。

**土師器** ほとんど細片で、壺・高台壺・甕の器形に分けられる。表面の風化しているのも多くみられる。

**壺**（第32図8・図版25） 内黒や両黒で磨きを施されているものが多い。切り離し技法はほとんど回転糸切りである。回転方向は右回りが多い。8は、両黒で入念に磨きが施されている。体部は少し外反してのび、口縁部は内側して立ち上がる形態を持つ。底部外周にはナデ調整がみられる。焼成は良好である。胎土は砂を含みしまっている。口径16.4cm、器高3.8cm（推定）を計る。

**高台壺**（第32図5・図版26） 内黒で磨きがあり、壺とほぼ同じ特色を示す。5は、丸味のある体部と直立気味に開く台部を持ち、内黒で磨きを加えている。また台部の内外周囲にナデ調整を施している。外面は灰白色を呈し、焼成は良好である。胎土に砂を含む。底径6.4cmを計る。

**甕**（第32図7・図版26） 体部はすんなりとのび上がり、口縁部は強く外反して聞く。全体的に砲弾形に類似する土器である。口縁部の外面は横ナデされ1条の溝を形成する。体部は下半部より櫛描きが施され、内面には粘土紐の積み上げ痕がみられる。淡褐色の色調で焼成は少しあまい。胎土に粗砂を含む。口径20.9cmを計る。



第33図 出土石器

**縄文時代石器** 打製石斧と石籠が各1点づつ出土している。前者は、ピット19内より出土しているが、両者とも全体に磨滅しており、付近より縄文土器などの関連遺物の検出をみなすことから、流入したものと考える。

**打製石斧**（第33図1・図版26） いわゆる擦形を呈する石斧で弧状の刃部を形成し、両面加工である。背面の剥離部に縱方向に走る擦痕が認められる。これは一定の方向性を持つことから、使用痕の可能性も考えられる。石材は硬質頁岩を用いている。長さ11.5cm・幅4.7cm・重量85gである。

**石籠**（第33図2・図版26） 比較的小形で片面加工の石器である。刃部は欠いている。周縁部は丁寧に剥離が加えられている。断面は凸レンズ形を示す。長さ5.7cm（推定）。幅2.5cm・重量10gである。硬質頁岩を石材に用いている。

**柱模** ピット2・7・11・15~17・18より出土している。全て丸柱である。針葉樹を用いているが、その種類は不明である。ピット7は保存状態が良好であった。柱の基部は鋭利な切断面を示し、樹液によって黒色化している。現存する長さ50cm・直径16cmである。

## 6 まとめ

以上三つの地区に分かれて発掘した調査結果であるが、その成果を簡単にまとめれば次のようになる。

- (1) 大曾根地区の航空写真や大縮尺の地図をもとに現地踏査した結果、広範囲に条里造構と認められる畦畔の区画を確認できた。さらに下反田東地区を試掘したところ、A・B両トレンチから旧畦畔を2個所検出できた。ただし伴出遺物がないため、造構の時期および条里造構との関連は不明である。
- (2) 下反田西地区では、堅穴住居跡1棟、落ち込み造構1個所、土壙1基および溝状造構3本等を検出できた。出土遺物からみて、時期的には平安時代前半（9世紀）に属する集落跡と考えられる。
- (3) 高橋地区では、掘立建物跡2棟、柱穴群約40個、土壙1基および溝状造構3本等を検出できた。1号建物跡は、南北3間、東西3～4間の建物で、柱間は約8尺を測る。2号建物跡は、未発掘部分が多く柱穴の構成は不明であるが、柱間は約7尺を測る。出土遺物からみて、時期的には平安時代前半（9世紀）に属する集落跡と考えられる。
- (4) 下反田西地区と高橋地区は、両者とも張り出した微高地の先端に位置し、出土遺物からほぼ同時期の集落跡があったと考えられる。限られた発掘面積であるが、下反田西地区は堅穴住居跡、高橋地区は掘立建物跡と、住居の形態に差異が認められる。
- (5) 大曾根条里造構の考古学的調査を目的としながら、三地区とも条里造構との関連はなお不明である。また12世紀になって文献に登場する大曾瀬荘との関係も課題である。三地区合わせて延31日間という調査日数は、何としても隔靴搔痒の感を免がれない。

註一 柏倉亮吉 村山平野の条里制遺跡について 「歴史」六 昭和28年

## 第六章 総括

須川左岸地域の須川西部・山辺南部地区県営圃場整備事業昭和48年度施工区域に係る4遺跡の調査結果は以上の通りである。この地域の考古学的課題は多いが調査によって果せたものは少ない。調査の成果と今後の課題の主たるものあげて総括したい。

- (1) 本沢川流域の二位田・本沢川Ⅱの両遺跡では、後の時期の遺跡と重複し遺存状態は良くなかったが、縄文中期末後期初頭の遺跡立地をおさえるとともに特色ある土器等の遺物を採集できた。対岸の谷柏K遺跡や本沢川Ⅰ遺跡などともに本沢川流域における縄文時代の様相を明らかにしていく上で参考になるであろう。
  - (2) 二位田遺跡で少量はあるが弥生式土器片を得たことは、山形平野における弥生時代遺跡の分布が須川左岸地域に及んでいることを意味する。またこれによりこの地域にある古式土師器の出土する遺跡との関りを一層具体的に追究できるものと思う。
  - (3) 寺裏遺跡出土の古式土師器は周辺の同時期の遺跡の土師器（例えば山辺町大塚遺跡）とともに土師器編年研究の好資料となるであろう。
  - (4) 平安時代と推定される二位田・本沢川Ⅱ・寺裏・下反田の各遺跡で検出された住居跡等は、本地域において調査資料が少なかっただけに、集落研究の一助となるとみられる。
  - (5) 下反田地区の東の地点で大曾根条里遺跡の一部とみられる古い畦畔を確認したが、その年代については明らかにできなかった。条里遺構はその本来的な性格により年代を得ることは難しい。柏倉亮吉によれば、山形平野西南部周辺には10余所の条里遺構が遺存するという（註一）。須川西部・山辺南部地区県営圃場整備事業計画区域には四つの条里遺構が存在する。南より二位田～柏倉周辺・村木沢周辺・大曾根地区・山辺南部地区である。大曾根条里遺構はそれらの一つで、南北線の方向は真北を指し、坪の広がりは東西9×南北10であるという。
- ところで条里遺構は本来的に古代農民の生産の場所であるからして近くにそれに関係した集落があるはずである。現段階で位置的に近接している集落跡は下反田集落跡である。ここで使用された土師器・須恵器の年代は平安後期であるが、簡単に大曾根条里遺構に結びつけてよいかどうか。同じようなことは、二位田・寺裏遺跡についてもいえるのである。さらに文献に出てくる大曾根莊との関りも問題となってくるのである。

註一 柏倉亮吉 「条里制のあと」 山形市史上巻 昭和48年3月

註二 註一と同じ。

## —第 II 部—

## 第Ⅱ部

### 最上川地区圃場整備事業関係遺跡調査

## 第一章 調査に至る経過

庄内平野の最上川左岸より京田川右岸に至る地域は、本県の母なる大河最上川下流の氾濫原と出羽丘陵羽黒山系に源を有し西流する京田川の氾濫原によってなる平地である。庄内平野中央部に位置し、東は出羽丘陵羽黒山系の緩やかな丘陵によって画される。庄内平野でも米どころとして知られ、見渡す限りの水田の中に特有の散村集落がみえる。水田耕作地帯として古くから土地改良が進められ、平坦で直線的に区画された水田が続く。

さてこの地域にも遺跡がある。平野東縁の狩川周辺の山麓部は縄文時代の遺跡が多数分布する。また平地の水田地帯には歴史時代の遺跡が点々と分布する。さらに歴史時代の遺跡は東縁の山麓部までびてゆく。

ところが、最近この地域にもほ場整備の気運が高まり、最上川地域山形県営大規模ほ場整備事業が計画されたのである。総事業計画区域6966ha、昭和46年より18年計画である。

昭和48年度事業施行区域2ヶ所 226haに次の遺跡が含まれることになった。

立川町大字三ヶ沢字古櫛所在	古櫛遺跡（縄文時代集落跡）
立川町大字狩川字阿古屋所在	阿古屋遺跡（縄文時代集落跡）
立川町大字狩川字西裏所在	西裏遺跡（縄文時代集落跡）
余目町大字返吉字角崎所在	返吉遺跡（平安時代集落跡）

県教育委員会では、地元教育委員会と連絡をとりあって県農林部・土地改良区と遺跡の保護について協議した結果、やむなく発掘調査を実施し記録措置を行うことになった。

ところで昭和48年春の現地確認調査の際、古櫛・阿古屋・西裏の三遺跡はいずれも隣接し、内容が同じであることから結局同一の遺跡と判明した。それで最も範囲の大きい古櫛の名をとって『古櫛遺跡』と呼び変えたことにした。

### 参考文献

山形県教育委員会『山形県遺跡地名表』 昭和38年3月

水34図 最上川地区圃場整備事業関係施設位置図



## 第二章 古橋遺跡

所在地	東田川郡立川町大字狩川字古橋・字西裏
調査期間	昭和48年7月10日～8月3日（延18日間）
発掘面積	666m <sup>2</sup>
調査者	佐藤鎮雄・佐藤庄一・尾形與典・名和達朗
調査補助員	茨木光裕（日本大学学生）横戸昭一・石山勇一

### 1 遺跡の立地

古橋遺跡は、庄内平野の東端、立川町役場の西約400m阿古屋神社の西隣にある。出羽丘陵の西山麓と最上川が形成した沖積地の接点に立地し、東から西にかけて緩やかな傾斜を示す。標高は16～17mを測る。地目は現在東側が境内と宅地、西側が水田となっている。古橋遺跡の周辺は遺跡が多く、立地的には東方の出羽丘陵には縄文時代から弥生時代の遺跡、西方の沖積地には平安時代末から鎌倉時代の遺跡が分布する。後述する返吉遺跡は、本遺跡の西2.6kmに位置する。

### 2 調査の経過

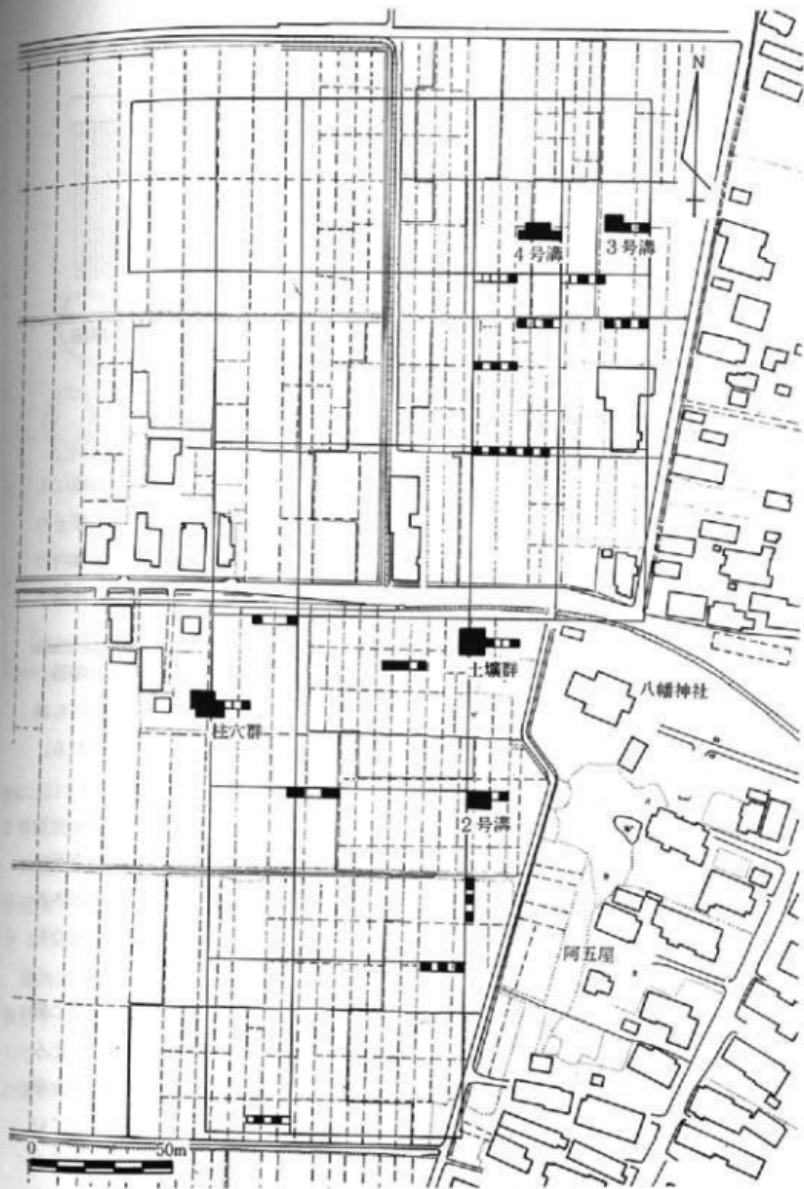
古橋地区には山形県遺跡地名表（註1）によれば、No.1236阿古屋遺跡・No.1237西裏遺跡・No.1243古橋遺跡の3遺跡があるが、地域的に重複し区別し難いので古橋遺跡と総称する。

調査は圃場整備事業にかかる遺跡の西半部に南北360m×東西240mの発掘区を設定し、60m四方に25の中發掘区を設けた。中發掘区はさらに3m四方のグリッドに細分され、各グリッドはたとえば「19区-C3」のように呼称する。調査期間の前半で粗掘りを行ない、後半に精査および図面作製を実施した（第35図）。

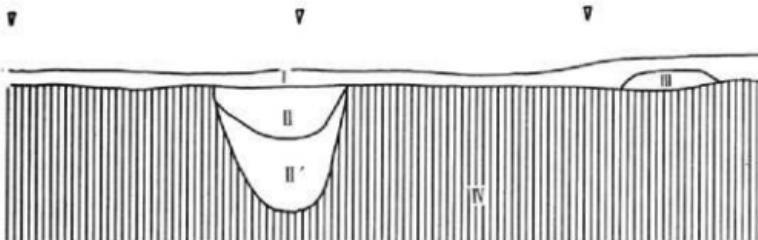
### 3 発掘

遺跡の地層はほぼ4つに大別される。上から第Ⅰ層一暗灰褐色耕土、第Ⅱ層一黒褐色粘砂、第Ⅲ層一明黄褐色粘質砂、第Ⅳ層一青灰色粘質砂である。遺物は第Ⅱ層に多く第Ⅲ層にも若干含まれる。第Ⅳ層は無遺物層である（第36図）。明治時代の土地改良やそれ以降の土採り作業によって包含層の大部分が削られ、今回の調査では遺物が凹地や掘り込み地盤の中に集中して発見された。

遺構は遺跡の全域に検出されたが、発掘区東側の標高の高い部分には縄文時代および江戸時代の遺構が、発掘区西側の沖積地には平安時代の遺構が分布する。



第35図 古桶遺跡 全体図



I層 暗灰褐色耕土 II層 黒褐色微砂 II'層 暗褐色粘質微砂  
III層 明黃褐色粘質砂 IV層 青灰色粘質砂

第36図 古標遺跡 層序図

#### 4 造構

本遺跡で検出された造構は、土壤20基、溝状造構4本、柱穴群等である。

##### 土壤群（第37図 図版29）

発掘区の中央部東寄り19区北隅9m四方で検出された17基の土壤群である。検出順に1・2・………19号土壤と番号を付けたが、8・16号土壤は直径が30cm弱と小さく覆土の状況からも土壤とは認められないので除外する。各土壤の計測値は表4に示す。土壤内の覆土は2～3層に分かれ、掘り方と柱痕の区別は認められなかった。また配列も不規則である。1・6・7号土壤は底面に直径20cm前後の礫を埋堆していた（図版）。

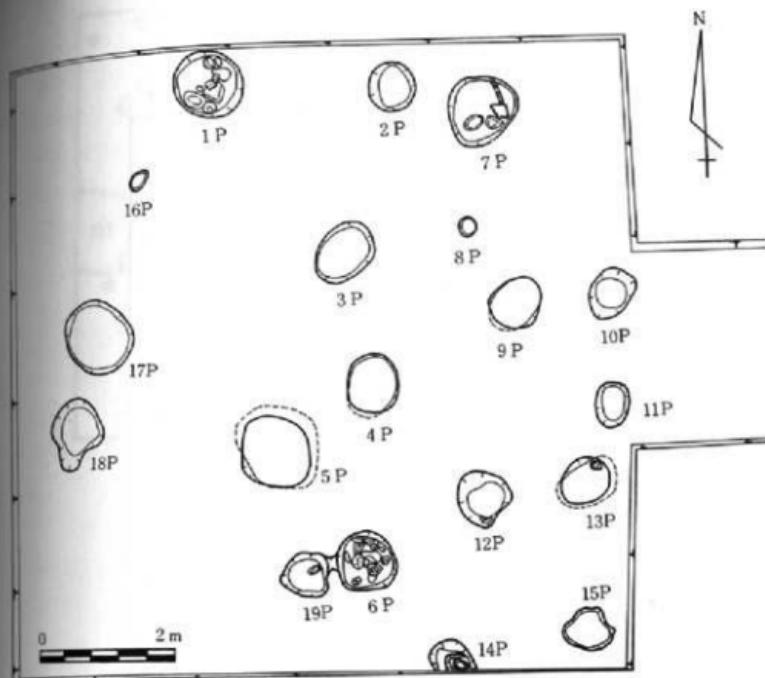
土壤内から出土した遺物は、縄文式土器（後・晩期）、石器剥片、須恵系土器、陶器、鉄器、木片等がある。量的には石器剥片、縄文式土器が近くを占めるが、各土壤とも須恵系土器、陶器片等が混在しており、土壤の形成時期は後者に属するものと考えられる。性格は不明である。

##### 柱穴群（第38図 図版28）

発掘区の中央西寄り17区I～L-10～12で検出された柱穴群である。この地域には東南に幅2.4m、深さ30cm前後の溝状造構があり、西側にも21～23号土壤等が重複して検出されたが、柱穴群はこれらの造構の覆土を掘り込んで作られており、時間的に新しい時期のものである。

柱穴は40数個あり、このうち8個に掘り方と柱痕の区別が認められ、このほか2個に掘り方を伴なわない打ち込みの抗痕が認められた。したがってこれら40数個の小穴はほとんどが柱穴ないし抗穴と考えることが可能である。柱穴の埋土は、掘り方部が褐色砂を含む灰褐色微砂で、柱穴群が黒褐色微砂である。柱穴の配置は複雑であるが柱痕の残存している柱穴を主に考えれば、南北4間、東西5間の建物跡が部分的に想定されるようである。

遺物は、酸化炎焼成で内外に叩き目をもつ甕、陶質の擂鉢片等が発見されており、時期



第37図 土壙群

的には13世紀前後頃のものと考えられる。

#### 2号構状遺構

発掘区の中央部東寄り24区A・B-1~3で検出された溝状の落ち込みである。西側は未発掘であるが、東から西にかけてゆるやかに傾斜し、最大幅4.4m、検出区域の東西長さ6.0m、最深部の深さ70cmを測る。

溝内の覆土は3層に分かれ、上層が暗褐色微砂、中層が黒褐色微砂、下層が暗褐色粘質微砂である。遺物は上層に多く含み、縄文式土器、石匙、石錐、石礫、フレイク等が出土している。本遺構は覆土の状態等から人為的なものではなく、自然の落ち込みに縄文時代の遺物が埋没したものと考えられる。

## 古墳遺跡土壤一覧表

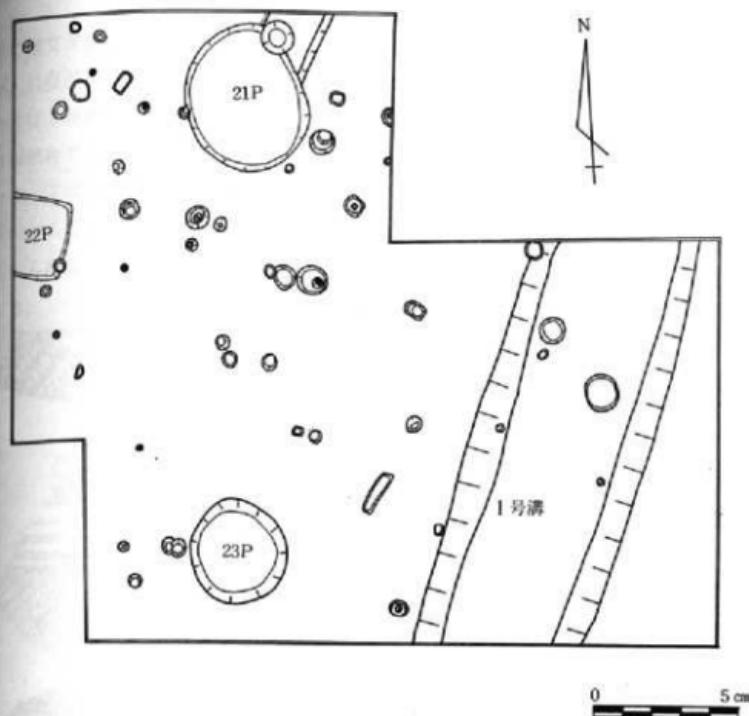
表4

上部平面形	規模 cm	深さ cm	断面形	覆土内遺物
1 円 形	90×97	39	なべ底状	フレイク・陶器・礫
2 円 形	66×65	65	すりばち状	縄文式土器・フレイク・陶器
3 楕円形	67×90	73	すりばち状	縄文式土器・フレイク・括鉢
4 楕円形	80×71	70	なべ底状	フレイク
5 隅丸方形	96×92	67	フ拉斯コ状	縄文式土器・フレイク・鍵
6 不整円形	81×81	48	なべ底状	凹石・陶器・括鉢・礫
7 不整円形	94×96	64	わん状	縄文式土器・フレイク・木片
9 不整円形	72×68	65	両側フ拉斯コ状	縄文式土器・フレイク・陶器
10 不整円形	73×54	41	すりばち状	縄文式土器・須恵器土器
11 楕円形	61×45	25	わん状	
12 不整円形	75×75	46	すりばち状	フレイク
13 不整円形	62×64	46	フ拉斯コ状	縄文式土器・括鉢・礫
14 楕円形?	?×52	42	すりばち状	縄文式土器
15 不整形	57×61	5	わん状	縄文式土器・フレイク
17 不整円形	103×101	70	なべ底状	
18 不整形	97×78	61	なべ底状	
19 不整円形	60×62	19	なべ底状	礫

## 3号溝状遺跡(第39図・図版31)

発掘区北東隅4区P~R-14・15区で検出された幅3.3m、最深部の深さ50cmの南北に長い溝である。東壁は40度の角度で真っ直ぐ立ち上がるが、両壁はゆるやかに三つの段を形成する。西壁の上端近くに直徑20cm前後のビットが6個発見されている。いずれも溝に直角なビットで、掘り方は検出できなかった。3号溝の東側に幅約30cm、深さ15cmの細長い溝が1本検出されたが、重複関係からみて時期的には本遺構より古いものである。壁添いに直徑10cm前後のビットが5個発見された。

3号溝状遺構の覆土は3つに分けられる。1層一暗褐色微砂、2層一明褐色砂質微砂、3層一灰褐色粘土で、遺物は1層に多く2層にも若干含む。出土した遺物は、表面に淡い黒釉のある須恵質の土器、陶器、木椀(図版33)等であるが総量は少ない。遺構の性格は不明である。

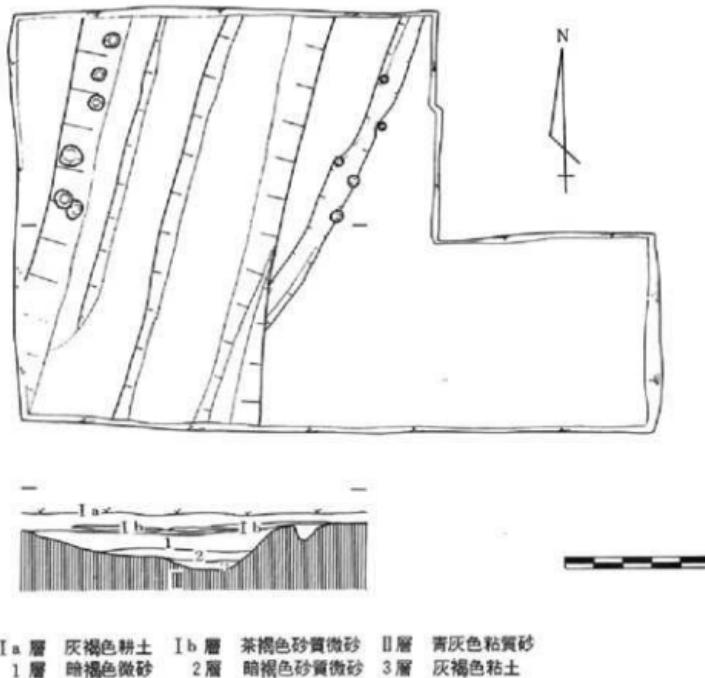


第38図 J-L-10-12平面図

#### 4号溝状遺構

発掘区の北東隅4区G~I-15・16区で検出された幅3.3m、最深部の深さ50cmの南北に長い溝である。3号溝状遺構とはほぼ併行して走る。東壁は真っ直ぐ立ち上がるが、西壁は段上の高まりを形成する。発掘区西侧で水田面の落ち込みがあるため、西壁の詳細は不明である。ピット等は認められなかった。

4号溝状遺構の覆土は3つに分けられ、3号溝状遺構とほぼ同様である。出土した遺物は、表面に淡い黒釉のある須恵質の土器、磁器、陶器、下駄、木杢、木製櫛(図版)、鉄製かんざし等であるが、陶磁器が13片出土しているのが注目されている。このほか「永楽通宝」と「寛永通宝」が各々1枚出土している。遺構の性格は不明である。



Ia 層 灰褐色耕土    Ib 層 茶褐色砂質微砂    II 層 青灰色粘質砂  
1 層 暗褐色微砂    2 層 暗褐色砂質微砂    3 層 灰褐色粘土

第39図 3号溝状造構

## 5 遺 物

本遺跡で出土した遺物は小型整理箱10箱程である。縄文式土器、石器、須恵器、須恵器、陶器、木器、鐵器、古錢等があるが、量的には縄文時代の石器剥片がもっと多く、つぎに須恵器が多い。その他の遺物は比較的量が少ない。

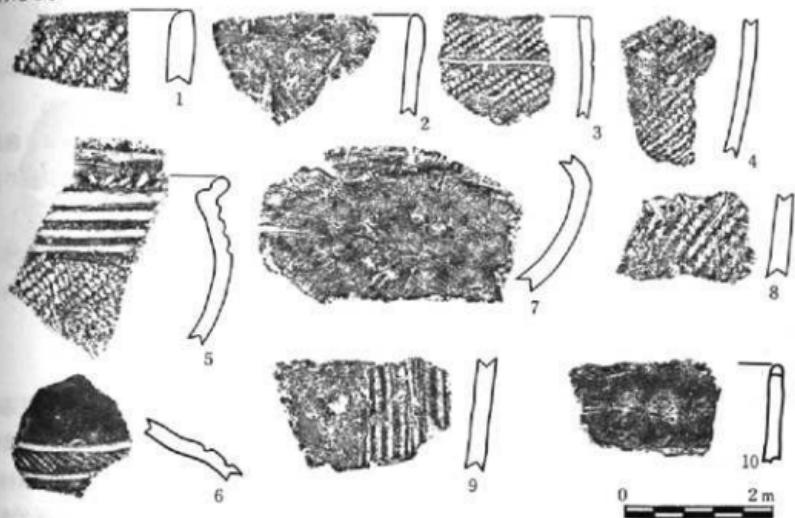
### 縄文式土器（第40図1～10・図版32）

発掘区東側の緩傾斜面、土壤群から2号溝状造構の検出地域一帯に比較的多く出土する縄文時代の純粹な包含層は無く、石器剥片および須恵器等と混在する。出土量はポリ袋3個分と少なく、文様の識別できるものも僅かなので縄文式土器を一括して記述する。

器形には深鉢、鉢、壺形土器等がある。深鉢形土器は、体部が直線的に立ち上がり、口縁部は平坦なものが多い。口縁部から体部全面にかけて縄文が施されるもの（1・7・8）と、口頸部に無文帶を持つもの（2）がある。地文はL・F・撫りの単節斜縄文が多いが、刷毛目状の文様（9）も数点ある。3・5・10は鉢形土器の口縁部である。3は平縁で体部から口頸部にかけて真っ直ぐに立ち上がる。口唇部と口縁部に各々1条の細い沈線を有し、

全面に縄文が施される。5は口縁部が「く」字形に屈曲し、口頭部に4条の平行沈線文をもつ。口唇部表面はヘラ状工具による連続押圧文があり、裏側にも1条の沈線をもつ。時期的には3が縄文時代晚期前半、4が晩期中葉大洞C<sub>2</sub>式伴行期に属する。6・7は壺形土器の肩部片である。6は肩部上半に磨消縄文帯を一条残し、その他は丁寧な研磨が施されている。7は肩部から体部にかけてヘラミガキがなされているもので、口辺の形態や文様は不明である。時期的には晩期中葉に属する。

これら縄文式土器の時期は、他の細片も含めると縄文時代後期末から晩期中葉の長期にわたる。



第40図 古橋遺跡出土土器(1)

#### 須恵器 (第41図 1~10・12・13 図版33)

ロクロないし、叩きによる成形後、還元炎焼成を行なった土器群である。器形には壺、壺、壺形土器がある。

壺形土器は、ロクロ成形、糸切りのもので底辺部が若干丸味をもつ。底部を一部ヘラ調整しているものも認められる。高台が付くものもある。

壺形土器は、器形の知れるものが3片だけである。2は頸部の屈折部に二条の沈線文をもち、内外面ともにロクロ調整が施してある。3は壺形土器の肩部片で、外面に平行の叩き、内面にロクロ調整が施してある。内外面とも黒くカーボンがしみている。

斐形土器は、体部内外面に叩き目を持つもので、外面には平行の叩き目（4～10）が、内面には青海波文（7b）および指による押圧痕が認められる。口縁部は強く外反し、口唇部にヘラ状工具による沈線がある（1）。口頭部の内外面にはよくロクロ調整痕が残っている。5は平行の叩き目の上に印花文を有する。この他に外面に黒くカーボンがしみている斐形土器も幾つかあり、珠洲焼の系統をひくものかもしれない。

13・14は摺鉢である。口径約34cmを測り、内面に施文幅2.7cmの条線状の刻みを有する。外面は指による押圧が著しい。須恵器というよりは陶質で陶器に近いものであるが、便宜上この項で説明する。

#### 須恵系土器

ロクロ成形、酸化炎焼成の土器群である。器形には环形土器・斐形土器がある。斐形土器については次章の返吉遺跡の項でも後述する。

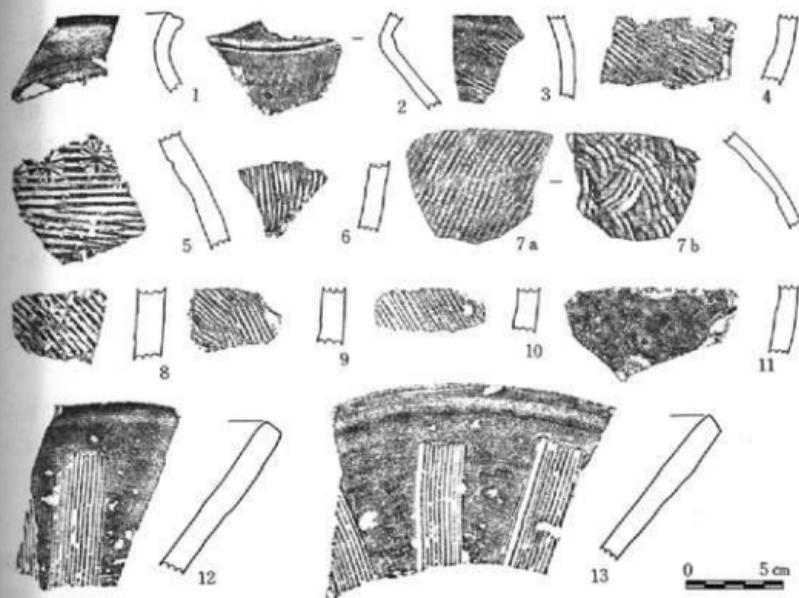
环形土器は、口径に比して底径が小さく、体部が直線的に立ち上がるるものである。底部の切り離しは糸切りで、体部内外面にロクロ調整痕がある。器厚は薄く、焼成は良好である。

斐形土器は、口辺部が強く屈折し外反する口縁を有する。口唇部に平坦な稜ないし一条の沈線をもつ。口縁部裏側に平行な刷毛目文を有するものもある。体部はほとんどが内外に平行の叩き目をもつ。須恵器に比べ斐形土器の出土量は少ない。

#### 陶磁器（第41図11・図版34）

総量で70片程出土している。発掘区全体から少量づつ出土するが、とくに3・4号溝状遺構に多く発見された。灰釉陶器および緑地の磁器から染付の陶器に至るまで種類は多様で、年代的にも長い幅を持つものと考えられる。器形には碗皿・盤・注口土器等があり、染付等新しい時期の皿は高台を有するものが多い。第一図11は、灰釉質の地に灰釉が流されている斐で、常滑系のものに近い。

これらの土器の時期は、繩文式土器が繩文時代後期末から晩期中葉に、須恵器および須恵系土器が鎌倉時代（13世紀）頃に比定される。陶磁器は、須恵器および須恵系土器に伴うと思われるものと、江戸時代以降近世に属すると思われるものの二種類がある。



第41図 古墳遺跡 出土土器(2)

#### 石器(第42図・図版32)

剝片を含めれば本遺跡でもっとも出土量が多い遺物であるが、石器としてまとまった形態を持つものは28点のみである。石材は磨製石器を除けば大半が硬質頁岩である。発掘区のほぼ全域にわたって出土するが、とくに発掘区東側の傾斜面から多く出土する。石器の種類は、石鎚・尖頭石器・石錐・石匙・凹石・石棒等がある。

石鎚は全部で9点出土している(第42図1~8)。材質は2が玉髓で、他は硬質の頁岩である。基部に抉りを持つもの(1)、有茎で長さが1.8m前後と小型のもの(2~4)、有茎で長さが3cm前後と中型のもの(5~6)、および棒状のもの(7~8)の4類に分かれる。発見例では有茎で小型のものが4点で比較的多い。

尖頭石器は、長さが4cm、幅が2.5cm前後を測り、先端に刺突部を形成するものである。3点出土している。基部は丸く調整が施されているもの(9~10)と、剥離面をそのまま利用したものの2類がある。材質はすべて硬質の頁岩である。

石錐は、丸味をおびたつまみに棒状の刺突部を有するもので、2点出土している。材質は硬質の頁岩である。11は先端部がやや丸味を持ち、つまみ部が欠損している。

古橋遺跡出土の石器の中で、もっとも特徴的なものは石匙である。つまみと直角方向に刃部をもつ横型の石匙が9点、つまみと平行ないし斜方向に刃部をもつ縦型の石匙が1点出土している。横型の石匙は、刃部がほぼ真っ直ぐなもの(12)と、丸味を持つもの(13)の2類に分けられる。正面に丁寧な二次加工を施し、背面は一次剝離面を多く残している。刃部は正面から背面にかけて傾斜し、約45度の傾きを持つ。14は縦型の石匙で、刃部は一次剝離面をそのまま利用している。

凹石は、長径8~11cm、厚さ約5cmの円形ないし橢円形の礫の両面に、1~2個の小穴を穿ったものである。石材はすべてやや硬めの砂岩である。

15は粘板岩製の石棒で、片面および両端が欠損している。残存している面には縱方向の研磨がよく認められる。

これらの石器の形態は、羽黒町玉川遺跡C地点(註)や天童市矢口遺跡の石器と強い類似性をもち、時期的には、縄文時代後期末から晩期中葉に位置付けられるものである。伴出した縄文式土器の様相も、これを裏付けする。

#### 木器(図版33)

3・4号溝状造構の覆土から出土したもので、椀、櫛、下駄、桶底等10点出土している。椀は、高台をもち体部が丸味をおびて立ち上がるものである。4点出土している(図版)。外面に黒漆、内面に朱漆ないし黒漆が塗られている。

櫛は、竹製の一本彫りによるもので、片側が欠損している(図版)。漆塗の有無は不明である。

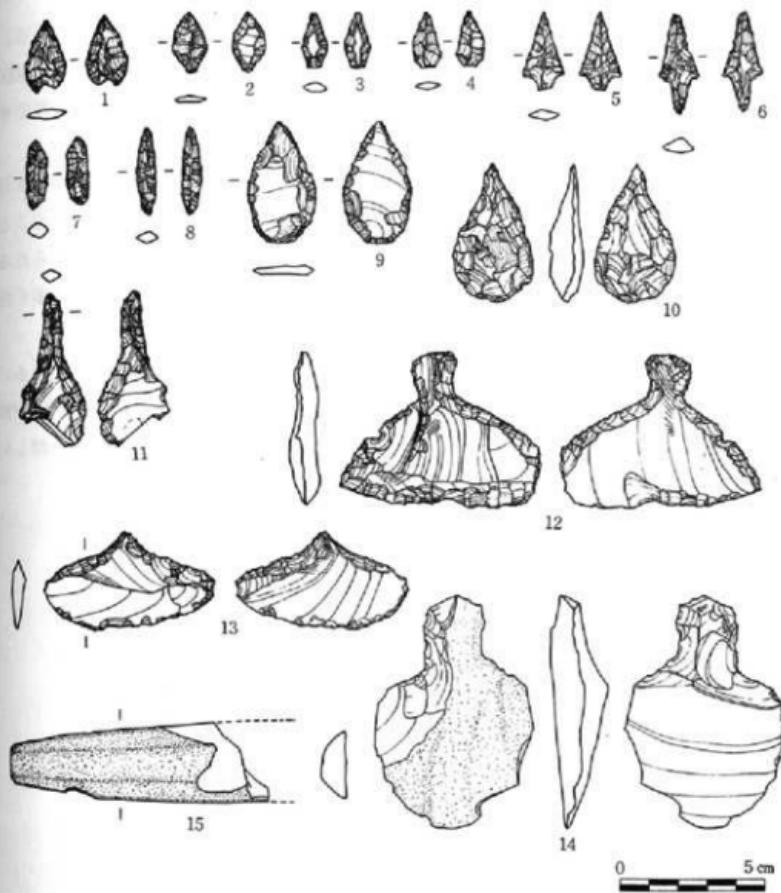
下駄は、足と台の一部が残っており、照葉樹材の一本彫りによるものである。残存する台部の長さは15.5cm、高さは5.5cmを測る。残存部には鼻緒を通す孔が認められない。

桶底は、直径23cm、厚さ1.2cmを測り、円形を呈する。底の下面には脚台を取り付けるための抉りが3個認められる。また両面に黒漆の塗痕がある。

これら木器の年代は明らかでないが、染材の陶器が伴出しており、時期的には大きく江戸時代以降と把えておきたい。

#### 鉄器

鉄器としてあげられるものは、かんざしと煙管の頭部の2点のみである。かんざしは、針金を二つに曲げ合わせた簡素なもので、4号溝状造構の覆土から出土する。時期的には江戸時代以降に属するものであろう。煙管の頭部は、27区の表土中から出土したものである。



第42図 古窯遺跡 出土石器

古鏡

4号溝状造構の覆土から「永楽通宝」(明・初鑄年代1403年)、「寛永通宝」(初鑄年代1624)が各々1枚出土している。造構の上限を測るのに好資料である。

## 6 まとめ

古墳遺跡は、縄文時代後期末から鎌倉時代、および近世の各後期の複合遺跡である。

- (1) 縄文時代の遺構は、今回の調査では検出できなかった。この時期の遺物が、発掘区東側に多く出土することから、阿古屋神社の境内付近に集落跡が存在するものと推定される。
- (2) 鎌倉時代に属する遺構は、1号構状遺構と柱穴群および土壙群の三個所が検出された。柱穴群は掘立建物を構成すると考えられ、本地域にこの時期の集落跡が存在することが確認された。土壙群の性格は明らかでないが、形態等から墓跡の可能性も考えられる。須恵器および須恵系土器は、発掘区のほぼ全域にみられ、未発掘地域にもなお多くの遺構が埋没していたと推定される。
- (3) 江戸時代から近世に属する遺構として、発掘区北東隅の3・4号溝状遺構がある。二つの溝状遺構はほぼ平行して走り、さらに南北に延びると考えられる。発掘区域が狭いため性格は明らかでないが、屋敷跡等の壕を形成する可能性をもつ。陶磁器の詳しい分析とも合わせ、さらに精密な調査が要求される。

註1 山形県教育委員会『山形県遺跡地名表』 昭和38年



## 6まとめ

古船遺跡は、绳文時代後期末から鎌倉時代、および近世の各後期の複合遺跡である。

- (1) 绳文時代の遺構は、今回の調査では検出できなかった。この時期の遺物が、発掘区東側に多く出土することから、阿古屋神社の境内付近に集落跡が存在するものと推定される。
- (2) 鎌倉時代に属する遺構は、1号構状遺構と柱穴群および土壙群の三個所が検出された。柱穴群は掘立建物を構成すると考えられ、本地域にこの時期の集落跡が存在することが確認された。土壙群の性格は明らかでないが、形態等から墓跡の可能性も考えられる。須恵器および須恵系土器は、発掘区のはば全城にみられ、未発掘地域にもなお多くの遺構が埋没していたと推定される。
- (3) 江戸時代から近世に属する遺構として、発掘区北東隅の3・4号溝状遺構がある。これらの溝状遺構はほぼ平行して走り、さらに南北に延びると考えられる。発掘区城が墳丘ため性格は明らかでないが、屋敷跡等の塚を形成する可能性をもつ。陶磁器の詳しい分析とも合わせ、さらに精密な調査が要求される。

註1 山形県教育委員会「山形県遺跡地名表」 昭和38年

## 第三章 返吉遺跡

所在地	東田川郡余目町大字返吉字角崎58番地他
調査期間	昭和48年10月1日～10月12日（延10日間）
発掘面積	264m <sup>2</sup>
調査者	佐藤鎮雄・佐藤庄一

### 1 遺跡の立地

返吉遺跡は、庄内平野の東端余目町の東南7.3kmに位置し、返吉部落のすぐ東側にある。出羽丘陵に源を発し最上川に注ぐ京田川が形成した冲積地に立地する。標高は約10mを測る。地目は現在畠地となっており、周囲の水田とは50～100cmの比高をもつ微高地である。最上川と赤川にはさまれた冲積地には平安時代後半から鎌倉時代の遺跡が多く分布し、前述した古橋遺跡の東方2.6km、後述する須走遺跡は西南1.2kmに位置する（第43図）。

### 2 調査の経過

本遺跡は昭和20年代の暗渠工事の際に須恵器片が出土し平定時代の遺跡として山形県遺跡地名表に記載されている（註1）。

調査は畠の微高地約1反歩に南北60m×東西24mの発掘区を設定し、さらには2m四方のグリッド毎に細分した。南北方向は北から1・2……、東西方向は西からA・B……とつけ、各グリッドはたとえば「F11区」のように呼称する（第43図）。発掘は当初2×10mないし1×10mのトレンチを南北に4本設定し遺物包含層の状況を調べ、つぎに比較的遺物の多い北半部を重点的に拡張した。

### 3 発掘

各トレンチにおける層序はほぼ均一であり、第Ⅰa層明褐色砂礫（道路敷埋土）、第Ⅰb層一褐色微砂（耕土）、第Ⅱ層一青褐色砂質粘土、第Ⅲ層一灰褐色粘質砂、第Ⅳ層一黄褐色砂となる。遺物は第Ⅲ層より比較的多く出土し、第Ⅳ層は無遺物層である（第44図）。

遺物は少なく発掘区北側より柱穴群が2ヶ所検出されただけである。北側を1号柱穴群、南側を2号柱穴群とよぶ。

遺物は昭和20年代の土地改良によって包含層がほとんど削平されており、量が極めて少なく柱穴群の近くでややまとまって発見された程度である。なお発掘区の西側ですでに水田になっている部分にも、若干の遺物の散布がみられた。



第43図 返吉遺跡 全体図



第44図 返吉遺跡 層序図

#### 4 遺構

##### 1号柱穴群(第45図・図版35)

発掘区中央北寄りF・G-9・10区で検出された6個のピット群である。ピットの直径は20~30cm、深さは10~40cmで、ピット1~4の4個に掘り方と柱痕の区別が認められた。東側と北側の1部が未発掘であるが、ピットの配列は南北1間、東西2間の6本で構成するものと考えられる。検出ピットの南北間隔約2.1m、東西間隔約1.5mを測る。

1号柱穴群一帯からは比較的多量の遺物の散布が認められた。住居跡と関連する落ち込み等はみられなかった。

##### 2号柱穴群(第45図・図版36)

発掘区中央南寄りE~H-15~17区で検出された15個のピット群である。ピットの直径は20~40cm、深さは10~40cmで、ピット10と14の2個に掘り方と柱痕の区別が認められた。ピットの配列は不明であるが、形態等からピット1~3・6~10、14が主となって構成されるものと思われる。検出ピットの南北間隔約4.8m、東西間隔約4.8mを測る。

2号柱穴群一帯からは、比較的多量の遺物の散布が認められる。住居跡と関連する落ち込み等はみられなかった。

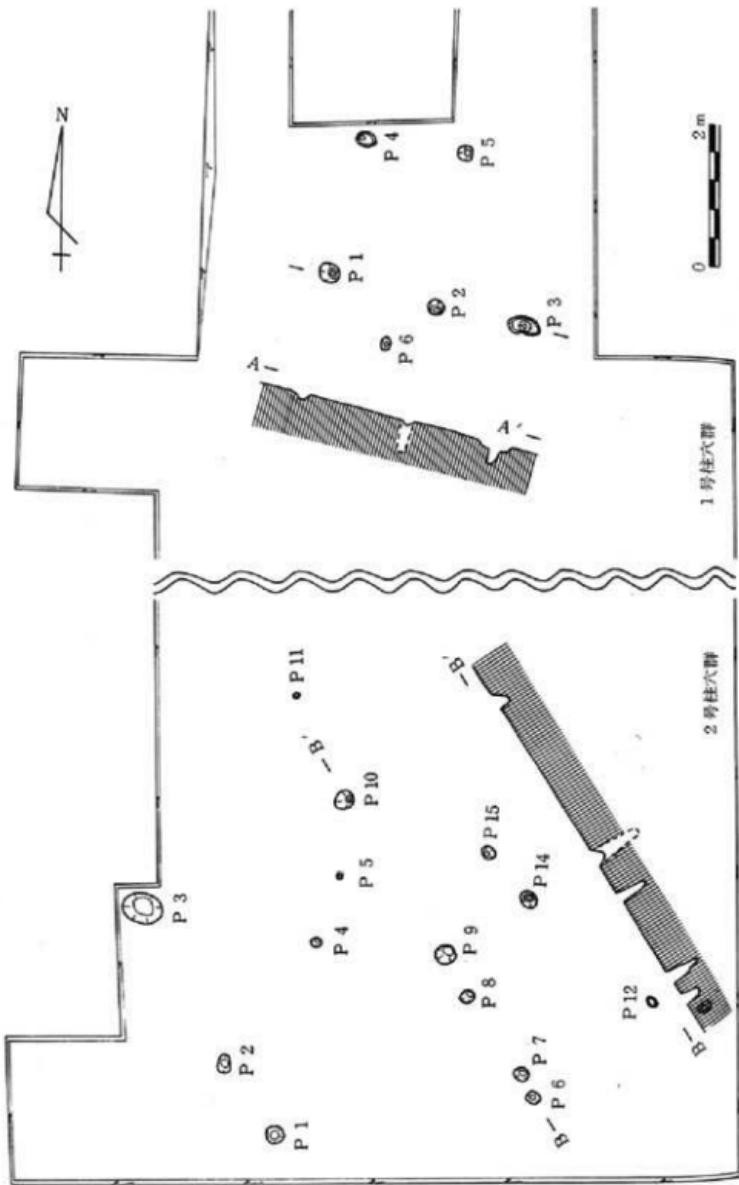
#### 5 遺物 (第46図・図版36)

本遺跡で出土した遺物は表面採集品も合わせ小整理箱2箱と極めて少ない。発掘資料は1・2号柱穴群付近から出土したものが大半を占めるが、説明の便宜上表採品も一部加えて記述する。出土遺物は須恵系土器、須恵器、陶磁器等があるが、量的には須恵系土器が全体の約6割、須恵器が3割、陶磁器等が1割を占める。

##### 須恵系土器(第46図1~8・14・15)

クロコア形、酸化炎焼成の土器群である。須恵系土器なる概念は、現在环形土器にのみ限定して使用されている（註2）が、本稿では酸化炎焼成がなされ内外に叩き目をもつ變形土器もこの範疇に含める。ただし製作技法等から厳密に須恵系土器と呼ばれるかどうかは、共伴関係の事実はあるにしろなお今後の課題である。

須恵系土器のうち环形土器は、出土数が14点と少なく全体の器形を知れるものはない。



第45図 反吉遺跡 造構配

14・15がこれにあたり、底径6.8cm、現器高2mを測る。磨耗が著しく底部の切り離し技術は不明である。体部下端にロクロ成形痕が若干うかがえる。底部は平坦でやや丸味のある立ち上がりを示す。

變形土器は口辺部が強く屈折し、外反する口縁を有する(5~7)。口唇部に平坦な稜をもち、ヘラ描きの一条の沈線をもつものもある。体部はほとんどが内外面に条線状の叩き目をもつ(1~4・8)。叩き目は縱方向に施されるのが普通であるが、なかに幾つか方向が重複しているものがある。色調は淡赤褐色を呈し、器厚が比較的薄い。底部の形態は不明である。約100片出土しており、数量はもっとも多い。

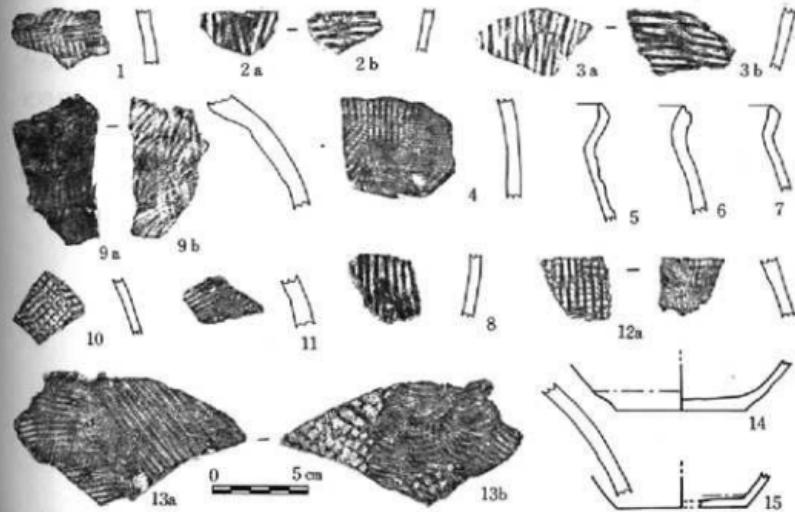
#### 須恵器(第46図9~13)

ロクロないし、叩きによる成形、還元炎焼成の土器群である。器形には壺・甌・壺形土器がある。

壺形土器は、ロクロ成形、糸切りのもので細片も含めて7片出土している。底辺部が若干丸味をもつ。底部を一部ヘラ調整しているものも表探資料に2点認められた。

甌形土器は、体部内外面に叩き目を持つもので、外面の叩き目は条線状と格子目状のものが、内面の叩き目は青海波文と格子目状文および細い状線状のものがある。口縁部の形態は不明である。約20片出土している。13は外面に黒くカーボンがしみており珠洲系のものかもしれない。

壺形土器は1片のみで、外面がロクロ調整、内面が青海波の叩き目をもつ(7)。



第46図 返吉遺跡 出土土器

**陶磁器** 6片出土している。すべて楕形のもので高台が付いているものが多い。灰釉陶器、やや濁った白磁等がある。染付は認められない。

ところでこれらの出土遺物の時期はいつ頃に位置付けられるであろうか。本遺跡からは内面に黒色化処理を施した土師器环は発見されていないことから11世紀までは遡り得ないと考えられる。また横川B遺跡等で検出されたような灯明皿形の須恵系土器も今のところ検出されていない。横川B遺跡では灯明皿形の环に伴って北宋錢が14枚検出され、そのうち初鋤年代のもっとも新しいものは祥符元年（1011～1017年）である。伝播から使用に至る年代的幅を考えれば、12世紀末から13世紀以降と考えることが可能であろう。とすれば、返吉遺跡の遺物は、その中間の時期即ち12世紀を中心とする時期が想定される。

## 6まとめ

発掘調査の結果、後世の削平が著しいが残存する文化層より1・2号の二つの柱穴群が検出された。これらの柱穴群は一定の柱間をもつ掘立建物跡と考えられるが、柱穴が少ない点から竪穴式柱穴の柱穴になる可能性をも持つ。この場合柱居跡の壁や床は後世の削平により消失したものと考えられる。

1・2号柱穴群の時期は、伴出遺物から平安時代末期12世紀を中心とする年代が想定される。

註1 山形県教育委員会 『山形県遺跡地名表』 昭和38年

註2 岡田茂弘 桑原滋郎 『多賀城周辺における古代环形土器の変遷』

宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要Ⅰ 昭和49年

## 第四章 総 括

最上川地区圃場整備事業昭和48年度施工区域に係る二遺跡の調査結果は、以上の通りである。成果として不充分な点は否めないが、得たものを今後行なわれるであろう同地域の調査に生かしていける材料は把握している。

- 1 古墳遺跡は、庄内平野有数の縄文晩期の集落跡として期待されたが、遺構の検出をみなかったことは誠に残念である。しかし、得た土器等の遺物は、玉川遺跡等の出羽丘陵西縁の扇状地に立地する一連の遺跡や近くの丘陵上の多数の遺跡との関連を追求する上で資料なり得るとみられる。この周辺は庄内の数少ない弥生遺跡のあるところでもある。地道な研究の積み上げが望まれている。
- 2 庄内平野では、古代・中世の遺跡が多い。しかし、調査例も少なくあまり明らかでない。殊に平安中期頃より急増する遺跡のあり方は、庄内平野の開発の具体的様相を探る上でのキー・ポイントでもある。断片的な成果で不充分ではあるが、返吉遺跡・古橋遺跡の建物遺構・土壙および建物は、そうした研究において資料が増したことになる。類例が少ないだけに断片的であっても貴重であるといえる。
- 3 二つの遺跡調査をして我々は、1つの大きな事実をつかんだ。それは庄内平野では、相当旧地形が削平されていることである。したがって遺存状態は良くない。しかし、全てが破壊されているわけではない。今後の調査では、その点を充分考慮してかかる必要がある。即ち、庄内平野では、遺跡があれば何らかの遺構を得るが、完全な元の姿では出てこないので、地道な調査研究が望まれることである。例えば返吉遺跡の建物跡はいい例である。簡単に掘立柱建物跡とも竪穴式建物跡ともいい切れない遺構がたくさん出ているであろう。この点は本県でも内陸と少し趣きを異にするところである。

—第Ⅲ部—

### 第三部

## 赤川地区圃場整備事業関係遺跡調査

## 第一章 調査に至る経過

庄内平野の南半、赤川右岸より京田川左岸に至る地域は、水稻の単作地域として全国でも屈指の穀倉地帯である。北側は本流最上川によってくぎられ、東側および南側を出羽丘陵羽黒山系の緩やかな丘陵によって画す。赤川およびその支流藤島川の旧氾濫原上に立地し、土壤は有機質分が多く含む良質な砂質微砂を主体とする。

古代以降この肥沃な土地を求めて開発がなされ、とくに江戸時代に新田開発が進んだ。現在もこの地域には、庄内平野特有の散村集落が認められる。明治時代以降も全国に先駆けて土地改良事業が行なわれ、平坦で直線的に区画された水田が続く。このうち藤島川左岸の自然堤防ないし付近の微高地には古代末から中世の遺跡が数多く分布し、平形部落周辺は古代出羽国の国府跡とも考えられている。京田川左岸および赤川右岸にも數は少ないが自然堤防上に遺跡が立地する。この両地域は今後さらに遺跡数が増加することが予想される。

さてこの赤川右岸地域にも大型機械の導入、用排水路の整備を目的とした圃場整備の気運が高まり、昭和47年度より18年計画で赤川右岸地区山形県営大規模圃場整備事業が実施されるに至った。総事業面積は8,904haを占める。昭和48年度は遺跡がさいわい該当しなかったが、藤島町平形遺跡をその重要性に鑑み性格把握を目的とする先行発掘調査を実施した。

- |   |                           |
|---|---------------------------|
| 1 藤島町大字平形字前荒田所在                         | 平形遺跡 (No.1206 奈良・平安時代集落跡) |
| 昭和49年度は本格的な事業が始まり、次の5遺跡が区域内に含まれることになった。 |                           |
| 2 三川町大字横川字大下所在                          | 横川B遺跡 (No.1195 平安時代集落跡)   |
| 2' 三川町大字横川字大下所在                         | 横川D遺跡 (新発見 江戸時代墓跡?)       |
| 3 藤島町大字須走字岸野所在                          | 須走遺跡 (No.1218 平安時代集落跡)    |
| 4 藤島町大字大半田字土済所在                         | 土済遺跡 (No.1207 平安時代集落跡)    |
| 5 藤島町大字大半田字土済所在                         | 助川遺跡 (No.1193 平安時代集落跡)    |

県教育委員会では、地元教育委員会と連絡をとりあって県農林部、各土地改良区と遺跡の保護について協議した結果、止むなく発掘調査を実施し記録措置を行なうことになった。

### 参考文献

山形県教育委員会 「山形県遺跡地名表」 昭和38年

第47図 赤川地区園場整備事業関係遺跡位置図



## 第二章 平形遺跡

所在地	東田川郡藤島町大字平形字前荒田97番地他
調査期間	昭和48年10月29日～11月12日 (延11日間)
発掘面積	205m <sup>2</sup>
調査者	佐藤庄一・尾形與典
調査補助員	石山勇一・石山健二・秦 昭繁

### 1 遺跡の立地

平形遺跡は、庄内平野の東南藤島町役場の北西1.4kmに位置し、平形部落の周囲一帯約1km四方に広がる。赤川と藤島川が形成した平坦な沖積地に立地する。このうち今回発掘調査を実施した前荒田地区は、上平形部落の東南、陸羽西線のすぐ東側にある。遺跡の東側を藤島川が流れ、標高は約12mを測る。遺物の散布地域は周囲の水田面より1～2m高い微高地となっており、地目は現在野菜畠である(第48図)。

### 2 調査の経過

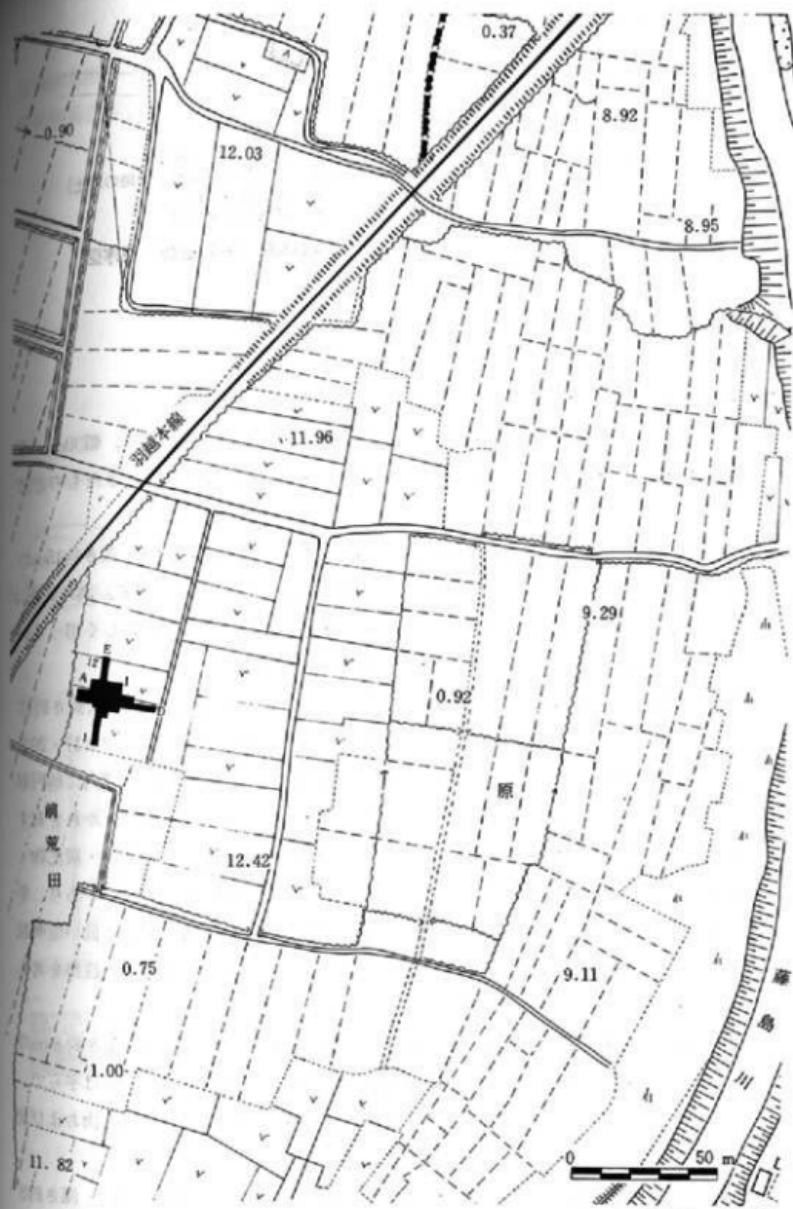
平形遺跡は、昭和初期から古代出羽国の国府・国分寺跡の凝定地として注目され、山形県遺跡地名表には、No.1205平形C寺跡・No.1206平形A櫛跡・No.1215平形B遺跡の3地点が登録されている。(註一)。

これまで正式には昭和45・46・47年の3回藤島町教育委員会によって発掘調査が実施されているが、明確な遺構は検出されていない(註二・三)。ただし昭和47年度に実施された第3次発掘調査では、前荒田地区で礎石を伴なう建物跡と思われるものが発見されており、今回の調査はこの建物跡の確認を主目的とするものである。

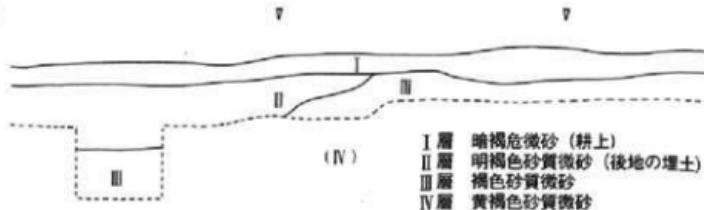
調査は当初発掘予定地に2×30mの南北に長いトレンチを設定し、第3次調査の際発見された礎石風の石を再検出した。つぎにこのトレンチに直交して4×30mの東西に長いトレンチを設定、さらに発見された遺構にあわせ若干の発掘区の拡張を行なった。(第48図)。

### 3 発掘

遺跡の地層はほぼ4つに大別される。上から第Ⅰ層—暗褐色微砂(耕土)、第Ⅱ層—明褐色砂質微砂(後世の埋土)、第Ⅲ層—褐色砂質微砂、第Ⅳ層—黄褐色粘質砂である。遺物は第Ⅲ層に多く、第Ⅳ層は無遺物層である(第49図)。包含層の遺物量は少なく、溝状遺構や凹地に集中して発見された。遺構は発掘区中央部に集中して検出された。



第48図 平形遺跡 地形図



第49図 平形遺跡 層序図

#### 4 遺構

##### 溝状遺構（第50図 図版37）

1～6号溝状遺構まで6本発見されている。このうち1・2号溝状遺構は、幅30cm・深さ7cmを測り南北に長い溝である。覆土の状態等から後世の耕作によってできたものと思われる。

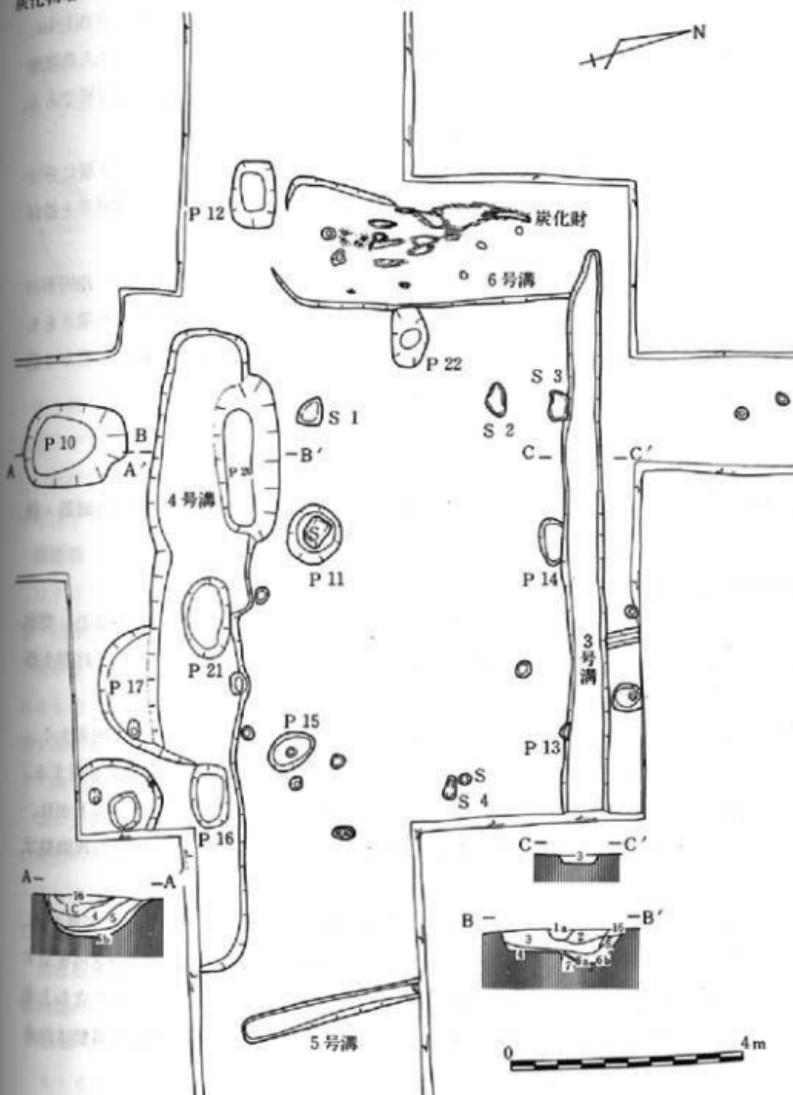
3号溝状遺構は、発掘区中央北寄りD～H～7区で検出された幅約70cm・深さ約15cmの東西に長い溝である。西側が一部未発掘であるが発掘区内の長さ9.6mを測る。溝の底面は平らで両壁はほぼ真っ直ぐに立ち上がる。3号溝状遺構は西側で6号溝を新しく切っている。覆土は暗褐色微砂の単一土層で、少量の遺物および木炭を含む。

4号溝状遺構は、発掘区中央南寄りD～I～7・8区で検出された幅約1.6m、長さ約11mの深さ10～30cmの東西に長い溝である。東南隅が一部未検出であるが、ピット17・20を新しく切っている。溝の底面はほぼ平らで、両壁は真っ直ぐに立ち上がる。溝内に横円形のピット3個(16・20・21)を有する。溝内の覆土は重複関係を除き2層に分かれを有する。上層(3層)が暗褐色微砂、下層(4層)が褐色砂質微砂で、上層に遺物・炭化物・焼土を多量に含む(図版 )。出土した遺物は、須恵系土器・青磁・鉄製品等があり、平形遺跡の遺構ではもっとも量が多い。須恵系土器は口径に対して器高が著しく低い證明皿形のものがほとんどである。また鉄器が多量に出土していることは、本遺構の性格を考える上で注目される。

5号溝状遺構は、発掘区中央東寄りJ～8・9区で検出された幅約40cm、深さ約8cmの溝である。北側が一部未発掘であるが発掘区内の長さ3.1mを測る。溝の底面は平らで、両壁はほぼ真っ直ぐに立ち上がる。覆土は暗褐色微砂の単一土層で、少量の遺物および炭化物を含む。

6号溝状遺構は、発掘区中央西寄りC・D～9～11区で検出された幅約2.0m、深さ約8cmの南北に長い溝である。北側が一部未発掘であるが発掘区内の長さ約5.2mを測る。<sup>3</sup>

号溝状造構と一部重複する。溝の底面は平らで、両壁が僅かに立ち上がる。覆土は黒褐色炭化物層の单一土層である。溝内からは底面に貼り付いた状態で、炭化した木材および釘



第50図 平形遺跡 遺構配図

等の鉄製品が多数検出された。土器は須恵系土器坏の小片が数点出土している。

**ピット(第50図 図版38)** ピットは大小合わせて30個発見されたが、その形態によって幾つかに分類できる。ピット10は4号溝状遺構のすぐ南に位置し、南北2.0m、東西1.4m、深さ約55cmの不整楕円形のピットである。覆土は5層に分かれ、1b・1c層は人為埋堆による無遺物層で、最下層の5層が須恵系土器坏・綠釉陶器片を含む黒色炭化物層である。土壤と考えられるがその性格は不明である。

ピット12・17・18・22等は、深さ10~30cmの浅い落ち込みで覆土は1ないし2層に分される。いずれも炭化物を多く含むことが特徴で、ピット12・17・18からは須恵系土器坏が、ピット17からは鉄製品が出土している。

ピット11・13・14は、4号溝と3号溝の間にあり、長径80~100cmの円形ないし楕円形のピットである。深さはピット13と14が10cm前後であるが、ピット11は80cm以上の深さをもつ。底面には平坦な河原石が置いてあった。またこの近くに長径40cm前後の河原石が4個(S 1~4) 検出された。これらについてはまとめの項で後述する。

## 5 遺 物

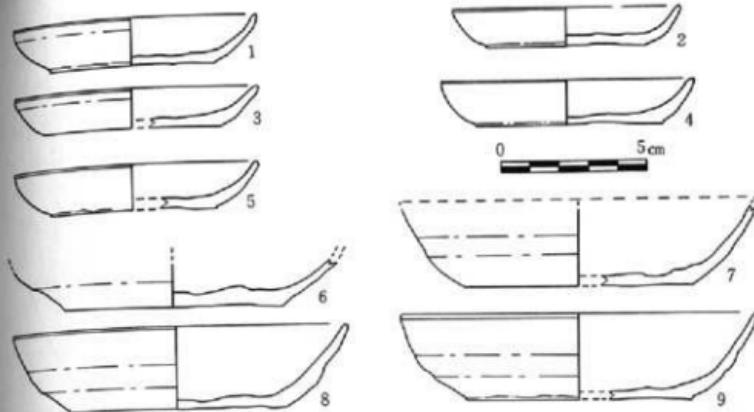
本遺跡で出土した遺物は、小型整理箱4箱程である。須恵系土器・須恵器・陶磁器・鉄器等がある。量的には各々ほぼ同じである。

### 須恵系土器(第51図 図版40)

ロクロ成形、酸化炎焼成の土器群である。器形はすべて坏形ないし皿形の土器で、壺形土器は認められない。第4号溝状遺構およびピット12・17等から多く出土した。坏形土器は大きさから2類に分けられる。

第1類は、口径8cm、器高1.5cm前後の小型の皿形土器で、口径に比して底径が大きく、器高が著しく低いものである。(第51図1~5)。色調は淡赤褐色ないし濁赤褐色を呈する。底部の切り離しは、すべて回転糸切り技法による。体部はやや丸味をもって立ち上がり、内面にロクロ成形痕、外面にロクロ調整痕が明瞭に認められる。削りやナデ等の再調整はみられない。

第2類は、口径12cm、器高2.8cm前後の坏に近い皿形の土器で、口径に比して底径が大きく、器高が著しく低いものである(6~9)。色調は淡赤褐色ないし濁赤褐色を呈する。底部の切り離しは、すべて回転糸切り技法による。体部はやや丸味をもって立ち上がり、内外面にロクロ成形ないし調整痕が明瞭に認められる。削りやナデ等の再調整はみられない。



第51図 平形遺跡 出土土器実測図

第1類土器と第2類土器は、器形、製作技法に強い類似性を持ち、大きさが一回り異なるだけである。出土状況からみても、時期的に並行するものと考えられる。證明面に類似し、実際に内面に煤の付着も認められるが、性格については尚保留したい。本土器群についてはまとめの項で詳述する。

#### 須恵器（第52図1～5・8・9 図版41）

ロクロないし叩きによる成形後、環元炎焼成を行なった土器群である。器形には、壺・甕・摺鉢形土器がある。环形土器は認められない。

壺形土器は、器形の知れるものが3片だけである。1は大形の壺形土器の肩部と考えられるもので、外面に平行の叩き目が、内面に指による押圧痕が認められる。46は小形の壺形土器の肩部片で、外面にロクロ成形後のヘラミガキが、内面に横および斜方向の平行なナデ調整が認められる。

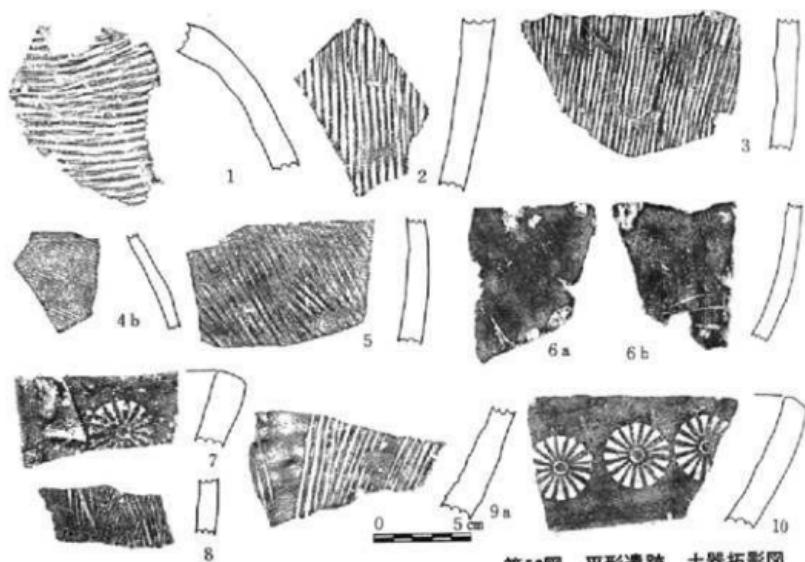
甕形土器は、体部内外面に叩き目を持つもので、外面には指による押圧痕が認められる。口縁部の形態は不明である。

9 aは摺鉢形土器である。断面および外面に輪積みの痕がみられ、内面に幅2.7cm前後の条線状の刻みを有する。

須恵器は、成形や焼成が比較的粗雑で、自然釉や黒くカーボンがしみているものもあり、珠洲焼の系譜をひくものかもしれない。

#### 陶磁器（第52図6・7・10 図版41）

4・6号溝状造構から青磁片が8片出土している。緑青色をした良質のもので、器形には碗、壺等がある。北宋の系譜をひくものかも知れない。4・6号溝状造構からは、灰釉



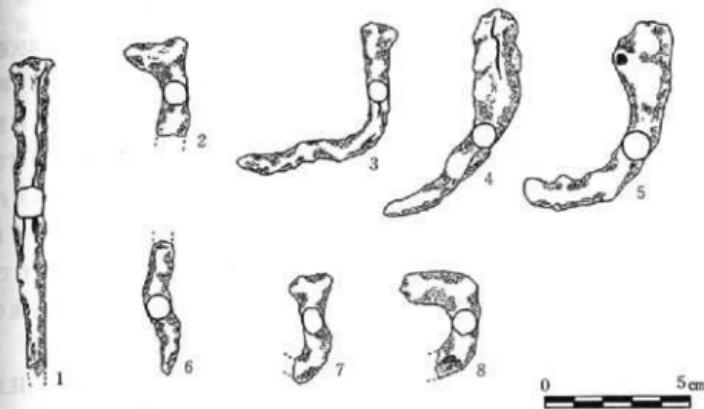
第52図 平形遺跡 土器拓影図

陶器および綠釉陶器も1点ずつ出土している。

平形遺跡の上層表土近くからは、比較的新らしい時期の陶質土器も10点程度出土している。6は陶質の鉢形土器で、内面に櫛目文が施されている。7・10は外面に印花文を並置した陶質の鉢形土器である。内面に縦方向のミガキがある。これらの陶質土器は、平形遺跡で検出された各遺構とは直接関連性をもたない。近世のものと考えられる。

#### 鉄器 (第52図 6・7・10 図版42)

本遺跡からは鉄製品が多く出土しており、その総量は整理箱でおよそ1箱ほどになる。これらは、いずれも腐蝕が著しく、しかも小片遺物が多いため明確な個体数を把握することはできない。現形から推定すると、形は釘形のものがかなり多い様である。ほかには、カスガイ形・鉢形の鉄製品などがあり、殆んどが建築用のものである。刀子などは検出されていない。これらの鉄製品は多く第4・6号溝跡からの出土によるものである。



第52図 平形遺跡 出土鐵器

3

## 6まとめ

- (1) 前述した溝状造構は、形態および覆土から4・6号溝状造構と、3・5号溝状造構の2種類に大別でき、各々L字状に配列する。とくに4・6号溝状造構には、炭化物、焼土および鉄製品が多量に包含され、あたかも焼失した建築材が溝内に崩壊した如き状況を呈する。これらに囲まれた中間地帯は、耕作等による削平が著しく検出が困難であった。ただしS1~3とピット11・14・15等は、建物の礫石および柱穴とも考えられる。北側と東側は発掘区域外に拡がる可能性をもつ。S1とS3との間隔は45m、S1とピット15との間隔は6.0mを測る。S1~3は第3次調査の隣接建物の礫石と推定されており(註四)、今回の調査ではこれを確認するまでは至らなかったが、その可能性を強くしたといえる。
- (2) 須恵系土器1類と2類は報告例が少ないが、庄内地方では藤島町村東遺跡(註五)、三川町横川B遺跡(註六)等、最近出土例が増しつつあるものである。
- ところでロクロ成形、酸化炎焼成の环形土器は、須恵系土器なる概念として問題提起されている(註七)。これによれば須恵系土器は、糸切りでロクロから切り離し、調整を行わず、酸化炎焼成をなすもので、器形的にはa類—須恵器に類似し、小さな底部をもち、体部は直線的ないしはやや外反気味にひらくものと、b類—口径が10cm以内と小型で環というよりは小型の皿と呼ぶべきもの、の二つに分かれるようである。平形遺跡の須恵系土器は、上記のa類とは器形的に異なり、強いて言えばb類に類似する。ただしb類は、平泉館跡や白石市植田前遺跡(註八)の例に見られる如く、体部が外反し内外面にロクロ成形の痕が明瞭にみられるものを標識としており、平形遺跡のものとは若干の異なりを示す。
- 時期的には、横川B遺跡の伴出古銭および本遺跡における青磁の年代から、鎌倉時代(13世紀)を中心をおくものと考えたい。
- (3) 須恵系土器の検討から、本遺跡は時期的に鎌倉時代(13世紀)を中心とすることが考えられる。今回の発掘調査は前荒田地区に限定されたものであり、上平形・下平形部落一帯を含む広義の平形遺跡についてはなお検討が必要である。ただしこれまでの3次にわたる発掘調査の内容とも考え合わせると、平形遺跡の上限は奈良・平安時代には過らないのではないかという予測を持っている。

註一 山形県教育委員会『山形県遺跡地名表』昭和38年

註二 柏倉亮吉・小野忍『平形遺跡第1次・第2次発掘調査概要』昭和47年

- 柏倉亮吉・小野忍 「平形遺跡第3次発掘調査概要」 昭和48年  
該三と同じ  
佐藤庄一・名和達朗 村東遺跡 「庄内広域芸農団地農道整備事業関係分布調査報告書」所収 昭和49年  
横川B遺跡遺物の観察結果による  
岡田茂弘・桑原滋郎 「多賀城周辺における古代环形土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要 I  
昭和49年  
加藤道男 植田前遺跡 「東北自動車道開通遺跡発掘調査概報(白石市・柴田郡村田町地区)」 昭和47年

### 第三章 横川B・D 遺跡

所在地	東田川郡三川町大字横川字大下52-2、35
調査期間	昭和49年7月22日～8月6日（延11日間）
発掘面積	240m <sup>2</sup>
調査者	舟山良一・佐藤庄一・尾形與典

#### 1 遺跡の立地

遺跡は、国鉄羽越本線藤島駅の北西約3km、藤島川の支流六ヶ村川右岸の沖積地にあり、現在は水田として利用されている。標高は約9mを測る。

#### 2 調査の経過

南東一北西にのびる農道を境として東側が横川B遺跡、西側がD遺跡である。

調査に先立ち調査区域に2m角の座標を設定した。座標は地形の関係からN-45°47'Wを縦軸とし、それに直交する線を横軸とし、横200m×縦120mの範囲を覆った。座標の呼称は次の様に行なった。調査区の西角を起点とし、そこから北東（すなわち横軸）の方向に40mごとに大区（I・II・III……）を設け、その中を横軸に沿って2mごとにA～Tとした。縦軸は、起点から南東の方向に21・22・23……とし、表記は例えばIH26とした。調査は任意にグリッドを掘ることから始めて、遺構を確認した場合にそこを拡張するという方法を探った（第54図）。

調査期間との関係もあって、最初は調査区全域をまばらに試掘していった。やがてIV区で遺構が認められ、以後はその地点に力を集結するに至った。

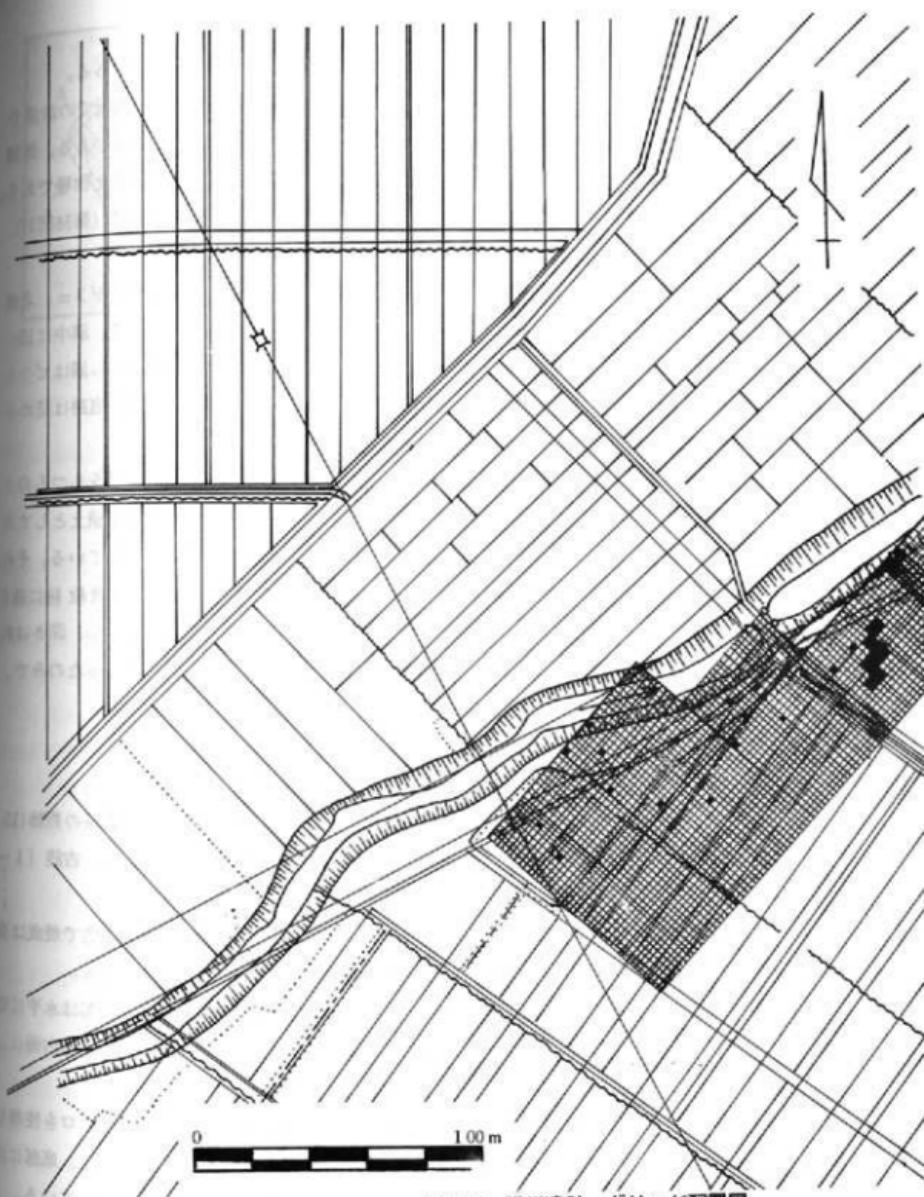
#### 3 発掘

当遺跡の層序は単純であり、20～30cmで水田盤床面をつきぬけると、もう黄褐色粘質の地山である。遺構はこの面から掘り込まれている。

横川D遺跡というのは、IIA31付近に五輪塔が晒されていたところから墓地か、あるいはその類のものと想定していたが、付近を試掘したところ、遺構らしきものは認められず、遺物の出土もなかった。よって、横川D遺跡は遺跡ではない、ということになった。

横川B遺跡ではIV区に第55図の様な遺構を検出したが、他の地点では遺構は認められなかった。

遺物は土器がほとんどであり、ほかに古銭・砥石などがみられる。



第54図 横川遺跡 グリッド配置図

#### 4 遺構 (第55図)

IVM46、J 52、H 47、C 54などに囲まれた区域に溝、土壤、ピットなどがある。  
土壤 長軸は略々南北に向く。長辺 220 cm、短辺 110 cm、深50cm何れも実測面での数値である。図によると重複している様に見えるが、土層観察によると単一のものである。埋積土はほぼ2層。土壤上端から10cm程、埋没後の被りがあり、その下は腐蝕炭化物層である。この黒泥層の上には焼けた粘土のプロックが点在する。黒泥層中より燈明皿(第56図17)などが出土している。

溝 錐形を呈する溝で長辺の方向が略南北を向く。長辺12.5m、短辺は南辺が3m、北側辺が1.5m、幅は最大110cm、最小50cm、深さはおおむね均一で約10cmを測る。溝中に15~50cm程の径をもつ河原石が遺っていたが、これらの性格に関しては不明である。溝はピット群を囲繞している様に思えたが、該当箇所を試掘したところ、溝と思われる痕跡は認められなかった。

ピット群 ピット群は二つに大別できる。IVG 52周辺にある20~40cm程の径をもつものと、IVI 50周辺の、径 100 cm余のそれとである。前者は何れも暗黄褐色砂層を埋積土としており、深さは10cm内外。うちひとつは溝南辺東端にあり、溝を切ってつくられている。それから、溝南辺のすぐ内側にあるピットの傍から、即ちIVH 51区から宋錢が10枚程に通された形で出土している。一方数者は、炭化物を含む黒褐色微砂層を埋積土とし、深さは約10cmを測る。これら2群のピットのうち、前者は溝よりも新しいことがわかったのみで、他にに関しては不明である。

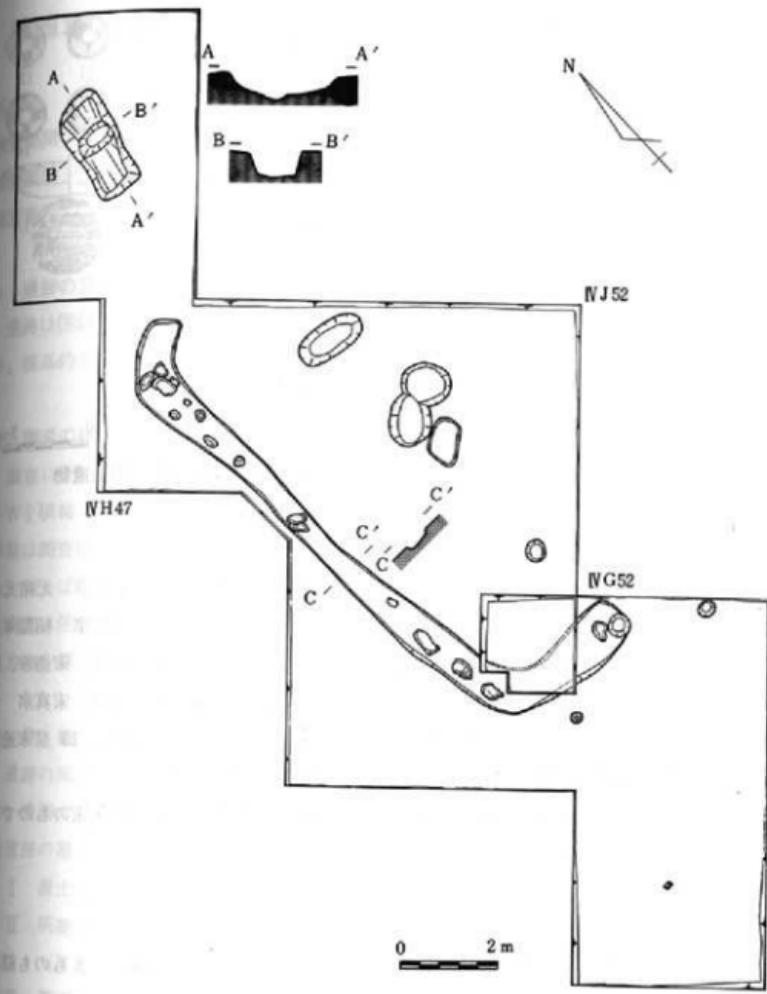
#### 5 遺物 (第56図)

遺物は土器・古銭・磁石などがある。土器には2種あり、ひとつは須恵器系の摺鉢(15~16)や壺などであり、他は酸化炎焼成された所謂燈明皿形土器(17)である。古銭(1~14)は全てが北宋錢である。

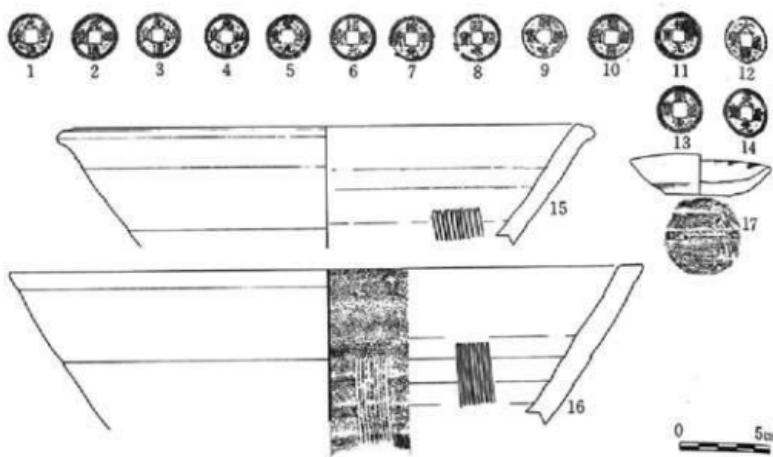
15は須恵器系の摺鉢であり、口縁径28cm、立ち上り角約55度を測る。灰黒色で焼成は良いが、胎土に粗砂が目立つ。体部内面に、幅25mmの間に10条のおろし目が走る。

16も須恵器系の摺鉢であり、口縁径33cm、立ち上り角約55度を測る。口唇部は水平に切れている。灰黒色で胎土は粗く、焼成は良好である。右回りロクロを使用。体部内面に、17mmの幅に8条のおろし目が走る。

17は燈明皿である。明褐色を呈する。口径 7.7 cm、器高約 2 cm、右回りロクロを使用し、切はなしは回転糸切りである。焼成時以前の段階で体部にゆがみを生じている。底部には乾燥時につけたと思われる凸凹がみられる。口縁部には燈芯による煤が付着している。



第55図 横川遺跡 遺構図



第56図 横川遺跡 出土遺物

古銭は次の通りである。順に図版番号、銭名、鑄造年代となっている。

1 元豊通宝 宋神宗 元寶元年(1078)。2・3・4 元祐通宝 宋哲宗 元祐元年(1086)。5 壬宋元宝 宋徽宗 建中靖国元年(1101)。6 紹聖元宝 宋哲宗 紹聖年間(1094—1097)。7 治平元宝 宋英宗 治平元年(1064)。8・9 政和通宝 宋徽宗、政和年間(1111—1117)。10 治平通宝 宋英宗 治平元年(1064)。11 祥符元宝 宋真宗 大中祥符年間(1008—1016)。12 大觀通宝 宋徽宗 大觀年間(1107—1110)。13 皇宋通宝 宋仁宗 宝元2年(1039)。14 天聖元宝 宋仁宗 天聖元年(1023)。

このうち最も古いものは祥符元宝。新しいのは政和通宝である。何れも北宋のものであり、北宋中葉から末期までのものである。

## 6まとめ

横川D遺跡は、打捨てられていた五輪塔をのぞくと遺物は無く、遺構らしきものも認められず、遺跡とは認められないこと。

横川B遺跡はⅣ区に上述のような遺構が認められたが、それぞれの関連、性格は判らず、只古銭等の遺物から鎌倉期頃に中心をおく遺跡であろうことが推察されるのみである。

## 第四章 須走遺跡

所在地 東田川郡藤島町大字須走字岸野52番地  
調査期間 昭和49年8月19日～8月28日  
調査面積 154m<sup>2</sup>  
調査者 舟山良一・佐藤庄一・尾形典典・佐藤正俊

### 1 遺跡の立地

遺跡は国鉄羽越本線藤島駅から北東に約3km、京田川（赤川の支流）左岸の沖積地に在り、標高約8mをかぞえる。現在は水田として利用されている。

### 2 調査の経過

調査に先立ち、調査区全域に2m角の座標を設定した。座標は地形の関係からN-46°30' -Wを横軸とし、それに直交する線を縦軸とし、横80m×縦26mの範囲を覆った。座標の呼称は調査区の東隅を起点として縦方向にF・G・H～M、横方向に11・12・13～40とし、例えばF-12区と呼称した。そして発掘はこのグリッドを1単位として行なった。

調査は任意にグリッドを掘ることから始め、遺構を確認した場合にそこを拡張するという方法を探った（第57図）。

### 3 発掘

遺跡の周囲は既に圃場整備の工事が始まっており、また京田川の改修工事があつたりして、遺跡はだいぶ破壊されている。

当遺跡の層序はおおむね次の4層に大別でき、ほぼ水平に堆積している。

- I 表土。約15cmの堆積。砂礫を多く含む。
- II 灰褐色砂質の無遺物層。6～12cm程堆積するが、部分的なものと思われる。  
(H-22から東にかけてみられる。)
- III 茶褐色粘質土で遺物と炭を多く含む。10～25cmの堆積。
- IV 地山。乳褐色の粘土。

遺構は第IV層から掘り込まれている。

調査区のほぼ全域にわたって大小のピットが散在し、遺構はこれらおよそ50のピットと2本の溝によって構成されている。そのそれぞれの関連は不明である。

遺物は土器と鉢津が最も多く、各々整理箱に半分程度である。土器は、ほとんどが細片で